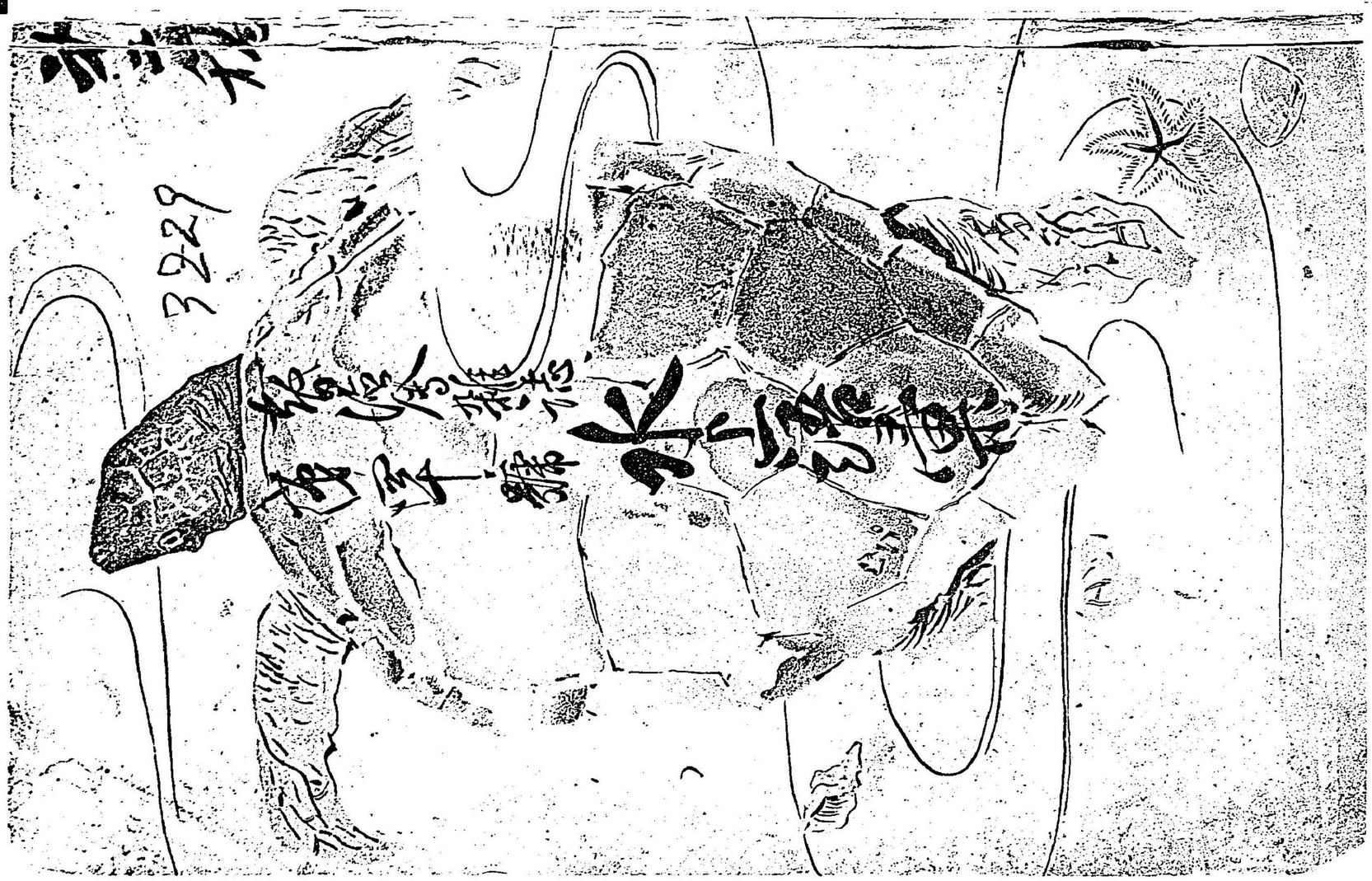


814 Ko476s

水上語彙序

明治二十六年予支那の史家が所謂倭寇の事に據りて小說を爲さんと欲したることありき。當時おもへらく、八幡船上の好漢を寫さんとせば、須らく先づ水上の事を知るべしと。乃ち雜書を涉獵して、事の苟も我が文を作るに資す可きものは、散木を棄てず鷄肋を辭せず、皆採錄して漫然一册子を成しぬ。これ此篇の成れる所以なり。

此篇既に成つて意猶甚だ滿たず、倭寇の事を叙せんとするの念もまた萎へぬ。たまたま大橋乙羽君光村利藻君、予を慫慂してこれを智德會雜誌に寄せしむ。芳情辭すべか

本書は著者の旧蔵書にして表紙に序二篇を墨書せるは著者の自筆也
五、八七、の両夏に自筆の書入あり

国立国会
29.7.22
図書館

337391

す、遂に敗鼓の皮を藥籠中より出して君子の案頭に上すを敢てするに至れり。

此篇もと自家の用に供せんとして爲れるもの、絶へて大方の覽を經んことを期せざりしなれば、體裁の整はざる、記述の精しからざる、いふまでも無し。看る人幸に咎むるなかれ。

名づけて水上語彙といふ、實は甚だ相副はず。水上といひて風を說き雲を說き、語彙といひて類書の體に似たるあり。是また自家の用に供せんとして任意に編錄せるが故に、自ら便とするところに從ひしのみにて、名實副はず、體裁純ならざるの責、もとより我が意とするところにあらさりしなり。

語に正訛あり、字に雅俗あり。强て論ずれば、舳艫のいづれか船首にして、いづれか船尾なるか、また急に辨ずべからず。これ字の字のみにて辨じ難きなり。艈の果して高瀨舟なるか、舸の果して高尾舟なるか、これ字と語と相當れるや否や辨じ難きなり。況んや、語の訛れる、字の譌れる、甚だ少からざるをや、誰か能く盡く辨ぜん。和名鈔に枻を不奈太那と訓せる如き、明らかに是誤謬なりといへども、通用既に久しきに、今これを改めんとせば、却つてまた一誤謬を生ずべし。こゝを以て、此篇、語字ともに能く通ずるを主として、眞に正しきを主とせず。俗字の字書に無きものも

且能く通ずるものは敢て忌むこと無し。

石井民司、米光龜二郎二氏、此篇のために力を致せること甚だ少からず、石井氏の勞特に多しとす。

予もと舟楫の事を知らず、加ふるに舟楫の事を記するの書甚だ乏しきを以てす、錄するところ自ら解する能はざるもの無きにあらず、博雅の君子の教によりて訂正增補の幸を得んことを望むや甚だ切なり。

明治三十年七月

幸田露伴識

水上語彙

ア

アカ　閼伽。淦。淦。舟中に滲入せる水、別名フナユ、又、ユ。――のいりたるをユイリといふ。

アカシフネ　明石船。乘合舟にて明石大阪間を往復するもの。

アカドメ　淦水遏め。淦を遏むること、其法シュンを塗るをシュンドメと云ひ、クサビを打つをクサビドメと云ふ。

アカトリシヤク　淦取杓。淦を汲み去る柄杓。川舟にてはユトリと云ふ。

アカボシ　明星。啓明。金星の曉に見ゆるをいふ。

アカマ　淦間。淦室。船中局部の名、淦の集まる間、屋形通りの下の間、買船にては舳にあり、關舟にては筒の前にあり、艫の續め舳のつぎめにて考ふべきなり、舟の中程、一番低きところを云ふ。關舟にては眞中なり、荷舟にては少し艫の方へ寄るなり、表の間、將几の間、淦間、筒の間、艫の間などいふ名目あるなり。

アカマノフナバリ　淦間の淦舟梁。間にある舟梁。

アカラヲブネ　赤羅小船。赤く彩色せる小舟。

アガリバ　上り場。上陸すべき地、岸深く足入ならず、潮の干滿少く、見切所遠く、覆兵の場なく、左右廣きを可とす。

アキンドブネ　商船。舶。商用の船舶、即ち買船の類。

アキノテンキ　秋の天氣。俗の所謂秋の天氣とは、七月の頃、朝やけとて東方赤く雲氣立ち西へ廻れば雨、夕やけすれば晴る、七月夜の中、未申より雲出て東へ入れば少雨、雲脚早く北へ走れば大雨、又、丑寅風にて雨を催し、其風止まず、未申へ廻り東南の雲黑くならば大風、尤も此月夜冷なれば無風、熱ければ南風吹き出し、雨なり、八月十日後、辰巳の方より風起り戌亥へ入れば大雨、若し降らざる時は大風萠すなり、いつも秋の日和は見定めかぬるなれど、風凉しければ變なし、濱にて南風吹けば雨といふ。

アクタブネ　芥舟。農家にて用うる小船にて、糞尿塵芥をのする故の名。

アクリフネ　網拷舟。漁網の繩をたぐる舟、手繰船

に同じ。

アケノソホフ子　赤曾保船。色漆にて赤く塗りたる舟。旅にしてものこひしきに山もとの――沖にこく見ゆ。

アゲル　上る。水戰の語にて味方の帆を張ることを――といふ。

アサヲヅナ　麻繩。苧綱。麻苧にて造りたる綱。

アサコツナ　字未詳。萱の穗にて造りたる綱。

アサツテイ　字未詳。薩州の廻船、エットウと同じ作りにて、大なるもの、船枻四階造りなり。熊野浦にてはハッテウといふともいへり、アダテの條を見るべし。

アサカヂ　淺舵。合戰の時は――にす、深く入るれば進退自由ならず。

アサツマフ子　朝妻船。朝妻の船。近江國湖岸の名所を呼ぶ船、織田信長船十四艘を造らしめ、朝妻より渡海のとあり。おぼつかな伊吹下しの風ささに――のあひやしぬらん。

アサノテンキ　朝の天氣。朝あけして四方紅きは晴、赤くとも頓て黑くなるは雨、又速に淡くなるも雨。

アサビラキ　朝開。朝に船出すること。

アサマノミカミ　朝熊御神。みふねの神の條を見よ。

アサヤケ　朝霞。出る日の紅く見ゆるを云ふ、雨氣の兆なり、雲の日出前に赤きこと、或は云ふ春夏は雨、秋冬は晴。

アシ　足。喫水。（一）船の深さ。（二）船の腹をいふ、イリアシの條を見よ。

アシイリ　足入。（一）海岸の泥深さところ。（二）船の喫水。

アシイリツリアヒ　足入釣合。積荷の重力の平衡。

アシガルクバリカタ　足輕配置。船中にては船首に士、船尾に卒を乘するを法とす、足輕を船首に置けば手詰の勝負出來ざればなり。

アシガルカコ　卒をして舟子たらしむるをいふ。

アシツギフ子　脚繼舟。端艇。ハシフネに同じ。

アシブ子　葦船。古昔蛭兒の乘せて流されしといふ葦の葉船。

アセル　涸。海水退きて底を見はすこと。

アタケ　阿武。安宅。大船の惣名。阿武の大船に貝鐘を鳴らし云々。

アタケヅクリ　阿武作り。戰船式。伊勢物作りの類の舟、軍用の大なる船の式によりたる。

アタケマル　安宅丸。豐臣太閤の作らしめし船、龍頭作りなりしといふ。

アタケフ子　安宅船。阿武船。（一）戰用の船、其制、伊勢物造りに似て最も堅固なり、走ること早く、內海外洋皆用うべし、本帆を掛くれば一日三百里を走る、故に內海を走る時は帆を細くして快進を節す、船枻二重或は三重にして總矢倉、鐵砲楯あり、水楯水幕を垂る、石火矢を備へつくるもあり、總大將の居る本船とす、寬永十二年向井忠勝に命じ、德川氏相州三嶋浦にて作らしむるもの、長三十尋銅を以て覆ひ櫓は二百挺と云ふ。（二）櫓八十挺以上用うる船を――といふ。

アダテ　字未詳。肥前豐後の地方の廻船の名、薩摩にてアサッテイといふに同じ、四五百石六七百石積なり、俗呼でマクラバコといふは前後戸立作りにて其形の似たる故なり。

アヅマオモテ　吾妻表。箱づくりの船の表。

アヅマニヨシ又**アヅマミヨシ**　吾妻女首。吾妻水押。尖らぬ水押、別名ハコニヨシ、ヒラタ舟のおもての如く、箱のやうになれるもの、安宅制の舟の首など。或はベザイ作りなんど荷舟作りの舟のオモテふくらみ底平にしておもてに水を抱き水をきりこまぬ故に能く浮く製の水押。

アナジ　字未詳。アナゼに同じ風の名、（一）戌亥の方より吹くものを云ふ日和を主る冬春に此風及び西風多く吹く。（二）西北風。――にはこのしまのみや白妙の雪にまかへる波やたつらん。

アバキ　字未詳。波の一種、岬端を吹き廻したる波

アハセイカリ　合碇。

アハセマク　袷幕。

アハチフ子　淡路船。淡路の國の舟、

アビイカリ　合碇。風波にて碇かゝらざる時合碇といふ事するなり。

アヒコトバ　合言葉。相言葉。船戰に敵味方を知る便とする符號の語、風か波、碇か打、嶋か嶋、日か照、楫か櫓の類の問答。

アヒサン　間三。傳道船なり、三十石積の船と四十石積の船との間の三十石船と云ふ義なり、之に對して常の三十石船を小三と云ふ。

アヒジルシ　相印。水戰の時用うる船の――、船の名か一二三の番號を舳又は檣の蟬本につけ或は船主の姓名を板机に大書して艫に立つ。

アヒヅノハタ　相圖の旗。水戰に用うる相圖の旗、小旗四半、本船――は四方に下知すべき表標なれば船の中央に立つ、其他の船は先備の船は船尾に後備の船は船首に立つ、相圖の提燈亦同じ。

アヒビキノナミ　字未詳。波の名、強き時は艫碇を入る。

アヒブチ　相綠。シトミフチの條を見よ。

アフギイタ　扇板。船の箱造りの小名、左右にありて其形扇の如し。

アフギタツ　扇立。

アブラ　油。船中にて燈火の用に供へ、又船底をたでるに用ゐ、戰時は之を敵船に注ぎ其行進を留む。――石灰は――に石灰を和して煉りたものにて船底にぬりて蟲の付くを防ぎ又水切れをよくするに用う。

アブラカゼ　油風。二月頃吹く軟風。又四月頃吹く風。

アブラマシ　油風。三月土用前頃吹く南風。

アマオホヒ　雨覆。船中の局處の名、船の垣立の――にて左右船尾眞向廻りにあり、艫垣につくところをクリ――と云。

アマガカリ　檣の條を見よ。

アマガサキトカイ　尼崎渡海。攝津尼崎の船にて、渡海造りの一種、西宮渡海より小なり、日々大坂に往來す、多くは四十石積のもの。

アマカラミノナハ　天絨繩。檣を帽子或は筒挾にからみつくる繩、ホヅヽシメナハ同じ。

アマグモ　雨雲。雨を含み、塊つて黑みわたる雲。

アマゴゼン　海士御前。瀨下大神のこと。

アマノイハクスブ子　天磐樟船。古代の船の名、天の磐船、又烏樟船、伊非諾伊非冊尊の化生するところと傳ふ。

アマノトリフ子　天鳥船。古の船の名。高皇靈尊の造らしむるところ。

アマノミヤキフ子　天材木屋船。船代の條を見よ、

アマノラマセン　天羅摩船。少彦名命の乘りし船と傳ふ。ラマセンの條を見よ。

アマフ子　天船。倭姫命天照皇太神を載せ奉りて尾張國中島宮に遷しまします時美の國縣主角鏑御船二隻を作つて棒く――は天の曾古立、抱船は地の御都張と申して奉る。

アマフ子　尼船。尼崎渡海のこと。

アミタケ　編竹。三五間長の竹の節を全くぬき、細引にて編み、垣立より舟ばた左右へ釣るもの。其功水ブトンに同じ。

アミヅナ　細綱。古鯨網等にて打ちたる綱。イハラ同じ。

アミマク　網幕。有合の漁網を集めて幾重にも張り矢玉を防ぐ用とするもの。

アム　編。船を――、船をつくること、古語なり。

アンカウ　鮟鱇。キリの俗言。トタテの條を見よ。

アメ　雨。申子辰時に降出す――は長し、巳酉丑の時は頓て晴る、寅午戌時のは降り降らず曇る、亥卯未時のも同じ。

アヤカル　字未詳。海上に陰火を生じ舟につくを云ふ、アヤカシックともいふ、暴風などの前兆とし、舟夫怖る。

アユノカゼ　字未詳。北國の方言、東風をいふ。――いたく吹くらしなどの海士のつりする小舟こぎかへる見ゆ。

アユミ　字未詳（一）水主の居て櫓を押すところ、弓を射る時は弓の下ほこ支へぎるため――の板をとり外しにす。（二）艣板、歩板、陸耳同じ、舟より陸へかくる橋板。（三）字未詳。挾と二名一物なり海舟にて――河舟にてハサミ。又上にあるを――、下にあるを挾と云ふ。表――艫――あり。帆柳にあるを中挾といふ。艫――の留り立を牛頭立と云ふ。

アラ　海。古き語、うみ同じ。大――ひろく遠くして國を見ず云々。

アラシ　（一）暴風雨。（二）嵐。一村づゝ吹き來る風、此風に波浪つき來る。

アラハヘ　字未詳。五月梅雨の頃に未申の方より長く吹く風の名。

アリマロドコ　字、義未詳。

アヲギタ　字未詳。北風の長く吹くもの。

アヲリ　淡落。船枻の加舗、中枻、上枻、下通りの總稱。

アヲリイタ　淡落板。船のアヲリに打つ板。

アヲリクギ　淡落釘。淡落板を打つ釘。包釘の名。

イ

イウジ　虹。にじのこと。

イカダ　筏。竹木を編みて舟の如くするもの。

イカダフ子　桴船。二個の細長き箱を上下二樣の横木にて組合せたる軍船。

イカリ　碇。水に投じて船を止むる重りにて多く鐵にて作る。一方四つの爪あり、一方の環に一環を連ね、之に長き綱をつくこれ碇綱なり。古は石をくゝりて用ふ。イカリマキ、イカリオロシ、ヒキオコシ、トツタリ、ソニグチ、ウケ、浮綱等。千石積舟に鐵——八頭、重さ鐵目四十貫より八十貫に至るを法とす。——には舟の名を彫りつけ置くを法とし、一船に凡そ五個の積りにて、重さは帆端の八分掛とす。小名——爪、——綱、——繩。

イカリカキヨシアシ　碇搔善惡。沙泥石礁等の差にて海底の錨を止むるに緩緊の差あること。錨にて其可否を穿鑿するを——を檢る。

イカリキリガツセン　碇切合戰。風雨の夜など潛に敵船の碇綱を切斷し船を陸に衝突せしむる水戰。

イカリツナ　碇綱。ツク、白口、苗、スグリ、シツラ、アミ、カミ、ツラ、藤、クヽ、マサキ、竹の各種あり。

イカリテンマ　碇傳間。橋船の條を見よ。

イカリバン　碇番。船營の時夜中など敵の水練者水に入り碇綱を切ることあり之を防ぐがため小舟にて護ること。

イキヌ　生簀。荷物廻船の荷の下に敷く竹簀。

イキアヒノクスリ　呼吸合の藥。舟戰の時息の切れざるための藥にて甘草細末を梅肉に煉り交へて作る。

イクリ　礁。石。いし同じ、塊の義歟、上略、ゆらのとのと中の——にふれたつなつのさのささやさや。

イササカケブ子　緞懸船。帆掛船のことゝぞ。わたつみの浪のまに〳〵たゆむなり——さゝうこけとも。

イサバ　磯場。小舟の一種、磯邊を行く小舟の義、一名磯邊舟。

イサム　勇む。水戰の語、貝を吹くこと。

イサリブ子　漁舟。魚取る舟。

イザヨヒ　十六夜。（一）月の十六日の夜。（二）——の月の略、十六夜の月のこと。

イシカハノフ子　石川舟。石多き川の舟は底に竹簀をあて其間に空隙を設け舟の損じを防ぐ。

イシフ子　石船。（一）石材を運ぶ舟にて各地の名を以て名とす、御影舟紀州石舟等の如し。攝津川舟の——は船の側の上に板を敷きならべて釘付にし、其上に石をのせて運送す、一名圍兵衛。（二）海人の釣に出づるとて船の輕きを忌み石を入れて沖に出て、魚を得れば從つて積みたる石を捨つるなり。まつ松に吹かせてねとをいつるなりあかしの浦のあまの——。

イセフ子　伊勢舟。伊勢の國名をよぶものにて本邦古昔の船形なり。俗に親舟をも——といふ。表の形常の水押にてモギ先なく、箱おきなり、この故に表を箱作りにするを西國にて吾妻表ともいふ、又水押の形二つある故にフタナリともいふ。

イセモノツクリ　伊勢物作り。アタケ作リ、サイガ作りなどに似通ひて、水押なしに舳を高く平に作りたる類の大船。

イリベブ子　磯邊舟。ィサバの條を見よ。

イダクフ子　抱船。アマフ子の條を見よ。

イタゴ　板子。フタテの條を見よ。

イタメガハ　革。舟楯の割れぬため用うる革。

イチテフ　一帖。幕を數ふる語、二張のこと。

イチノフナバリ　一の船梁。

イチノカラカイ　字。義未詳。

イチニンガカリ　一人掛り。小櫓をいふ。

イチマンノセイ　一幡の勢。五百騎以上大船三百艘を一列とする以上をいふ。

イチヒツナ　苗綱。いちひにて打ちたる綱。碇綱として其力加賀苧につぐ、其色かゞ苧は白く——は黑く黄なり、廻綱三綱の一。

イチバンイカリ　一番錨。千石積に用ふる鐵錨。一船にすべて八頭あり、其——と稱するものは重八十貫目餘なり。大船に至りては百貫目に及ぶ。

イツシヤウ　一升。帆を十分に張ること。帆を——に張る。七合八合九合と次第にいひて——を十分とす。

イツテフ子　五手船。櫓を十挺立てたる舟。十人にして漕ぐなり、櫓二つを一手といふ。十挺立小早の條を見よ。或はいふ、伊豆國より枯野といふ舟を作り出して妙なりければ伊豆出船の義なりと。されど後說非ならん。清輔顯昭貞德等以後さまざま說あり。

イツノホシ　一の星。

イツボンミヨシ　一本水押。水押の制の一種。水押の條を見よ。

イヅルカゼ　出る風。山の突き廻しより此方は良き風にて、山より彼方は逆風なるをいふ。

イナサ　（一）辰巳の方より吹き來る風の名、雨の前兆とす。（二）巳の方より吹く風。

イヌドキアメ　戌時雨。戌の時に降り出す雨、降り降らず曇る兆。

イヌカヒボシ　犬飼星。牽牛星の事。

イヌコロシ　犬殺し。シカマブチの俗名。

イハラ　字未詳。網綱に同じ。

イハフチダイメウジン　岩船大明神。河内國岩舟山にある神。天の岩船の故事により舟子の信ずるなり。

イヘンノアヒヅ　異變の相圖。漁船など異變ある時有合の筵笘等を水竿の先に結びつけ船にたてゝ伴船に知らする相圖。伴船之を見れば四方より集り相救ふ。

イマ井フチ　今井船。浪花より禁裡へ上る生魚を載せて行く早働きの舟。今井道伴の創むるところなる故に名く。本名手繰船。

イミコトバ　忌言葉。船夫の言ふを忌む語。かへりかへる等の如し。

イミヒ　忌日。俗の乘船に忌む日。春巳酉夏は亥未秋は辰冬は丑の日乘船に忌む。

インセン　陰船。（一）舟戰の時輕快ならざる大船を指していふ。（二）水戰に陰陽の備といふことありて、陰の備に當れる船をいふ。――を以て一向に合ひ陽船をもつて二裏と横合よりかゝる。

インベノフチ　齋別船。神祇荒魂――を奉る。

イリアシ　入足。吃水。船の水中に入る部分、フナアシの條を見よ。

イリヒノテンキ　入日の天氣。入日の時紅色と青色と雲の亂るゝは風、日の入りて後西赤く次第に薄くなるは晴、日の高入りするは日和の變る兆、入る日の焦げ色は陽氣の疲れにて雨氣の兆。

イリミナトノトキ　入港の時。船戰中――とは未申の刻なり。夜に入れば諸用辨じ難き故なり。

イレカシラ　入頭。釘の頭を隱す金具。船の上枻知利に用う。

イレコ　入子。櫓の小名。櫓に打ちつけて櫓杭の頭を入るゝ孔。

イレコフチ　入子船。（一）疊船のことにて、入子にせらるべきほどの小舟といふ義。（二）浮沓のこと。

イワシグモ　鰯雲。魚の群れたる如く點に相連りて空に溜る雲。芝浦の漁人も網をうちわすれ月には厭ふ――かな。

ウ

ウアメ　卯雨。卯に降り出る雨、降り降らず曇る。

ウヲヲハラフ　魚を拂ふ。洋中にて大魚の群に纏はれたる時、靜に人影をかくし、板子の類にて音高く船ばたを叩くこと。

ウヲダナ　魚棚。遠干潟のこと。

ウカシロ　浮し櫓。義未詳。

ウカヒフチ　鵜飼舟。（一）東國の山川に多し、鵜を用ゐて魚を取る小舟、其制は高瀬舟に似たり。（二）白石より桑名に往復する旅客をのせ荷を積む舟、其制異樣にて上棚なく箱作りに似て舳艫分ちがたし、近國の者この舟をいひて艫が表か表が艫かといふ。長七八尋ばかり、深くして細く長く、打がいを用う。

ウキ　浮。浮嚢。紙を圓く卷き、漆にて固め、漆布を被ふこと數度にて各徑三寸長五寸ほどに作り、六個を重ね、網に入れ、乳の邊にまとひて――となし、水を泳ぐ用とす。或は革にて作る。

ウキクツ　浮沓。浮嚢。小瓢二三十個を布に縫ひくるみ、一筋は襟にかけ一筋は腰にまとふ、之を――或は浮だすきといふ。

ウキキ　楂。浮木。船をさして歌などにて云ふ星槎の義によりて歟。いくかへり行かふ秋を過してや――にのりて我かへるらん。

ウキダスキ　浮襷。浮ぐつのこと。

ウキツコツム　字未詳。船の異名。わたつ海のしらさゝめこえあま人の――にのりつりに行く。

ウキツナ　浮綱。

ウクタカラ　浮寶。船のこと。

ウケ　浮。（一）兵家にて腰にする浮嚢を――、足にするを浮沓といふ。浮沓の條を見よ。（二）泛子。網、釣絲などに付くる浮木。（三）船の異名。

ウケキ　浮木。泛子。ウケ同じ。

ウシノアメ　丑の雨。丑時に降り出す雨、頓て霽る。

ウシロカケナハ　後掛繩。船の川に入る時、舵を引

あげて淺むる網。大水越の上に穴あり、同所のそばにほりこみ身木の内に車あるなり。又所によりては鳩胸とも云。

ウタス　打たす。水戰語。我船の敵丸に打たるゝを、語格をかへて云ふ。

ウチアミフ子　打網舟。江湖池川にて投網もて魚を捕ふる小漁舟なり。一人船首にて網を投ち一人船尾に居て棹さす、之を棹子、柁子といふ。四ッ足日覆等ありて遊興に供する制のものもあり。

ウチガイ　打櫂。槳。楫。檝。橈。（一）前に推すカイ。船枻に繩を罠にして之に通し、左右の傍にありて短く、船枻を櫓床にして横に水を撥き、前へ出して船をやる。河江船ともに用ふ。（二）傳間船は皆――を用う船の長さ八尋九尋十尋餘、槳六挺八挺十挺或は十二挺十六挺其舟の大小による棹夫兩邊にあり、舷を槳床とし後に向つて水をかき船をやる、柁を用ゐず、練櫂なり。

ウチカギ　打鈎。ハッキ。一名ハシリ。又、手すまる。鳶口の尖頭を鎌の如く曲げ、二三尺の柄をすげ、柄の孔に細引を通したるもの。又はゲンノウをもかく作りたるもの、敵船に打ちこみ引寄るを用とす。

ウチヌキ　打貫。鐔鑿の鋒なきもの。大船の釘孔を穿つ時、先づ鐔鑿にて孔をほり、――にて打貫き孔をさらふ。

ウチノゾキ　打除。舟戰語、味方の敗軍を云。

ウチマク　内幕。胴壁の内方に引く幕。

ウチマハシ　打廻し。猿すべりのこと。樫の木の短く削りたるを簾の如く編み列ね輪としたる物、中に一本長きあり、其端に繩あり、其繩にて帆桁を檣につけ、檣を卷きすべらして帆を上下す。未だ編まざる小木を小猿と云。

ウチモノ　打蟬。セメコミカナモノの條を見よ。

ウツ　打つ。（一）帆を――、上ぐること、（二）碇を――、入るゝこと。

ウヅマクトコロ　渦く所。潮水――は舟を卷きこまるゝ惧あり、故にかゝるところを乘る時は笘か筵の類を投げこみ其間に通る。

ウヅラ　鶉。繩の名。櫻綱と加賀苧を綯ひまぜて繩となせるもの、其色――の羽の如くなれば云ふ。水繩等に用う。ハカセの條を見よ。

ウデ　腕。櫓の小名。

ウデハ　字。義未詳。

ウナギノカハ　鰻の皮。讃州の方言、蛇袋のこと。

ウネリ　波の一種。大風の吹き來る前、大なる浪の靜に――立つをいふ。大曲線をなして音なく來る。浪。

ウハタナ　上枻。上棚。船側の上板にてナラノヘ、フナヘタ、フナハタ、フナハラ同じ。二階の上にあるを云ふ、中棚の上にあり。船のへり。

ウハニ　上荷。（一）船の上荷。（二）本船に上荷をつみ、又は本船より上荷を取る荷船凡二三十石積のもの。七村――中船――新舟――堀江――播磨――界――房州――等各其制に小差あり。（三）攝州川舟。

ウハマハリ　上廻り。船の上半身。

ウヘオホメ　上大目。柁の小名。

ウマノトキアメ　午の時雨。午の時降り出す雨、降り降らず曇る。

ウマノカシラ　午の頭。艫の小名。艄を子丑といふに因て名づく、一說に荷舟にては二本立といひ、左右に佛神を安置す船頭の居所なる故間の頭といふ。――タッは艫歩みの留り立にて、荷舟にて云ふ二本立。

ウマノリタツ　馬乘立。艄水押の付留にありて跨る故の名。小早鯨舟渡海舟等あり。

ウマフ子　馬船。軍馬を載する船。軍船の如く胴かきつくろひ中へ板仕切をなし一疋立にす。又大船なれば尻合せに二疋立にもす。又病馬の間を廣くすることあるべし。簀板を丈夫にして船枻を仕掛け、下の舟底には積物をす。尾を厚く丈夫に作り、蔀の作り樣あり、馬屋は立六尺横二尺八寸乃至三尺許にて、馬の伏す樣にす。大船あれば中道をあけ。馬屋を兩側に作る等の制あり。

ウミヲウツ　海を擊つ。戰語、海にある敵を陸より擊つこと。

ウミガフクルル　海が脹るゝ。引くべき汐の引かぬこと。

ウミニトビイル　海に飛び入る。兩足を舟端に蹈揃へて飛び、必ず片足にて飛ばず。

ウミノミヤウ　海の見樣。高山の麓は深く、山遠きところは干潟なり、山の並べる麓にはソァキあり、水色白く小浪高く立つ、湊口の水尾筋は水色青く、川港の突出しは水色鼠色なり、石川の入口には○

○あり、砂川の川口には洲あり、水色白く小浪立つ、嶋山水際等險しきところには瀨あく、山麓なだれざるところは深く、平濱は淺く、底に藻ありて水色木賊色をなす、奥廣き港は口狹くして潮の差引强く、奥狹き港は口廣くして淺し。是等を――概略とす。

ウミノモユル　海の燃る。大風の時浪の夕日に映りて火の燃ゆる如く見ゆるを云ふ。

ウラウラノカウサツ　浦々の高札。浦々に立々られたる高札。例の一を擧ぐれば、其文に曰く「國々の廻船漁船海上に於て異國の船と相親み候儀前々より御法度の事に候今般浦に於て異國船乘寄次第可打拂旨改て被仰出候間船方漁民等彌嚴重に相守り船之乘筋等可成丈異船に不出會樣心掛可申もし異國人に親み候儀を隱し置後而相顯においては可被處嚴科有體訴出候はゞ一旦同意の者にても御褒美可被下候間不相包可申出ものなり」この類なり。

ウラカタバンショ　浦方番所。洲崎など敵の上陸すべき所へ立て置く取出番所にて相圖をする所。物見番所同じ。

ウラガ子　裏尺。曲尺の背にある尺にて其一尺は表の一尺四寸一分四厘餘に當る。柁其他を作るに工人の常に用うるもの。

ウラジロ　裏白。風の名、まじ風。

ウラハフ　浦法。沿海地方取締の規則。

ウルシ　漆。船をぬるに用う。一は舟の飾となし、一は水を彈きて疾く進み、一は船の腐朽を防ぐ。ぬり舟の條を見よ。

ウロコガタ　鱗形。魚鱗の形、三角形。舟の陣形。

エ

エウセン　要船。廻船荷船を軍用に供する時の名。

エガタ　字未詳。舟戰語、團扇のこと。

エキロノフ子　驛路の舟。鈴舟のこと、すゞぶねの條を見よ。

エダイカリ　枝錨。

エダフ子　枝船。供船又は小舟を云ふ、大船を本船といふに對す。

エナガマガタナ　柄長山刀。造船工の用うる具。

エブリ　。櫂手斧の柄。

オ

オイツキノデリコ子　老月の出損ね。老月とは十四日以後を云ふ。若月入ソコヲ――とて必ず日和異る故に、若月には入るを見、老月には出るを見るなり。此時節日和異らず雲立ち良ければ明日は日和と知るべし。

オキイタ　置板。ヘサキの――、箱造の小名。

オキセンドウ　沖船頭。海上にある船長の義、商船の船長は必ずしも海上に在らねば、對して云へる稱。

オキスヂ　沖筋。

オキニテミヅヲトルハフ　沖にて水を取る法。海底五十尋以下には鹹氣淡きものなれば先づ樽に二つの栓を爲し各に紐をつけ又別に樽に一筋の綱をつけ重りして沈めたる後一栓を去り淡水滿ちたりと思ふ時樽を引き上ぐといふ。甚だ疑はし。

オクコ　トビセミの條を見よ。

オクミイタ　衽板。反臺の下にあり、衽の如き形せる板。

オクリマジ　字未詳。七月頃未申の方よりマジをかたらひ吹く風。

オクレマジ　字未詳。ぼんごち過ぎて吹く南風。おくりまじ同じき歟。

オコス　起す。(一)舟戰語、檣を立つること、(二)碇を上ぐること。

オサヘ　押へ。小舟にて櫓を――といふはおもかぢにせよとのこと。

オシイレスル　押入する。舟の癖にて一時は早く舟行きて頓て遲くなるを――といふ、然る時は舳の荷を艫へこし舳下になる樣にす、之を舳イキといふ、舟行早くなるなり。

オシサラ　推篙。

オシツケ　押付。陸の射向は舟の――ともいへり。陸には左を射向とし面とす。船にては船の右を射向とし面とす。

オシチツヒコ　推根津彦。神武天皇東征の時御舟の導きをなせし漁人の名。

オシマハシ　押廻し。舳を高く曲げ上る故の名、千石積以上の大船。

オス　推す。櫓を――。

オチコミ　落込。一名オチツマリ。柁の小名、落し

込床にあふところ。

オトシ　落釘、オトシクギの略。縫釘の條を見よ。

オトシコミトコ　落込床。枕のおちこみの合ふ所。

オヒカゼ　追風。順風。船の後方より吹く風。――に風はなほりて吹ぬともあまのいかりにとゞまりやせん。

オヒテ　追手。順風。オヒカゼ同じ。

オホウミノカミ　大海神。攝州住吉明神の攝社にて、海上守護の御神。

オホコハヤ　大小早。中武見、又は少しの加勢等をする軍船、或は軍奉行武者奉行をも載す四五端以上六七端までの船。

オホコフ子　大古舟。人の得乘らぬ廢船。

オボセ　字未詳。四月の好き天候の頃吹く南風。

オホソコイタ　大底板。荷舟又は大なる早船の船底を包む板。ツヽミ板の條を見よ。

オホソコクギ　大底釘。包釘の大なるものにて船の大底を打つ釘。

オホサカフ子　大坂舟。大坂より仕立出す廻船。荷舟槍垣等。

オホシホ　大潮。月の八日より四分づつ增し十五日に――となるなり。

オホタツ　大立。一名鳥居立、トモにある大立。

オホツギ　大繼。中枻を表にてつぐを云ふ。大船に至りては二階三階にし表は五階作りにす。

オホツナキリ　大綱切。舟戰の時敵の引綱碇綱等を切るもの。形大庖丁の如し。

オホドコ　大床。

オホナミフタツミツ　大波二つ三つ。六月より七月上旬の頃大波二つ三つ打ち來ることあること、遠國にて大風吹きたる餘波といふ。

オホニシ　大西。十一月十二月頃吹く風の名。

オホマハシ　大廻し。(一)大渡し鐶の別名、帆足をとる綱を通すもの。鐶の條を見よ。(二)前掛繩。(三)遠く運ぶこと、――荷。

オホマハシナハ　大廻繩。帆の條を見よ。

オホマハシヤゲンゾコノフ子　大廻藥研底の舟。即ち荷舟の制。

オホロ　大櫓。櫓床の間の二尺八寸あるもの。一人がかりなり。

オホワタシ　大渡。帆の條を見よ。

オホワタシクワン　大渡鐶。大廻の條を見よ。

オホワダフ子　大和田船。攝津の所名をよぶ小舟。耕作と通船とに用ゆるもの、舟側をすぐに通して水押に作り、上枻を戸立の外へ出し横ぐもにす。大和田作りともいふ。

オンイサミ　御勇。神停山大神の條を見よ。

オンフ子　御船。(一)伊勢兩宮の御神體を覆ひ圍み奉るもの船代の條を見よ。(二)舟を尊んでの稱。

オモカゲ　面梶。卯面梶。重梶。左枕。船首に向ひ船を右方にやる枕のとりかた。

オモカワラ　面航。

オモキツクリ　重き造り。北國船の條を見よ。

オモテ　閤間。船の首をも尾をも――といふ。但首を――といふが常なり。

オモテゴザシヤウギブ子　表御坐將几舟。十八九端帆の大船にて引舟に引かするもの。

オモテシ　表仕。舟の表に働く船夫。

オモキ　字未詳。丸木船の枻の上のハギ。

オモテニヤマヲツクル　面に山を作る。大船なぞ――時は舟かへらず。波を入れざること。山陰に入るの義。

オヤニナヒボシ　親擔星。からすき星に同じ、參宿をいふ關西方言。

オヤフ子　親船。(一)本船。傳馬舟に對して云ふ。(二)伊勢舟の本名。

オリ　字未詳。潮の退きたる義。ソコ――、畧してソコリ。

オリマゼ　字未詳。七月末吹く風の名。

カ

カイ　櫂。楫。舟の旁にありて水を搔き舟を進むる具。樫にて作るを常とし、櫓、櫟、マテバシキをも用ふ。

カイキノミウチ　開基筈打。筈打の小形のもの。

カイラリクギ　皆折釘。造船の時各所に用うる釘。川舟のはらを打つを脇付といひ、其他は寸を以て呼ぶ。つい折の一名。小皆折は數の皆折と云ひ、大數小數と呼び、其より以上を二寸五分三寸四寸と寸を以て呼ぶ。

カイセン　海前。薩州にて琉球船を呼ぶ名。

カイセン　開船。船を出すこと。

カイゾク　海賊。(一)海上の賊。(二)水軍の義。――衆。

カイジヤウシゴノカミ　海上守護の神。船玉。筑後

の水天宮。風浪宮。隠岐の和多須の神。石見の神
停山大神。薩摩の野間權現。攝津の船玉神。大海
神。佐渡渡海の神。備後渡神社等。各條を見よ。

カイノクチ　開口。通口。氷仙門。舳艫左右にあり。
荷舟にて表の――を傳間込といふ。臺の上に置臺
といふものあり、取置の垣立なり、之をカンコ挽
といふ、今も稀に呼ぶ所あり。傳馬込といふに同
じ。小船にてカンコといふ。

カウラン　高欄。屋形やぐらにあり、小名、地覆、
丸鉾、中桁、升立、小立。

カウドウ　甲銅。化粧金の條を見よ。

カウゾツナ　楮綱。一名白くち、楮皮の綱。

ガウイタ　綮板。ものみの條を見よ。

カウテイサンノタイジン　神停山の大神。石見國に
在る船の守護神。通舶御酒御洗米を奉るに御いさ
みといふことありて船中其感應を知る。

カガラツナ　加賀苧綱。加賀産の苧綱、大舶の大繩
之を最上とす、其强きこと鉄線に劣らず。廻船三
綱の一。

カガミノフ子　白蔹皮舟。大巳貴神の國を平ぐる時
一人の小男白蔹の皮にて船を作る。

カガリカゴ　燎籠。長き竹柄をつけたる鐵籠、船外
にさし出し置きて篝火たく具。

カガリイカダ　篝火筏。方三四尺の板に繩をつけて
海に浮べ此上にて篝火をたくをいふ。

カキクワン　掛鐶。船の桁の上の平なる所船ばたに
渡し一寸五分より二三寸まで環を打つをいふ。此
環一間二つより五つまでの數あり。此鐶矢玉の防
をなし、又繩をつけ、船舷へ板を重ぬる時此繩に
てカキタツに結びつく。カケガヲ同じ。

カキスヱヤカタ　舁居屋形。古き語。今も小船の屋
形をかくいふ。ヤカタの條を見よ。

カキタツ　垣立。墻立。欄板。舟の左右に立つ垣。
高垣平垣の別あり、荷舟に檜垣丸垣等あり。舟の
外を柵の如く圍ひ立つ故、圍ひといふ一名あり。
水戰には其外に折釘を打ち、楯の板をつけ、其上
に幕を走らかす、此墻に通ひ口を明く、常の船よ
りは數多く廣く明け置くは此口より鉄砲を打ち、
又敵砲に乘り移るためなり。

カギノヲ　鈎緒。マンリキの條を見よ。

カキロドコ　欠櫓床。櫓床の左右を欠き、中墨に櫓
を打つ故、逆櫓自由なり、櫓杭を少し長くするを
法とす。

カクシキ　格式。天子諸侯士庶人の乘る舟、各法式
ありて上下の別明らかなり。立鈴打鼓の格。船の
多少船制の法。船營の式。各同じからず。

カグライタ　神樂板。攝州灘船にて云ふ歩みの板の
こと。

カグラサン　神樂棧。ロクロの薩州方言。

カケアヒノヒ　掛合の火。暗夜に紛れ船となりて沖
に漂へる時、其船より火を立てゝ見すれば、地方
港の者之を見つけ――のをたく。漂船之を目的と
して船を寄するなり。

カケノフナハリ　字義未詳。

カケフ子　蒐船。戰語、敵と戰ひ働く舟。

カケヤ　椓擊。地かせを打ち、杙を打つべき大槌。

カケル　掛る。(一)しつらゆること。掛櫓床を――。
八十梶――。(二)つなぐこと。湊に舟を――。(三)
戰語、潮の直るを待ち暫時舟を留むること。

カケロトコ　掛櫓床。ろをかける條を見よ。

カコ　舟子。水主。鹿子。加子。帆を操り櫓櫂を推
し舟を行るを專務とする人。――足輕は――を足
輕の役に使ふなり。――の配りは船後に力量ある
上――、中の間には中――、艙には下――を配る
なり。眼もはるに沖かけさかり行く舟は――の聲
こそまつは消けれ。

カゴタテ　籠楯。義未詳。

カコヒ　圍ひ。墻立の一名。

カサ　笠。笠雲の略歟、日の出の時、日の上にキッ
カリとしたる雲の居るを云ふ。

カサギ　笠木。大立の上の横木。又横上ともいふ。

カザグモ　風雲。はなれ〴〵にて形尖る雲。風の兆。

カザキリ　綻。風切。唐船檣上にあり、風の方向勢
力を見るもの。

カサダカノフ子　積高の船。かさ高く上カブキの船
を云ふ。――の櫓は水入深き時は櫓のきゝよくし
て早し、早緒を少し長くするなり。

カサホコクモ　傘鉾雲。風を待つ雲なり、此雲必ず
南にあり傘を開きたる樣にして其雲の破れたる方
より風吹く。

カザマ　風間。風の吹く中にて暫時吹かぬをいふ、
風のいきつく同じ。よるべなみ――をまちし舟よ
りもよそにこかれし我そかなしき。

カザマツリ　風祭。西宮御神に風を祈ること。しは

をふね眞帆にかけなせゆふして〻にしの宮人――しつ。

カザキリタツ　風切立。表一番の垣立のこと。

カシ　戕牁。モヤヒグヒの條を見よ。舟はて〻――ふりたて〻いほりせんなどえのはまべすきかてぬかも。――をふる、船つなぐこと。

カシキ　（一）炊奴。船中の炊事人。（二）加敷。船側の最下なる瓦につく板故、舗に加ふる意か、一名根枻、カワラの兩脇にある板。

カシゴザフ子　貸御座船。町御座舟を賃貸するもの。

カシハバラフ子　柏原船。河州柏原の荷舟、形劍先に似て、上棚あり、立戸立あり。

カシラ　頭。舵の小名。

カシラクギ　頭釘。船梁釘、加舗釘、中枻釘、上枻釘、枕釘等を云ふ、加舗、中枻、上枻は水押付とてのぼり釘と云ふ。又側付に小廻釘といふは長さに長短あり。

カシラツナ　（一）頭綱。碇の頭に別にありて浮をつけ置き、切るにも取るにも自由ならしめ、之を繰りて碇を急に起すもの。（二）頭繩。枕卷綱同じ、舵を床に納むる時。枕の頭孔に通じ、枕を釣り卷き上ぐる繩。古く枕の緒といふもの。

カシラナハアナ　頭繩孔。枕の小名、頭繩を通す孔。

カシラモツヒ　頭纏ひ。揚ぐる時易からしめんため碇の爪の先に碇綱を纏ひて碇を投ずること。

カシラツク　戕牁を築く。櫂棹など立て〻舟つなぐこと。

カズ　數。釘の稱、大――小――小皆折の條を見よ。

カスガヒ　錄。四角にして兩爪ある金具、片爪横につくを手違ひ――、幅廣く厚さ薄きを平――、又輪――あり、掛櫓床をつるに狹箱付といふあり。

カスミ　霞。雨の前後に立つもの、島山等の樹梢まで浮き〳〵と見ゆるものは雨氣、又平に成り或は谷に重なるは海上より島山に多し、平に一面に――渡つて見ゆるところもあり、二つ谷々のところは厚く重なりたるやうに見ゆるところもあり、夫より自然に山の根すき上つて下よりはり出すやうになり行くは氣强くはり出す、薄くなりて消ゆるは天氣。

カセ　枷。舟つなぐ木、かし同じ、もやひくいの條を見よ。

カゼサダメ　風定め。十月十日風定めとて其日の風其年冬來年夏中は多く吹くと知る、其日色々風變れば晩の吹きおさめの風を標準としてトする習ひなり。

カゼノイキツク　風の息つく。風の吹く中にて小休みすること、――は風衰ふる兆、さらずば長く吹き續く兆。

カゼノナ　風の名。川出し、川入、地嵐等土地によりて種々の名あり、子より吹くは、きたとて日和、丑寅は北ごち、卯はまごち、雨風起る、辰巳はこちいなさ、雨風、巳午はこちようづ、午はようづませ、雨風、午未はやませ、未申は西ませ、江戸にて富士南、此風十一十二正月の頃吹き出し南へ廻れば日和、酉は西風、最日和、此風四五月の頃吹き出し南へ廻れば日和、戌は西あなせ、戌亥はあなせ、江戸にてならひ、日和の風とす。其他方言古語甚だ多し。

カタ　肩。舟の上棚の上緣を兩方より幅を取りて左右指渡しのこと。但前後にて廣狹ある中第一廣きところにて――何寸と寸尺を定む、舟の上口の幅なれば、胴の――を單に――といひ、或は筒の――といひ、其他の處の――は處名をつけて呼ぶ。肩廻しの條を見よ。（二）戸立の上幅。

カタシホオシ　片潮押。櫓の推し方の一法、引違ひ押にて人に入違ひに立てる其時、櫓を突くには力を入れず、引く時に力を入れて漕ぐ。ひきちがひおしの條を見よ。

カタシホ　片潮。北海邊にて潮の干滿少く時によりては五七日打つづき一方へのみ引くことあるを云ふ。

カタテイカリ　片手碇。義未詳、爪の一つの碇歟。

カタテヅクリ　片手作。一方に矢倉のある制。一說に船頭矢倉の下は押入物置などになりたる制、小早の二十六挺立の類は――なりといふ。

カタノハバ　肩の幅。航居の一尋五寸がかりは肩の幅なり、かたの條を見よ。

カタホ　片帆。

カタマハシ　肩廻し。荷舟の石數を積る算法、一寸立方のものを万歩のするを――一斛積とす。

カタム　堅む。動かざらしむること、はぎめを錄にて――。

カヂ　（一）舵。枕。たいし同じ、船の尾に設け進行

の方向を正すもの、海船の――は縦に長く河舟の――は横に長く其制同じからず、ヘンダ、ロクロカヂの異種あり各條を見よ。小名身木、頭、頭繩孔、上大目、下大目、落込、羽板棧、櫂架、端入、潮切、水越孔、小水越、輪精あり。長さは舟の肩と背の幅を増減して定む、太さは帆一反につき六分がかり、幅は一反につき三寸五分三ッ折にして一分落しを常規とす。（二）楫。古くは櫂のこと。まつら船みたれほりえの水尾はやみ――とる間なくおもはゆる哉。

カヂウチマハシ　柁打廻し。前掛繩の條を見よ。

カヂクビツナ　柁頭綱。前掛繩の條を見よ。

カヂヅカ　柁柄。舵牙。柁棒、取木柁柱同じ、柁につきたる柁を左右する柄、かちがらといへるは柄柄の誤にて此事なるべし。

カヂトリ　柁取。柁手。舟の面柁に居て柁の押し控へをなす人、山立の者と心を合せて勤む。

カヂノトリヤウ　柁の取り様。合せ楫、追波、開き、眞帆、押舟、登り潮、下り潮、渦卷汐、大風、川口、湊入、湊出、岩に當る時、洲に當る時、大筒打時の各様あり。

カヂノヲ　柁の緒。頭繩の條を見よ。

カヂノアヒヅ　柁の相圖。面柁取柁を號令すること、山立より楫取に楫を左又は右に取れと知らすには、聲達せざれば、其間に繩を引きおき、鈴鳴れば面楫、鳴子は取楫といふ如く定めおくこと。

カヂヒカヘツナ　舵控綱。しりかけ綱の條を見よ。

カヂハサミ　柁挾。かぢまきたつ同じ。

カヂハシラ　柁柱。柁柄に同じ。

カヂマキツナ　柁卷綱。頭綿の條を見よ。

カヂマキタツ　柁卷立。柁挾同じ。

カヂヲレタルトキ　柁折れたる時。――は鷲口に大綱を引き艫に櫓二丁立てゝ柁を取るなり。

ガツシヤウナカヌキ　合掌中貫。床櫓と舟梁との中間にあり、家屋の合掌木の如き舟梁。

カナツナ　金綱。大綱を通すやう作れる銅の管、戰時など大船より小船に乘り移る時此管を兩手に持ちすべり落つ。

カツパ　合羽。龜の甲の條を見よ。

カツラヅナ　蔓綱。蔓もて作れる綱。

カドノクモ　角の雲。未申の方より丑寅の方へ行く雲、此雲六月土用内に多く行くは七八月に大風吹く兆。

カナイカリ　錨。爪は四角なり、圓きは泥の中にて引けよきためにて、かぎあるが常のなり。

カナグ　金具。船に用ゐる――は釘、かすがひ、鐶、頭巾金物等數種あり。

カナザハカ子ミツ　金澤兼光。寶暦年間の人にて浪花堂島の船大工、父は法號隆存、母は小寺氏、幼にして孤となり兄のため養はる、稍長じて多病なり、十三歳の時家に傳ふるところ七世二百餘年間の家集雜記を見てより、爾後造船法の規矩名數等の研究怠らず、船用集十二卷を著す。

カナツキ　金突。どしつきの條を見よ。

カナトコグモ　鐵砧雲。風を請る雲にて東方に白く築土をつきたる如く立つもの、其雲先退けば西風強く吹き、立あがれば足をおろして雨となる。

カナログヒ　金櫓杭。鐵を以て造れる櫓杭。

カニハマキツクレルフ子　樺皮卷き作れる舟。櫻樹の皮の色に彩りたる舟、古くは或は眞に樺櫻の皮にて舳など卷きたるか、――にまかぢぬき云々。

カハイリ　川入。（一）海船の川に乘り入ること。（二）風の名。

カハフ子　川船。河流に深淺緩急あれば其制一ならざれども、底を平たく造るは皆同じ。底平の舟、石川、直流、曲流、湖水の條を見よ。用材は洽溜りて朽ち易き故概して杉の赤身を用う。

カハカミイヅミ　川上和泉。古き船大工。

カハシシホ　交し潮。入り交す潮。――下にみつ――上にみつ。

カハダシ　川出。風の名。

カハタレボシ　彼誰星。啓明。金星をいふ。たれときぼし同じ。

カハツヅミ　河鼓。牽牛星をいふ。漢字を和續にしたる名なるべし。

カハフ子カチ　河舟柁。河舟の柁、小名、身木、頭、大目、櫂架、羽板、端入、上棧、下棧。

カヒヨセ　貝寄。（一）二月涅槃の前後に強く吹く風にて大方は西風なり。（二）住吉の浦にて立春より四十八夜に中り大風有りて貝など吹寄するをいふ。

カヒログ　舫ぐ。舟ゆれて安からぬこと。

ガフ　合。帆の張り加減の度合をいふ單位、十分に張るを一升とし、半に張るを五合とす。帆を七―に張つて追風にまかせ。

カブニジ　蕪菁虹。中きれて蕪の如く立つ虹、大風の起る兆。

カヘリツナ　返り綱。早緒の條を見よ。

カヘリマタ　蓋股。ほかた、ひきまたの條を見よ。

カヘロ　換櫓。船を急に漕戻さんとする時本櫓を納め櫓床の上に用意しおける――を取り出し逆櫓をなす。

ガマツナ　蒲綱。蒲の葉にて綯ひたる綱。

ガマノホナハ　蒲の穂縄。蒲の穂にてつくれる縄歟。疑はし。むやひする――の絶へばこそあまのはしふねゆくもわすれめ。年經とも知らじな心あまを舟――の絶へず戀るも。蒲の葉縄は今も用うれば、古くあやまてるなる歟。

ガマホ　蒲帆。蒲莚の帆。

カミダナ　神棚。住吉大神船玉神を勸請し置ける棚。其他其船主船頭の信ずるところによりさまざまの佛神を安置す。

カミツナ　（一）紙綱。紙を縄として細引等に用う。（二）髮綱。髮の縄、よく伸縮して靭性あり、繫り綱、碇り綱となし、危難を逃るゝ第一の具とす。

カミノミフ子　神御船。（一）神代の船。（二）祭禮の時御輿をのする船。

カミワタシ　神渡し。十月頃吹く西風。

カンコ　字未詳。小船の古言歟、因州湖山の地にある漁船にて三四人乘のものを――といひ、廻船の傳馬込を――引といひ、四國にて小漁舟を――舟とよぶによれば、――は小舟の古言ならん。

カンゾロ　字未詳。船首に立ち、第一航路を見、湊々の船掛り、海底の深淺、暗礁淺瀨、風波の變を見るもの。かんどりの轉訛かとおもはるれど、水先案内者の如き義あれば別歟、再考すべし。

カンドリ　楫取。船尾に居て柁を取り柁を直し舟を左右進退する人。

カンハン　甲板。龜の甲の條を見よ。

カメノカウ　龜の甲。（一）大船の船首にあり其形龜の甲の如く、厚板にて圍ひ、矢玉中れば外るゝ樣に船尾の方になびかせ、圓みをつく、之狹間をきり、鐵砲をも打出し、又山立役の居所ともす。（二）械面。龜甲の形に板を張る故の名、荷舟にてかんはんと呼ぶ、中に綱繰の窓あり、雨を防ぐ故かつぱともいふか、蠻語のカンバンとは別なるにや。

カメノコブ子　龜甲舟。さつかうぶね同じ、水戰用にて櫓櫂無く、屋根の眞中に突上げ戸の如く楯を坪懸金にて開閉するやう作り、敵船に投火矢などする時用う、又長崎の御用船にこれあり漂流の船に危げ無く近寄るためなり、中部の底に水をかく車あり、其軸を二人して回轉す、全體楯を以て蔽ひて、物見の挾間を前後に設く、柁も前後に在り。

カモジ　髮。水押にかくる舟飾、飾りとも云ふ。ツク縄、崟縄などにて作り、もぎ先を縄にて卷き、或はしやなにて包み、其先にかく、荷舟の――なきを奴水押といふ、凡渡海場傳道磯場の類は皆奴水押なり。

カヨヒフ子　通船。民家常用の小船、平田に似て小なり。或は表箱作り、戸立作りなどあり。

カラカイ　字未詳。船首一番の控なり、其立を――立といひ餘は皆控立といふ。

カラカヂ　字未詳。唐楫、輕楫、絡楫などと說まちまちなり。あはしまやとわたる舟の――のからき浮世をしほれてぞふる。

カラクリタテ　機關楯。大船の艏に用う、小早の立木の如く小柱を立て、上に木を渡し、此小柱に鳥の羽重ねの如く楯をつき、矢中れば小柱廻り次々に受け送るやうにする水戰の具。

カラクリマハリ　轆廻り。ロクロの船夫語。

カラスキボシ　犁星。參宿。

カラロ　（一）空櫓。櫓の推し方の一法、水を淺くかくこと。二字未詳。艪の一種。かつしかのまゝの浦回のおきつ洲にあけのそはふね――おすなり。或はいふ、唐櫓なり、或はいふ輕艫なり、或はいふ絡める艫なりと。

カリフ子　借船。廻米の條を見よ。

カリワタシ　雁渡し。八月頃、初めは雨にそひて吹き後は晴れて吹く北風。あをぎたに同じ。

カルフ子　輕船。走りを早くするため櫓を多くせる通常の荷船等。

カレシホ　干潮。引汐のこと。

カレノ　枯野。應神帝の時伊豆國に科して造らせし船の名。又仁德帝の時にも同名の船あり。

カワラ　航。船底の板、胴――、表――、艫――等の名あり、櫓一丁を一人に當て、一人の間を九寸に定むる、これ――居の長なり。譬へば櫓數五十挺の船なれば――の長さ五九四丈五尺なり。

カワラスエ　航居。居ゆる航。すゑはいしずゑのす

ゑの如し。

キ

キイカリ　木碇。曲れる木の枝にて一つの爪をなし、之に石をくゝりつけたる錨、一本爪なる故土を引懸けて重く強し。

キコウセン　機巧船。三州岡崎水野家の浪士伊東伊織の作るところ、五分厚さの板に下地布させ、紙張り、漆ぬりとなし、蝶番、つぼがね等にてつなぎ合せ、船の形となし、チャンぬり厚紙の外被をかぶせたる兵船、之を解き更め組むときは一個の箱となるなり。

キザミヒウチ　刻燧。舟中にて用ふる燧、鹽硝一匁二分熊野燧石末五匁、龍腦一匁二分、熊野火口三匁せ、んまいの線一匁五分、樟腦一匁五分、節松の引粉五分、松の生皮を燒酎五合入二合に煎じ練り固め乾し固めて、小刀にて削れば便ち火出るやうしたる水上用のもの。

キシウミ　岸海。とこ海のこと。

キタゴチ　北東風。丑寅の方より吹く風、――はけゐのとこまでこほりつるこ雪はみすのふるふなりけり。

キタフキ　北吹。子の方より吹く風。

キタマヘフ子　北前船。北國船のこと。

キミナミ　木南。未申の方の風。春夏の初に吹く、伊勢中國西國にて惡風とす、伊勢方言歟。

キヌホ　絹帆。御坐船などの早船に用うる絹の帆。

キフニホラオロス　急に帆を下す。俄に大風に逢ひ――を欲すれば船覆へることあり。

キフ子　木船。薪炭を運ぶ船。諸國に多く日土洲特に多し。

キリ　霧。風の前後に立つ水氣。

キリ　字未詳。中棚の止りのこと、わんこう同じ。

キリアゲ　切上。戸立の條を見よ。

キリヌキ　切拔。形は釘〻に以て、大釘を拔くべき具。

キリバリ　切張。切舟梁の條を見よ。

キリヒカヘ　切控。控木の制の一種。

キリロトコ　切櫓床。きつちやう同じ。切舟梁のこと。

キャカタノフナバリ　木屋形の舟梁。義未詳。

ギヤクビ　逆日。五行の配當を以て云ひて十二支より十干を剋する日。

ギヤクフ子　逆船。艫の方を風下の方にすること。

キヨクリウノフ子　曲流の船。谷川の――は短く作り、營筵の帆にて風の吹き迴しに逢ふも柁の推控に便にす。

ク

クガツジフニガツヒヨリ　九月十二月日和。二八月ひよりの惡さに對していふ暴風なき九、十二月の好き天候。

クギ　釘。造船に用うるところ女夫――、四つ――、繼手――、頭縫――、皆折――、平――、矢倉――、包――、大底――、淡落――等各種あり、各條を見よ。

クギカクシ　釘隱。釘を蔽ひかくす金物、水押の飾、垣立、筋、廬、長押等に用う。

クギシメ　釘〆。釘の頭に當て鐵槌にて締めこみ堅固にするもの。

クギヘシ　送釘鑿。玄翁にて打ち、釘を送りこむ器。

クグツナ　磚子草綱。くゞにて作れる綱、道芝の事、海舟に用う。

ククリ　緊り。苫緒の本來を云ふ。

クサマキ　草槙。津輕、南部、松前等を限りて生ずる船材。

クサリハサミ　鎖挾。手すまるに同じ。

クサリタテ　鏈楯。舟子柁取等の居所に釣る楯。

クジラフ子　鯨船。(一)捕鯨の獵船、制甚だ多し、一々擧げがたし、勇魚取圖說など見るべし。(二)獵鯨船の制を取りて作りたる漕舟、使者舟の別名、安宅關舟に添ふて用を辨ずるに小使舟、チャンなどにて塗り輕進せしむるもの。(三)戰語、引舟の義。

クス　橡樟。和名タフ、楠に類し最も船材に適する木。

クダカギ　管鍵。細竹を一尺程づゝに切り、之に細引を通し、細引の先に鈎をつけ、以て敵船中の物を掛くべき武器。

クチマキ　口卷。テンマ込綱の條を見よ。

クツ　沓。――と浮と二つにて自由を爲す、腰につくるを浮といひ、足につくるを――と云。

クツログル　寛ぐる。戰語、帆柱を――とは帆柱を倒すこと、味方に云ふ。

クビタマ　首玉。ねくゝりの條を見よ。

クマトル　隈とる。ぬぬきの條を見よ。

クマノノモロタフ子　熊野諸手船。大巳貴尊の使者の乘る所にて本邦早船の始なり、又天ノ鴿船と名づく。もろたふねの條を見よ。

グンサウ　軍粧。青竹の先を割きたるものにて大波の時船端を叩きて波を追ふこと。――する本義は、戰ふべく粧ふことあるべし。

グンセンシユツバツサハフ　軍船出發作法。一番貝にて帆柱を起し、食事を調へ、二番貝にて碇を起し、三番貝にて船頭以下揃て出船の相圖を待ち、船奉行即ち出船の潮合を見つもり、本船より出船合圖の旗を振る、三軍此相圖を受け作法正しく出船す。

グンセンノハジメ　軍船の嚆矢。俗に神武天皇高嶋の宮に於て軍船を作り玉ふを始とす。

グンセンノロカヂ　軍船の櫓柁。軍船に備ふべき脇柁、（大櫓の如く作る）大柁（常の梶より大なり大風荒波に用う）替柁、大櫓（掛りの時用うれば船行早し）等を用うるなり。

グンセンノサンシユ　軍船の三種。安宅、關船、小早をいふ。

グンセンノシタツミ　軍船の下積。今いふばらすと同じ、特に木石の類を下積とす。

グンセンノミヨシ　軍船の水押。大砲にて水押を打たるゝ時は總船破る。故に幕栖にて圍ひ。又は銅鐵にて張り置く。

グンセンノザイ　軍船の材。橡樟、椴の古木を最上とす。

クモアシ　雲脚。雲の脚。ひよりあらましの條を見よ。

クモデ　蜘蛛手。橋の柱より左右へ斜に出でゝ桁を支ふるもの。なみたてる松のしつ枝を――にて覆みわたれる天の橋立。

クモノハキカケ　雲のはきかけ。雲の散り廣がること。

クラハシジマ　倉橋島。安藝國にあり。白雉元年十月より創めて今に造船を業とする者多き島。

クリアゲル　操り上ぐる。戰語、味方の退くこと。船を――。

クリアマオホヒ　くり雨覆。雨覆の條を見よ。

クリコミツナ　繰込綱。まさこみ綱の條を見よ。

クリシムル　繰り締る。綱を繰り締むること。碇を繰り締るは坐りたる舟より傳馬にて深みの方へ碇を走せ入れ、之をしめよせ、自然と深みへ下らしむ。

クリヌキ　繰貫。立柱にてかゝり舟する時の替へ水繩。

クリヒク　繰り退く。戰語、敵のくりわぐること。船を――。

クルマフ子　車船。左右に車をつけ、水をかきて舟をやるもの。

クレノテンキ　暮の天氣。日暮の天候、暮天西赤ければ晴、次第に薄く黄なるも晴、日入りて後暗きは明朝の雨、初め赤くして黑くなるは雨、又赤く山に輝くも雨。

クロバエ　黑南風。五月梅雨の初め吹く風。此風より天やゝ暗く梅雨つゞく故名づくる歟。

クロフ子　黑船、外國船の義。

クワイセン　廻船。荷物運送のため諸國海上海港往來する船、二三百石積より二千石積餘に至る。

クワイセンサンバフ　廻船算法。肩廻の條を見よ。

クワイセンタイハフニシウハツカデウ　廻船大法二十八箇條、寛文七閏二月十日仰出さる。

クワシヨブ子　過書船。澱河筋荷舟の大なるもの、明和より六七十年以前頃までは多く用ゐられしが明和ごろには川底淺くなりて漸くすたれ、適々大なるものも長十五六間幅二三間にすぎず――、傳道もと一にて大なるを――、小なるを傳道といへり、元は傳道舟なり。

クワキ　火器。火矢、炮烙、火桶、火玉、玉火、流星、吹出し、投炮烙、投明松、簪明松、竹明松、兩明松、籠明松、藥明松等をいふ。

クワン　鐶。金屬の輪。大小あり、用うるところにより名とす、櫓――、大渡し――、水繩取――、兩方――、脇取――、打込――等あり、又方にして根鉦二つあるを轉――といふ。

クワンカウ　鐶甲。釘かくし。

クワンシウ　官舟。すべて早舟にて、海舟にては關舟といふもの、小舟にては小早といふもの、其他大中小船の品々あり、海國の太守より諸士に至るまで知行高相當の舟を造りもつこと。本來は官の舟の義。

クワンシウノカザリ　官舟の飾。鎗、薙刀、弓、鐵

砲、臺傘、立傘、吹貫、旌幟など飾るをいふ。

クワンジンフ子　勸進船。攝州川口にて比丘尼をのせ、廻船の泊れるを勸進する舟、一名びくに舟。

クワンノキガラミ　貫木がらみ。置貫木を貫木へくゝる繩。

クワンノンボサツ　觀音菩薩。足利尊氏――の畫像を自ら描きて毎船の舟玉に之をおかせ玉ふ。普門品の所說によりて今に舟子の安置するものあり。

クワンヌキ　貫木。二の平面のものに添ひて綴ぢ堅むるもの。一番――、二番――。

ケ

ケアゲ　蹴上、家屋の蹴放しと云ふに同じ。

ケアゲフナバリ　蹴上舟梁。蹴上の舟梁。

ケアゲノロドコ　蹴上の櫓床。蹴上にある櫓床。

ケイクサタテ　けい草栢。北國より出る艸をもて製作したる栢、簑になす草といふ、猶可考。

ゲキシユ　鷁首。鷁といふ水鳥の像を船首に彫刻し、又は畫きたる制の船。船をして波浪に溺れざらしめんための心寄せに出でたることにて天子貴人の乘船に多く用ゐたれば、轉じては貴人の船の義となれり。

ゲスタナ　下主棚。別名尻棚、舟の湯殿雪隱等こゝにあるなり。

ケタ　桁。すべて柱と十字をなして横はるもの、帆――、橋――。

ケタウチマハシ　桁打廻し。大船には竹を編みて机桁の眞中に打廻し、檣のあてにして、帆の上下のすべりとなす。

ケトマ　毛蓬。蓬の條を見よ。

ケハヒガ子　化粧金。けせうがね同じ。物を掩ひて堅固ならしめ美觀ならしむる金屬品、水押の飾金物、潮切角金物、帶金物、逆輪、中筋等あり、廻船の髮の上に冠らすは甲銅といふ。

ケビキ　斟引。斟を畫して厚さ幅等を定むる造船工の用具、屋大工のと同じ。

ケンサヲ　間竿。大工用ひて尺歩を測るの具、俗に杖といふ。

ケンサキフ子　劍先船。劍鉾舟。荷物十六駄を載す大和河內の荷物舟なり、長九尋餘、深一尺四寸、直くして艏尖り、一枚枻にして横ぐもなり。

ケンヅモリ　間積。距離を量ること、濱見ゆる時は三里、人見ゆる時は壹里、水繩見ゆる時は矢比といふ。

ケヤキ　槻。船材中よろしきもの。

コ

コウサンノハフ　降參の法。古法、船戰にて降參せんとする時は、其子細を書し、樽に納め、笠を添へて、敵陣に流し送る。

コウバイ　勾配。（一）傾斜の度のこと、何寸――。（二）舟の名。町屋形船の中最小なるもの、下は屋形、上は勾配屋根にして、知倉なし、――屋根あるより出でたる語、舟子一人乘、船側臺ありて高欄なし。

コガノキ　字未詳。檣のせみを作るに用うる木。

コカス　倒す。檣を――す、倒すこと。

コギハシリ　漕ぎ走り。風輕き時、帆を揚げたる上に、櫓を押して走るを云ふ。

コギフ子　漕船。引綱の條を見よ。御召舟の先に立ちて御召舟を曳く舟、廻船とするは非なり。

コクツミ　石積。舟の容積、――若干。又荷船は其積むところの石數を以て名として呼ぶ、唐船の斤目を以て呼ぶが如し、肩廻しの條を見よ。

コクラトカイ　小倉渡海。渡海の條を見よ、小倉船同じ。

ゴザイ　御祭風。六月土用過ぎより一週間ほど吹く北東の風、伊勢太廟にて祭事ある頃なれば名づく。

コサシ　小指。幟の小なるもの。

ゴザフ子　御座船。天子、太守、國主の乘船。

ゴザホ　筵帆。茅筵などの帆。

コサン　小三。間三の條を見よ。

コサル　小猿。打廻の條を見よ、持送りの小なるもの。

コシ　腰。人体に比すれば腰に當る部、舟の――。

コシアテ　腰當。檣床の名、筒關、胴舟梁同じ。

コシダイ　腰臺。垣立の――、此制は込板にて筋なし、堺流多く此制なり。

コシホ　小潮。大潮に對する潮の名。朔日より毎日四分づゝかけて七日に至り――となる。

ゴシヤクツヱ　五尺杖。ひろつゑにおなじ。

ゴシヤク　五尺。荷舟の小間を――又は――の間といふ、ねこふきの條を見よ。

コスクヒ　小抄。川舟に用うるゆとり。

コス井ノフ子　湖水の舟。湖水は水さく〳〵覆り易しとて厚板丸木等にて手澁く造る。

コタツ　小立。(一)中立と角立との間笠木の上の――なり、角立に作る。(二)ゆりたつの條を見よ。

コチ　東風。(一)東より吹く風。こちの常降り坊として東風は雨ふるなり。(二)辰巳の方より吹く風、雨を伴ふ。(三)巳午より吹く風。

コツカヒフ子　小使舟。樽舟。鯨舟の條を見よ。

コトウラフ子　琴浦船。攝津の國の名所を呼ぶもの。

コナミ　小波。子波。雌波二ッ打つて雄波一ッ打つこと常なるに、雌波二ッ打つて雄波一ッ打つ間に打つ小さき波の名、此波は風の兆なり。――が打つぞ、風が吹てまゐろうぞ。

コナヲシ　小直。舟底なり、艫航の續きなり、表航ともいふ、川舟にて表のしきといふ。

ゴハツトノフ子　御法度船。違法の海船、海賊の舟、又は唐物ぬけ舟の類。

コハヤ　小早。小舸。櫓二十挺迄の舟にて、物見使番の舟に用うるあり、一說に三十挺まで云々、二十六挺立の類は片手作りなり、十四挺位より三十挺

までの内外の櫓數のある船歟。所々にて小早の事をイサともいふ。或は云ふ、小早船の略にて、足早の小舟といふこと、二挺立より四十挺立まで二十種矢倉なさものをいふ、多く半垣作りなり、或は欄干造り其外數名皆此中にあり、十二挺、十四、十六、十八、二十、二十二、二十四、二十六、二十八、三十、三十二、三十四、三十六、三十八、四十挺。本朝三軍船の一なり、關舟の小なるもの、進退周旋の輕捷を主とし、墻立矢倉なく、荒波をも漕ぎ拔くべき制、なみわり舟同じ、先手の戰船又は飛脚船に適す、大小早には半墻矢倉武者走りをつくるもあり、又立木まで圍ふもあり、此立木に幕を走らかし、楯をつけて圍へば、小關のごとし、小關――とも高浪逆浪も多くは漕ぎ拔くなり。

コビ　小日。日の出づる時、日の脇に日のやうなるもの〵見ゆることあるを云ふ、一時の内に消ゆれば、其日雨なり、二時も間あらば翌日乃至三日の内に雨あり。

コマ　小間。艫の一番の間の貫木と浪關との間、荷舟にて五とも五尺の間とも呼ぶ。

コマクラ　小枕。はすりくだのこと。

コマハリクギ　小廻り釘。頭釘の條を見よ。

コミイタ　込板。浪關の小名。

コミヅコシ　小水越。柁の小名。羽板にあり、左右に南蠻車をつけ綱を通す孔。

コミヅコシナハ　小水越綱。大水越の下にあり。柁の左右に南蠻車をつけ、此綱を通し自由になす。

コンノヲ　紺の弯。義未詳。

コンパス　(一)渾發子。圓規。大工用ゐて圓を畫き間を割るもの。(二)磁石盤。航海用のもの。

コメフ子　舶。海に用うる粮船。遮洋船。

コモチキ　子持木。木錨の爪の後に添へられて、石を抱かせらるゝ木。

コモトユヒ　小元結。つなよせの條を見よ。

コモノツナ　小もの綱。

コモチ　子持。合又は守といふ。かうといふは非なり、墻を立て其根を納むる孔、舟中至要の局部、肥松を横木に用ふ、小名、拜坐。

コヤカタ　小屋形。後倉。艙後。下屋形といふの義、此處帆棚にて下落間にするところ即ち屋形とす、臺所屋形なり。

ゴエフマツ　五葉松。河舟の材の中、下品のもの。

コロ　小櫓。櫓床の間の一尺八寸あるを云ふ、一人がゝり也。

コロバシ　圓轉木。ぞうの條を見よ。

コロブ子　小櫓船。舟方の言、小早船をいふ、二人漕の大船に對し常の早船を――といふ、小櫓を用うる舟。――に醉ふ人ありとき〵つるはもたひに泊るけにやあるらん。

サ

サイ　(一)麾。厚紙を細く裁りたるに柄をつけたるもの、打振りて命令するを用とす。(二)采。早綿舟の問屋に來る時、一人船のへに立ち水をすくひて、折々兩舷の棹手に踊りながち水をそゝぐ具。これ一二を爭ふ時にて少時も棹を休むことを得ざればなり。

サイガ　雜賀。紀州の名所を呼ぶもの、船の制の一種、――兵船其外谷輪浦々の舟、一名ささやさき、伊勢物作りの類なり。

サイモン　祭文。舟出する時、安全を神に祈る詞。

ザイモクフ子　材木船。材木を運送する船、紀、土、

日、薩其他北國各地にあり。

サウ　艘。舟を數ふる法、一――二――。

サカヒ　堺、造船の名工、攝津の人、名は八郎右衛門。

サカヒブ子　堺船。攝州堺より出でゝ長崎に通ひ。糸物絹物等凡て唐物を積む船。

サカイリウ　堺流。攝州天滿の住堺八郎右衛門の造船の流義。

サカブ子　逆船。舵折れ脇柁もきかぬ時、艫に少しの帆をかけ、――にして走る、ともろを二挺ほど押さずに入れ置くを法とす。

サカホアシ　逆帆足。帆の條を見よ。

サガリ　下り。かもじの條を見よ。

サガル　下る。舟戰語、敵の帆が――哩。おろすと。

サカロ　逆櫓。櫓を前後に取り直して用ゆること。或は云ふ、關船に――をするは、櫓抗を左右に二本づゝ設け置き、早緒も二筋設く。或は云ふ、艪の立てかたの一法、櫓を逆に立てなすにあらず櫓杭を艫押しのなるやうに別に拵へ置くなり。

サキタガヒ　前違。櫓の小名。

サキタマノカミ　先玉神。海上にて舟玉神をよぶ別名、舟の行先を守る神の義、舟玉神の條を見よ。

サキテフ子　先手舟。御召舟の先に立ちて進む舟。又柱引の條を見よ。又戰場に先引する船、二百石以下を主として用う、艫の方は櫓を、舳の方は打櫂を用う。足輕舟のことにて、先備といふにはあらず。

サクキミヅ　さくき水。比重小にて浮泛力弱き水。

サクラカハマキタルフ子　櫻皮卷きたる舟。櫻皮の色に彩りたる舟。古くは眞に櫻皮もて卷きたるか。

ササカナモノ　笹金物。舟の高欄垣立廻りに用うる金物の名。

サヲコ　棹子。打網舟の艫に居て棹さす人、かぢと同じ。

ササホ　笹帆。風篷。竹を編みて作れるあじろ帆。一名とま帆。

サシアマ　指天。船の帽子の上にあり、兩爪ありて、さすまたの如く、中に胴を置て、檣を架する者。一名びく先。

サシイタ　指板。垣立の間に入る板、船夫は――頭といふ。

サシシホ　指潮。滿ち來る潮のこと。

サシヒキ　指引。潮の滿干をいふ。

サツシウハヤフ子ハフ　薩州早舸法。薩州の造船法、唐津流と堺流と二流あり。

サニヌリノフ子　佐丹塗の舟。丹土を以て赤く粧へる舟。

サヘイタフ子　佐平太舟。傳法舟同じ。

サマ　狹間。内より外を覗ふべく作られたる間隙、船の龜の甲にある小名。

サマダイ　狹間臺。舳の眞向廻り左右にあり。

サン　棧。舵甲舵の小名、上――中――下――あり、又のぼり――といふあり。

サンカベツリジツ　山河別離日。庚辛申酉の日。乘船に凶、と篇盪に見えたるより云ひ出せる歟。

サンガツロクガツ、三月六月。三月と六月とには必ず風あり、然れども急に暖になる日は、午の時より雲起り、或は雷鳴し、其方角より暴風なぞ起る。

サンジツコクフ子　三十石船。積荷の石數にてよぶ舟の名、大坂伏見の間を往復し、荷物及び旅客を載する河舟。

サンジフロクチヨウダテナカセキ　三十六挺立中闕。三十六挺立の舟、尾長さ六尋二尺六寸、肩廣さ二尋一尺二寸、底深さ四尺三寸。

サンジヤフ子　三者船。水戰語、耳目鼻三の役をなすといふ義、敵情の視察と地勢の實驗とを司る船。

サンゾウサンシヨ　三艘三所。舟戰の軍備の語、三々九艘を一手とし、三九廿七艘を一軍とする如く、船數は如何ほど多くとも皆三の數を用ゐて船陣をなすこと。

サンノアヲリ　三の泡折。船後をいふ、敵船に乘付る時は此處を目がけて衝く。

サンノカラカイ　字義未詳。

サンブタ　字未詳。へさきの板。

サンマイホ　三枚帆。三端帆の小舟、すべて帆の數を名とするは小舟なり。

サヤマキ　さいがに同じ。

サラ　字未詳。舟端を叩きて櫓拍子をとる具。

サルトキノアメ　申時の雨。申時より降る雨は長く續く。

サルスベリ　猿滑。打廻しの條を見よ。

サルダヒコ　猿田彦太神。道陸神とも道祖神ともいふ、造船運漕のことをも敎へ玉ひしかば船玉の神

とも云ふ、攝州住吉の攝神敏馬神社これなり。滿干の神、道引の神同じ、忍穗耳尊の第二子にゝぎの命が三種の神寶を天璽として日向國に天降り玉ふ時に――海陸の先驅をなし玉ひしより海陸道祖神と仰ぎ奉るなるべし。

サヲ　棹。竿。橋。竹篙。斜に水底に突き張りて舟を行る具。木――あり、竹――あり、水底泥にて木の棹不便なる池川なぞには多く竹竿を用う。

サヲウタ　棹歌。フナウタの條を見よ。淡路舟霧かくれこぐ――の聲ばかりこそせとわたりけん。

サヲノヲサ　棹手。棹とる人。――さほなすゝめそたかせ舟都に我はさせる身ならず。

サヲロ　棹艪。つぎめなき櫓。

シ

シウグンノハツト　舟軍の法度。水戰の規律にて、兵術の流派を問はず大抵一致したるものなり。

一、乘船幷に出船の作法且船營の作法等堅く定法を守るべきこと。
一、乘船の後要用の旨相斷り揚陸致すと雖も早々用事相仕舞罷り歸るべきこと、公用と雖も同樣のこと。
一、利を見て急に出船する時は急に出船の相圖を致すべし、自然揚陸の者有て歸船遲きに於ては之を待合せ問敷こと。
一、行軍の節、私の用事を以て途中に遲滯致す問敷こと、但し途中にて舟に損じ出來に於ては格別のこと。
一、船に破損出來致さば早速舟奉行に斷り、修繕致すべきこと。
一、勸進船、漁船、旅船、營内に入るべからず　若し疑はしき旅船來らば相糺すべきこと。
一、飲食商賣の旅船來らば營外にかけ置き、警固をつけて商買を免すべきこと。
一、合戰の刻、海上に浮み來る物ありとも、是に目をかくべからず、自己最前落し入れたる物たりとも、斷りなく取揚ぐまじきこと。
一、敵敗軍の節は、軍器貨財等を海に投げ餌と致すことあるべし、味方之に目をかけ拾取まじきこと。
一、矢玉しげく飛び來るとも、雜人共、立騷ぐまじきこと
一、船中を靜に致し、物音致さすまじきこと。
一、妖言、虛言、私語、雜說、堅く無用のこと。
一、敵方にある親類緣者、自然降人と爲て賴み來るとも猥に營中に入るべからず、其意趣早速注進せしめ下知を受くべきこと。
一、敵方より書狀音物到來に於ては、是又早速注進せしめ、下知を受くべきこと、附り、味方相互に音物無用のこと。
一、病死、病人、或は逐電の者あらば、早速注進致すべきこと。
一、敵の首取るべからず、討捨に致すべきこと、附り、毛附を致し戰ひ散て後、首取て入る儀は格別のこと。
一、戰ひ散て後、味方手負討死の注文、早速指出すべきこと。
一、味方に舟火事あらば、定の如く舟により傳問差出し、燒船を救ふべきこと。
一、自然夜討來らば、作法の如く舟毎に明松を出し、火を點して合戰の用意あるべきこと。
一、接戰の時、敵船に乘付たりとも舟奉行、或は船主より下知なき内、矢倉水主の者共猥に勝負致す間敷こと。
一、警固、夜廻り、非常を戒め、詞を掛けて度々營中を廻るべし、故に舟路を明け置申べきこと、附り、目付、使番、往來の節、道筋を妨げ申間敷こと。
一、相圖見定めの役人を舟毎に定め置き、本船より出る相圖を守るべきこと。
一、火番の役人を舟毎に定め置き、相圖の灯燈、其外一切火器の取扱を支配いたすべきこと。
一、船中火の用心嚴重に致すべきこと、難船の時分、別て用心致すべきこと。
一、船中に無用の火を照すべからず、印しの火の外停止のこと。
一、行軍の時、乘り暮したる時は、火を出して跡舟を導くべきこと。
一、常に炭、或は炭團を以て火種と致し、火繩の火を蓄ふべきこと。
一、舟具、用水、火消道具、幷に垢を止る道具、日限を定めて折々改むべきこと。
一、火術掛り役人の外、大筒仕掛これある場所に、無用の者近付まじきこと。

一、武器の手入怠る間敷こと、附り、鹽硝を乾すべきこと。
一、大雨高波等の節、鹽硝其外火器の濡れざるやうに覺悟すべきこと。
一、舟毎に不睡の番人を定め置き、一時に二度づゝ外を伺ふべきこと。
一、晝夜共に古桶古筵の類水上に浮み來らば、礫を投げて敵の忍び其下に在りや否を改むべきこと。
一、舟に飾り置く舟旗、舟印、相印の類は、役人の外取扱ふまじきこと。
一、雜人共猥に舟端に出で、敵の熊手、打鈎等にかけられ間敷こと。
一、何品によらず、船外に指出すまじきこと。
一、不時の食、常に用意あるべきこと。
一、船役人、乘衆、相互に船中の禮義厚かるべきこと。
右の條々逆反の族は罪科たるべき者也。

ジフシチヨウダテコハヤ　十四挺立小早。甲裏居、長五尋二尺、肩廣九尺六寸、によし長九尺、同幅一尺四寸、底、深三尺四寸、間積り表七尺、小間三尺三寸、筒の間七尺、艫三尺、小やかた五人、以上を——の定式とす。

ジツパウタロウ　十方太郎。義再考すべし。

シカイツクリ　四階作り。四段の船側板を用ひる船制の一種。

シカマフ子　飾間船。播州の所名を以て呼ぶ小船、常に炭薪を載せ、大坂に通ふ、播摩上荷、いぬころし同じ。

シキ　敷。しき板の略、下にしくの義にて、船のかわら板のこと。

シキダイ　敷臺。反臺の下をいふ。

シギノハシ　鳴の嘴。ひおつぼの條を見よ。

シキリ　仕切。中を區劃すること。

シケ　時化。古くよりの風字を用う、風雨の二合なるべし。海上の暴風暴雨。

シゲベリ　重緣。筋の別名。

シゴ　四五。船の荷くさびの上に打つ押緣、大——小——登り——等あり。別名、玉べり。

シサンノホシ　四三の星。北斗七星の事歟。

シキイカリ　敷碇。碇をもろに入るゝこと。

シジヌク　繁貫。しげく漕ぐこと、大船に眞梶——。

ジシヤク　磁石。方位を知る要品。

シシヤゴザフ子　使者御座船。大名の使者の乘る船。

シタオホメ　下大目。舵の小名、舵柄を貫く孔。

シタス　仕出す。船を艤して發すること。

シタツミ　下積。船底に積むものゝ義。轉じては今云ふばらすとの義。軍船は吃水を深くせんため木石を下積とす。木は徑一尺五六寸、長二尺五寸許、石は一人持ち程の重さのもの、何れも繩をつけ置く。又下荷ともいふ、船の底に積むこと、大船は米大豆の類を——とし、戰時は人をも——とす。

シチク　七九。古傳に船法は——に起るといふ。兌下巽上中孚の象に取るある由あり、巽は木にして其數九、兌は金にして其數七、七金九木とするは納音撻法による者歟。

シチジフゴニチ　七十五日。節分より七十五日のこと。此頃多くは日和にて風吹く——の日和。

シチブフナアシ　七分船足。七分まで船の水に入ること。大船は——。

ジツテウダテ　十挺立。櫓を十挺立つる小船、歌にいふ五ッ手船、別名十挺小早。

シツラ　字未詳。ワラビッナの條を見よ。

シテウニツナグ　片滾にて船をつなぐ碇の法。碁の征といふ下子の法の狀の如く、左舷の方に投じたる碇に右舷を繫ぎ、右舷の方に投じたる碇に左舷を繫ふこと歟。猶考ふべし。

シテウダチ　四挺立。四櫂小船。四挺立の小船にて早船中の小なるもの。

シトミ　蔀。家の蔀に同じく、光線飛沫など防ぎ障るもの、板蔀、簀——。

シトミフチ　蔀緣。蔀の上にあるを——といふ、下にあるを相緣といふに對す。

シトミイタ　蔀板。蔀立へくさり入れ、取置にするもの、表の方を長蔀といふ、小早渡海にあり。

シナツナ　しな綱。しなの木の皮にて作れる綱。色黑くして柳の木の皮の如し、東奥松前に產す。

シ子コ　字不詳。舟の筒の下部にあり。

シノタテ　篠楯。明松を用ゐて楯とするもの。

シノノヲフブキ　篠の小吹雪。草を靡けて吹く風とも、薄の穗の吹雪となりて散ることゝも、地名をかけて呼ぶ風の名とも、說まち〳〵なり。近江路の——。

シノビオヒ　忍追。夜中敵前などを乘り通る時、帆を控へて乘ること。

シノビツナ　忍綱。大綱に浮をつけて沈め、後の船の進むべき航路を示すこと。

シバフ子　柴船。松葉青柴などを運ぶ船、小船中船わり。

シヒサヲ　椎篙。椎の木の水棹。

シブク　吹く。風のあつるとこ、風の――。

シブジノナラヒ　十字の習。敵の船腹へ我が船首を加へて十字をなし乘り付くること。

シフニフナバリ　十二舟梁。舟子の言に、筒關、水つき、小舟梁、かぢつけ、いとをし、すながし、貫木、まねきの舟梁、床がらみ、ゆぬき、すいりん、てうち梁、以上を――と云ふ。

シホガカリ　潮繫り。潮を待ちて舟を泊むること。

シホガシラ　潮頭。さし潮のこと。

シホガマ　鹽竈太明神。奥州にある水路の守護神、祭神は猿田彦太神なり。

シホキリ　潮切。（一）舵の小名、（二）天象、三月三日前後に多く、明けても曇り、曇れども雨ふらぬをいふ。（三）一名浪切、荷舟の艙床の表に付るものゝ名。（四）水押の小名。

シホサ井　潮騷居。海中にて潮水の相門ふところ。――に五十良兒の嶋邊漕ぐ船に妹乘るらんか荒き島曲を。

シホサカヒ　潮堺。潮の來去する路の堺。俗に日本洽海の潮を七十里計りにて一潮とし、時刻相同じとなし、其潮の堺とす。

シホトウ　潮早。朝早を古傳に潮早と書きシホトウと讀む、潮頭に出船するとをいふ。

シホトケイ　潮時計。潮の指引と月の出入の時刻表をいふ。

シホノヒカリ　鹹光。海水の夜間光ること。

シホフ子　鹽船。鹽荷を積む船、又――作りといへば荷船の一法なり。

シボリ　絞る。舟戰語、敵が幕を納るをいふ。

シマイタ　四間板。四枚板の略、大立中立角立の板。

シマホシ　月。月をいふ。さよふくるみぞりの空に風吹けばいとゞさえます――の影。

シマヨリ　島寄。嶋の近寄りて見ゆること、空中に水氣をふくめる兆。一名、島遊び。

シンギ　身木。みきの條を見よ。

シモ　霜。水氣の下りて凍るもの、――の立消とて厚く置きて其霜流れず消る時は日和、薄く置て平に流れ消ゆるは雨の兆。

シモツキアレ　霜月荒れ。霜月二十三日前後の暴風雨。

シモニシ　字未詳。西北の風、越後方言。

シモフサゴチ　下總東風。江戸方言、下總の方より吹く東風。

シモマハリ　下廻り。船体の下半部。

シヤウギ　將儿。表屋形の船大將の居る處。

シヤウコノフナバリ　字義未詳。

ジヤウトウ　常燈。記伊國湯崎岬等處々にあり、今の燈臺の義。

ジヤウリクスベキチ　上陸すべき地。舟戰にて――三段あり、吹上ケの濱を上とし、眞砂地を中とし、岩石多きを下とす。

シヤタツ　車立。大船は艫――、塗間――、筒狹――、袖の四わり中船以下は滄間――なし。

シヤチ　車知。ろくろざの條を見よ。舳と表との車立と筒狹との三所に用う、綱を卷くもの、胴は横にわり、棒二本を用ゐ、四人して縱に推す、中船以上の用具、小船は只胴の間のみに用う。

ジヤフクロ　蛇袋。苧にて作り筈緒の上につくるもの。よだれかけ、二布、帆摺、うなぎの皮同じ。

ジユウカ子　自由曲尺。二枚に折りて納むべき作りの曲尺、造船匠最も用う。

シユツセンノアヒヅ　出船の相圖。古法、軍船の出發する時は、旗下より船の分列成りたるやと御龍の相圖わり、各船順々に采配頭の小馬印を振りて之に答ふ、次て一番具にて檣を立て、二番具にて錨を起し、三番具にて先手より順次漕ぎ出づ、御坐の相圖を受け、先手にて破方の矢を發し、御坐總軍とも鬨の聲を三度發して出發す。

シユライタ　修羅板。小船を幾艘も列べたる上に敷く板、之を鎹留にして通行するものにて然るを船筏ともいふ。

シユロツナ　椶櫚綱。椶櫚の皮の纖維にて綯ひたる綱にて水綱となす。

ジユモン　咒文。新艘おろしの時――を唱ふ。

シラサグモ　白小雲。白く小き雲。天の原よこぎりわたる――月にもまがふはやくけぬかし。

シラツナ　白綱。義未詳。

シラハヘ　白南風。六月に吹く南風の名。梅雨此風にて終り、天明るくなる故名づくる歟。

シリカケツナ　尻掛綱。一名尾掛。舵の尾にかけて、櫓床へ留める綱。漢語に、虎尾といふもの歟。

シリタガヒ　尻違。櫓の小名、ろの條を見よ。

シリダナ　げすたなの條を見よ。

シロガヨヒ　城通。御城がよひ船の略、大坂にてお屋敷方留守居衆の出勤に乘りし船、使者御坐船の一名。

シロクチ　白口。楮の纖維にて作りたる綱。

シロクテウ　四六挺。二十四挺立の古法、二六挺の條を見よ。

シロビヨリ　白日和。一名ヲウセ日和、四月の日和の名。

ス

ス　洲。砂濱の海中に出て淺き處。

スイタ　簀板。竹にて作る、海船は荷敷の上、川船は航にしく板、又すべりといふあり。

スギ　杉。船材によし。

スクリ　字未詳。檜綱の別名。檜皮の繩にて、河船海船共に用う。

スチ　筋。別名重緣、又玉緣。

スズ　鈴。鈴船等にて拍子を取るに用うる鈴。

スズフ子　鈴舟。勅使人公卿殿上人の用船、又船のへに鈴を立てたる貴人の乘船、又近世國守大守の用船には、海船河船とも、ともの方左舵右面に鈴をかけ、鈴繩を表の方へとり、之を引て面舵取舵を知らしむ、大船なれば表よりへに聲屆かざれば綱を引て之を命じ、又大船ならずとも貴人の召船なれば愼むことなり、龍頭の條を見よ。

スツポン　屁。船中の淦水を除く喞筒、ゆとり同じ。

ステイト　捨絲。船の進行中、異り風等に逢ひし時、絲に物のつきたるを放ち流して船の速力を測る法あり、其法に用うる絲。――して見る。

ステイシ　捨石。石を俵にして船底に入れ、砲丸にて船底を打たれし時石を捨てゝ右の損處より潮水の入るを少時とゞむるを得るためにする其石をいふ。

スナドケイ　沙時計。沙漏。砂の甲處より乙處へ漏れ落つるをもて、極めて短き時間を測る器。

スナミ　字未詳。波の一種、淺海の激しき波。

スナフ子　砂舟。川浚ひの泥沙又は土砂を運送する舟、攝州にて百艘といふ。

スバル　昴星。すまるに同じ。深き海にかゞまるえびのあるから、に廣き空にも――星かな。

スベリ　簀緣。簀板の一種、荷船は海舟河舟共に竹簀を用う。

スマシ　澄し。底鏡の條を見よ。

スマフ子　須磨船。攝州の所名をよぶもの。

スマル　海底に沈みし物を引揚る具。沈みし物に當れば手を開きて掛る其手に屈折ありて、引上ぐる時は物の重りかゝるに從ひ、彌々食ひしめ、一旦掛れる物は必ず逸さず揚ぐる器。

スマル　昴星。星の名、月の出入には日和變らざれども――の入には日和惡くなるものなり、特に秋冬は專ら――の入る時の天候に據りて晴雨をトす。すばる同じ。

スミ　角。戸立の條を見よ。

スミタツ　角立。大立の左右にあり、垣立、舳の留り、眞向の角に立つ。

スミノタテモノ　角の立物。ともの左右の垣立をすみといへば舟東方へ走る時、西南の間か或は北西の間か、何れ角の立通りより吹き來るに帆をもつませ走るをいふ。ひらきとも云。

スミノミウチ　隅筋打。筋打の細きもの。

スル　摺る。帆を下すこと。

スリタデ　摺蓼。すりたでること。土用の中潮の乾きたる時、舟をすり研き、古笘を燒きたで、舟板に舟蟲入らざるためにす、其後胡麻の油など塗置き、水を彈きて舟行駛からしむるためにす。

スリノコギリ　摺鋸。常の鋸なり、船匠木の合せ目をすり合す時用ふる故の名。

ズ井センキ　隨川器。朴の板にて長一尺幅七寸厚〇寸計の箱を作り、其中に溝を作り、一尺の矩と線香を入れ、其香の燃ゆるに從ひ、同器中に備へたる磁石によりて進行の方位の異る毎に何寸燃えたるかを檢し、船路の遠近方位を知る器、發明者の名を以て呼ぶ歟。

ス井テングウ　水天宮。祭神詳ならず、或は安德天皇を祭るともいふ、海上にて諸船碇かゝりて上らざる時――の守り札を碇綱につけて下せば碇忽ち起き、或は碇の岩石にかゝりたるは碇の爪のび又は爪を折りて上るといひ、船頭舟子の感心信仰一

方ならず。

セ

セ　瀬。（一）海、河などの底高くして流れのまゝならぬため水の騒ぐところ。（二）潮流。海中に脈をなして流るゝ潮、紀伊、伊豆の海にもあり、之に順つて乘れば舟行速なれども危し。

セイタ　脊板。

セイロウブ子　棲樓船。古法、丈夫なる荷船の上に五寸角の材木にて栖樓を組み上げ、舳艫より大綱を張り動かざるやうに堅め、敵陣を伺ひ、又弓砲を下げ矢に射るためにするもの。又舟戰に、七八百石千石ほどの船三艘をつなぎて、中の一艘に井籠を築き、五寸角何本も重ね、兩端に三寸四方の孔を穿ち、一方にばかり一尺宛のつくを打ちて根入二寸五分其上の孔を貫きて其又上の孔へ二寸五分入る、如此して組立るあり。

セウセン　小船。小なる船。古傳には三十挺立を——とす、又五十挺立以下を——とす。

セガイ　字未詳。和名抄の所謂枻歟。船の兩脇の總稱、古名ソカイ、ロカイの條を見よ。

セキフ子　關船。要會の乘船、たゞ關といふて通用す。櫓を立ること四十二挺以上八十挺までにて、其制首低く尾高し、古は高尾船と云ひしものにて、——といふは近古以來のことなり、はや舟といふは古今の通名なり。四十二挺立、四十四挺立、四十六挺立、四十八挺立、五十挺立、五十二挺立、五十四挺立、五十六挺立、五十八挺立、六十挺立、六十二挺立、六十四挺立、六十六挺立、六十八挺立、七十挺立、七十二挺立、七十四挺立、七十六挺立、七十八挺立、八十挺立、船の制作板薄く、舟幅狹く、櫓にて進退周旋せしむること自由に輕く疾けれども外洋を乘るに適せず、矢倉は二重、或は三重、或は附矢倉なり、鐵砲楯を設くれば釣合あしき故楯板作りにせり、檣臺に水楯水幕を垂れて、矢玉を防ぎ、櫓數を隱し、或は檣臺に添木を打ちて幕楯をかけ櫓を押す妨げ無からしむ、大將の舟なり。又花屋形をなすもあり、漕進を主とする者なれば、帆の積りは荷舟より細く、百挺櫓の舟にて十八九端、五十挺立にて十二三端位の帆なり。小關に至りては唯櫓のみにて快進す。一說に櫓三十丁以下を——といふ、本邦三軍船の一。又一說軍船仕立の舟は安宅、關、小早、鯨等皆之を——と稱し荷を積むを荷舟といふ。此船を造るには先づ櫓數を定め、櫓數を以て航居の長を積り、航居より積り出す、竪横の丈尺を究めて一艘の姿を爲す。五十挺立の——は四百石積の荷船相當にて、櫓床二十五なり。

セキフ子カコノツモリ　關舟水夫の積。櫓一挺に水夫二人掛りとす。

セゴシ　瀨越し。海舟中、平底のもの。

セチコチ　節東風。正月に五日も十日も吹く風。

セツイン　雪隱。舟の——は、ともの手作りの下にあるを常とす。

セツゴロウ　節五郎。義未詳。

セト　瀨戸。海峽。

セノシタノダイジン　瀨の下大神。又名海士御前、筑後久留米にあり。船主神符をいたゞき納め置く、海上にて鐵錨上らざる時此符を下せば感應ありといふ。水天宮同じき歟。

セミ　佼轆。檣の上部にあり、こがの木にて作り、水縄を通し、帆を卷き碇を上げ、舵を卷き、其外荷物を上下する、皆此蟬の車より綱を轆轤坐へとりて引上ぐるなり、帆柱に合ふ處、てふの口といふ、鐵ものあり、綱と車ともみあふこと强ければ他の木を用ゐては火を生ずるおそれあり。

セミハサミ　蟬挾。蟬を挾みて柱帆に打つ木。

センゴクツミ　千石積。荷船はすべて其石數を以て呼ぶ、帆二十六端筵三百十二枚、櫓は表のふりろ共に十六より十八挺まで、碇八頭、重四十貫目より八十貫目餘、綱は加賀苧三房、商綱四房、檜綱五房、廻米の條を見よ。

センザイ　船材。用木の條を見よ。

センシノクバリ　戰士の配置。へさきに士、左右の垣立に卒を配る。

センジノホ　戰時の帆。合戰中は帆を揚げず、柱計り立て置く、帆を上げ置けば味方の相圖通せず、又燒かるゝ恐あり、柱を建て置くは敵を追ふ時の備なり、但小舟には柱をも立て置かず。

センセンノニンズツモリ　戰船の人數積り。武者の數は櫓數半分といふを大法とす、されども一概に定めがたし、百六十挺の安宅舟には總て三百二十二人、內二百三十三人舟子、八十丁立の關舟には百五十六人、內百十七人舟子、四十挺立の關舟に

は百五人、内七十一人舟子、二十八挺立の小早は六十八人、内四十六人舟子、二十挺立小早には四十五人、内三十人舟子。

ゼンダナ　膳棚。ロカイ張の條を見よ。

センドウ　船頭。船の長。戰船の船頭は乘前のことを司り、水主を支配し、舟奉行の指圖にて働く、併せて天氣を候ひ、海路に熟し、接戰の時は手造りに居る、大――中――小――の名あり、軍船中二夕役の一なり、舟路の里程風の順逆汐の滿干等を考ふべきもの。

センドウヤグラ　船頭矢倉。てつくりの條を見よ、又だしやぐらの條を見よ。

センチウゴカシヨ　船中五箇所。とも、胴、へさき、せかい、舟底をいふ、戰時には底に諸道具掛りの出し入れする者をのせ、他の四ヶ所は働きの兵を載す。

センチウノヘダテ　船中の隔。戰時に船の重量の平均を保たんがため編重を制し、幕の如きものにて竪に區劃し、左右舷の者往來するを禁ずること。

センビ　（一）船尾。艫のこと。（二）船頭に對して、船釘のゆるみ、水あか、帆の上下、碇の上下、等舟内のことを司るもの。

セメコミカナモノ　責込鐵物。梳櫛。鐵の輪、大船の檣は一本木は稀なる故、打物、付物とて四方より木を打ちつけ、其上に――を幾處も入る。

セリカケキ　字未詳。めくらすへの條を見よ。

セリキ　逼木。子持の――。

ソ

ソコタテ　底楯。竹をあみて、櫓床のさきより下へさぐる楯。

ソコヒラタナルフ子　底の平なる船。川舟多く底平なり、海船には瀬越造り、平太造りあり。

ソトマク　外幕。戰船の胴壁の外に打つ幕。

ソトコベリ

ソア井　海中の瀨。一名ハヱ。

ソウセンイツチノシルシ　總船一致の印。舟印の上に大將の好みにまかせたる出を付るをいふ。

ソウビキ　惣引。さして定る所なく、上杙の養生板をいふ、川舟上杙の繼手の所の内部に打つ板。

ゾクセン　（一）俗船。軍船の關舟にあらざる廻船獵船川舟等の總稱。（二）賊船。海賊の舟。

ソコメガ子　底鏡。魚豚鮑などの脂油、又は鮑のわたを海上に散らせば、小波失せて潮水澄み能く底を見得べし、之をすましといひ、――といひて魚介の有無を知る便とす。

ソデカキ　袖垣。舳の左右垣立を高く上ぐるをいふ、別名六本立、中に柱を立て兩方に門の扉の如くひぢつぼを打ち、鐵砲楯をかけたる物を兩――といふ、又片――あり。

ソトトモ　外艫。外艙。別名空鞘。小名釣木、（又銅鐵にても作る）荷舟の床より下左右を板にて張るを傳法張といひ、中を張るをふんどし張といふ。

ソナヒケンヅモリ　備間積り。舟戰舟備の時船の長さ二つ折より狹く維ぐ時は船の搖るゝ時觸るゝものなり、二つ折を限とし、二つ折より少し廣くつなぐを可とす、假令ば舟長五間なれば二艘の間十間にして三艘くみの敷二十間ほどなり、然れば又次の三艘組まで二つ折にして四十間ほどゝす。

ソバガワラ　側航。かしき架なり、胴――、表――、艫――何れもあり。

ソヘハシラ　副梔。副への梔。

ソヘホ　副帆。副への帆。

ソラサヤ　空鞘。そとゝもの條を見よ。

タ

ダイ　臺。船側にあり但勾配船には無し、船の左右の垣立の――にて櫓床の上にあり、間の名をつけて胴――垣間――表――艫――反――と呼ぶ。

ダイコクタナ　大黑棚。義未詳。

タイコヤグラ　大鼓矢倉。やかたの條矢倉の條を見よ。

タイサンマハリ　大山廻り。大山高嶽の麓を乘り廻す時は帆を下げて去る。

タイシ　舵。かぢ同じ、かぢの條を見よ。たぎしの音便歟。

タイシヤウウマジルシ　大將馬印、大將の馬印は筒のからかい、但矢倉船は矢倉の上筒のわき舵に立つるなり。

タイセン　大栓。床又は臺にある木釘なり、川舟は狹にあり。

タイセン　大船。古傳に八十挺立を――といひ、又五十挺立以上ともいふ。

タウアミフ子　投網舟。打網舟に同じ。

タウジンイカリ　唐人碇。木碇の左右に又角あるもの。

タウセン　唐船。唐土の船式をもて作りたる船、大將は――に乘り給ふ。

ダウリジン　道祖神。猿田彦太神の條を見よ、道陸神同じ。

ダイタテ　臺楯。衝立の如く作り、其臺に車ありて、大船の中を引廻す楯。

ダイドコロフ子　臺所船。厨船。大船に付屬して食事を調ふる船。

タイハクスマルノワ　太白昴の輪。金星、昴星の圍りに見ゆることある赤き輪、風の兆。

タウブツヌケフ子　唐物拔け舟。唐物を積み來て關稅を逃るゝ舟。

タウワタリ　唐渡り。長崎より東京、交趾、東市寨、暹羅等に渡海すること、寛永十五年より禁止せらる。

タカサゴフ子　高砂舟。播州の名所を呼ぶもの、往時高砂は造船匠など多かりしなり。

タカシホ　高潮。高き潮、――は沖にては浪荒くして乘りにくし、舟を磯に寄せて乘る。

タカセキザエモン　高瀬喜左衞門。元祿ころの船大工。

タカセフ子　高瀬舟。艌。表高く横艫にて低く平なる制、山域河内攝津備前播磨各地にあり、土州のものは長十四五尋、幅一丈二三尺ありて、――中最大の物とす、すべて旅客荷物を積む。難波江に下す――のこすさはにいくたびたちぬ鴨の村鳥。

タカナミ　高波。高き波。――の時は高帆にて走るもよし、舟輕くて早し、然れども好むことにはあらず。――に逢はゞ艫櫓のみ推して波に逆はぬやう波に乘るを梶取の功者とす。

タカホニハシル　高帆に走る。帆を高くして走ること、敵前を乘り通る時、或は高波に逢ふ時、――べし、舟輕くして早し。

タガ子　錯。水戰の器。先をば鐵にて鉞の刄の樣にし、鐵挺の樣に長五尺、或は三尺許りにす、これを敵の大船の艫の戸立板と脇棚板との間にあて、かけや槌を以て打込む時は、棚板離れて、船破れ動き働くほど沈むに至る。

タガ子フ子　錯船。錯を持ち行きて敵船を襲ふ船、六反帆位の船に櫓數四五挺立て、戰船の外に一備へに一艘宛つけてあるものなり、歩み板を二重に張り、上げの上に歩板に棧を打つて、上ぐれば楯蔀と成り、下す時は元の歩板となる如くなし置く。

タカノハ　應羽。からかいの上にあり、宮室の蟆股に同じく、飾りなり、行くこと疾くして應の如く浪に溺れざる義に取る。

タカハシ　高橋。船大工にて大坂に住せしもの、今其名を逸す。

タガヒナハ　違縄。ろの條を見よ。

タカフ子　應船。攝津川口御舟屋にありし官船、一異制なり。

タカホ　高帆。本帆彌帆の上に高くかくる帆。

タカクノル　高く乘る。陸近きを避けて遠沖を航海すること。

タカヲフ子　高尾船。關舟の古名。

タキビノゴンゲン　燒火權現。隱岐國にあり、猿田彦太神を祀る、船舶其方位を失ひ、洲島の方分らざる時、火を願ふに忽ち現はるゝ神驗あり、諸國の海船、海上に於て日暮には笘に火をかけ海より出すは此大神へ奉る風俗なる由。

タグ　拷。曳くこと、手繰ること。入船たぎ。たげども〳〵舟はしりへしぞき〳〵。

タグリフ子　手繰船。（一）アクリフ子、（二）イヾキフ子。

タケカハナハ　竹皮縄。篠の縄にて大綱に用う。

タケス　竹簀。いきすの條を見よ。

タケナハ　竹縄。もやひ綱に用う、竹の前後を折返して段々續ぎたるもの。

タケノコヅユ　筍梅雨。四五月頃吹く東南風の名。

タケノレンダテ　竹暖簾楯。細竹を縄暖簾の如く下げたるもの。

タケミブ子　武見船。多く早船を用う。

ダシ　出し。艫の第一高所にあり。

ダシ　出し。風の名。（一）陸より沖へ吹く風。（二）東風、越後方言。

ダシヤ子　出屋根。やかたの條を見よ。

ダシヤグラ　出し矢倉。弓蓬。外艫の出し屋根あり、此上に屋あるを船頭矢倉、又は大皷矢倉といふ。唐船はこゝに舟神を安置し、菩薩堂といふ。小名、框、臺輪、根太、舖板、耳板、高欄等あり。眞向

の臺輪を荷舟にて横臺又は結といひ、立を矢切立、見送立、又は結立といふ。

タスケフ子　活命船。救船。助船。破船等の人を助くるため乗りかくる舟。水戰にては一備に三船づゝ備ふ。

タタミタテ　疊楯。疊の床の楯、又は屏風の如く折疊むべき楯。

タタミフ子　疊み船。戰用、携帶して急に應ずるため結解自由の船なり、四ッ入子にして上を蔀み、小振りな小袖簞笥程に成る、繼ぎ立てば艢はどに成る、四五人は乗るべし、馬も一疋は乗るべし、一番の挾み箱はどにして五つ入子、或は四つ入子、蓋は五とし一荷にして持たするなり、棒は水竿、臺は根太となす、柳の二つ爪の碇を持たするなり、間を二間はどづゝあけて、五六艘も列べ、竹木を結付け、其上へ歩み板を渡しからむなり、一艘に一人づゝ乗り、一端の舟より乗り出せば、忽ち川水にて横になる時、一度に碇を舟毎に入れるなり、向ふ迄屆けば一先舟より對岸に上り、樹木或は杭を打つて綱にて結びつけ、自由に渡る。

タタミキヤタツ　疊脚達。木にて高四尺許に作れる疊み能ふ脚達。

タタヨセ　風の一種。辰の方の風。

タチマチ　立待。立待月の略。十七日の夜の月。わが門をさしわづらひて寐るをのこさぞ――の月も見るらん。

タツ　立つ。起すこと。用ゐること。櫓を――。

タツアメ　辰雨。辰時にふり出す雨は長し。

タツイタ　立板。

タツガシラ　辰頭。龍頭。みおしの條を見よ。

タツキ　立木。船端に小柱を立て、細き桁を渡すこと。

タツマキ　龍卷。空氣の作用により海水の急に立ち上ること。――に逢ひたる時は笘むしろなどを渦に投げこみて其間に船を乗り退く。

タツル　燒る。燻る。燒き熏ぶること。

タツワラ　たつわろ同じ。ゆりたつの條を見よ。

タテ　楯。椋、榎或は楠板にて作る、其面を鞣皮にて張るもわり。鐵砲――、弓――、水――、蒲團――、繩――、木綿――、幕――、茀――、木幔――、カラクリ――、臺――、竹ノレン――、袖――、釣――、人形――等あり。

タテイタツクリ　楯板作。關舟等にする、垣臺の外を敷居の溝の如くし、上には折釘を垣に打て、楔にてしめ、楯をはめはづし得べきやうする制作なり。

ダテコハヤ　伊達小早。漆にて丹青をなせる小早舟、又花小早と稱す。

タテスズ　立鈴。

タテヒトヘカラワノリナヘ　竪一重からわの備へ。

タナ　棚。枻。(一)物を載する横板、机――、下司等の如し。(二)舟のわき板、ふなのへ、ふなへた、ふなはら、ふあはた同じ、うらうへの舟ばたに打つ板。

タナカブセ　枻襲。棚蔽せ。荷蹈の上に打つ物、又下げ橋床にする時は則荷ぶみなり。

タナナシラフ子　棚無小舟。棚も無く小なる舟、劔先舟一枚棚三枚棚の制これなり、ふたていたの條を見よ。

タバル　燻る。舟を陸に上げて水入りを火に燒くこと。

タビヤ子　旅屋根。たびあまと同じ、やかたの條を見よ。

タフ　椽。樟の古名、船材とす。

タフス　倒す。舟戰語、敵が檣をおろすこと。

タマキズラツクラフ　彈傷を繕ふ。舟銃丸にて扱かれたる時は、古木綿切れを敷き、板を當て、釘を外足に打つ、尙瀨水込み入らば竹のみにて木綿切を打込み、或は松脂を流し掛け、又小玉の疵ならば鉛或は木の栓をさすを古法とす。

タマコ　字未詳。ねくゝりの條を見よ。

タマベリ　玉緣。筋の別名、四五の條を見よ。

タン　反。帆木綿一幅を一反といふ。十六――の舟。

ダンベエブ子　團兵衞舟。石舟或は過書と荷舟の大なるものを呼ぶ名。

タルフ子　樽舟。檜垣の條を見よ。

タレス　垂簀。廻船に荷を積むに左右の船枻に、ほてをあて、其上に垂るゝもの、いさすと同物異用なり。

タレトキボシ　誰時星。明星。啓明。金星をいふ。あかつきの――も山の端にまた出なくにかへるせなかな。

タワラタテ　俵楯。義未詳。

チ

チアユ　字未詳。東北の方より吹く風。北國の方言。

チウセキ　中積。櫓數四十丁內外の船。

チウセン　中船。古傳に六十挺立を――とす、又五十挺立を――とす。

チアラシ　地嵐。一地方の山の方より沖へ吹き出す風、風の方位は地方にて違ふ。

チカゼ　地柳。もやひくひの條を見よ。

チクダリ　字未詳。南風の義、越後にていふ。

チフ子　地舟。其土地の舟。

チンナケイ　陳和卿。源實朝の時唐より渡來せし佛師、實朝の命にて由比が濱に渡唐の大船を作りしも功成りて浮むること能はざりしといふ、今の船渠の制を知らざりし過あり。

チャウチャウグモ　蝶々雲。風を送る雲、白さも黑さもされ〴〵に一丸に風下へ早く行くもの。其風長く吹く。

チャウチン　提灯。戰船夜中の相印とす、風を受けざるよう筒――を用う。

チャフ子　茶船。攝津川荷船、十石積。

チヤン　瀝青。松脂と油を煉りたるもの、船用――は石灰を荏の油にて煉る。

チヨクリウノフ子　直流の船。平地直流の河船は、長く造り、木棉帆を用う。

チヨケブ子　猪牙船。ちよさぶね同じ、もとは兵庫の飛脚船なり、飛脚船の條を見よ。

チリ　知利。船尾の掛板。

チリオトシ　塵落し。せかいの中通り二三尺斗つゝにして、裾を格子に切り透かし、下ばりも上より見ゆる樣にするもの。又闌干の下は横に木を張るもあり、板を張るもあり。

ツ

ツカス　突かす。戰語、逆風に逢ひ、波ゆられて、風の收まるを待つこと、

ツガヒ　番。二本の水桿を一――となし、檣に架して蓬をふくもの。――繩は苧の細さもの。大船のは、つくをも用う。

ツガヒフ子　番船。多〳〵の戰船、連聯して敵に當るをいふ。

ツカヒコハヤ　使小早。使者の乘り用うる二三端の小舟。

ツカヒテンマ　使傳間。輕き用向き、敵に當らぬ時の使者舟。

ツキ　月。月色栗色に見ゆるは風、白きは雨なり。――の入の中滿、――の出の中滿、

ツキノミ　突鑿。擊たずして、衝きて用うる、柄よりも穗の長き鑿、船匠繼手のみとす。

ツギテ　繼手。一本水押の小名。

ツギテクギ　繼手釘。瓦、小直艫瓦又中枻大繼等をかたむる釘、又手うちは釘と云ふ。

ツギテノミ　繼手鑿。つきのみ同じ。

ツキンカナモノ　頭巾金物。又、鼻といふ、端隱しの金物、櫓床、櫓床臺端、知利、風切立、角立、筋、雨覆等に用う。

ツク　字未詳。（一）樹の名、暖地の產なり、其毛を繩に作る、棕櫚に似て黑く長し、赤――黑――の二種あり、水押の飾髮、又は、にくさび等の飾に用う。――繩は海川共用う。（二）柄。ろの小名。（三）――のふね。舶。

ツケバ　着場。戰語、一二時乃至平日許も舟をかけおく所。

ツケダシ　附出シ。一名、築出シ。一本水押の小名。

ツケトメ　附留。一本水押の小名。

ツケモノ　附物。せめこみ金物の條を見よ。

ツナミ　津浪。海嘯。海水忽然陸を犯すをいふ。

ツチフ子　土船。山土等を運送する川船。

ツツ　筒。船の中央にあり、觀世音住吉大神等を安置するもの、筒男の神の御名によれり、榊にて作るは古法なれども、榊には大木なき故、松を逆木に用ゐて代用す。別名船玉、檣を立つるに、うつろなる木あり、――なり。――闌は腰當の別名、――立は筒立つる儀式。――のかたのからかい、――のからかい、――のかたろぐこ、――船玉。

ツツハサミ　筒挾。檣をからみつくる所、帽子指天に代ふるものにて多く荷船にあり。

ツツミイタ　包板。荷船は總廻りを薄板にて包む、早船も大船は中枻より下廻りを包む。

ツツミクギ　包釘。釿頭どて、四方釘にて、包板を打つに用う。大包小包とありて大數小數と呼ぶ。

ツナ　綱。麻、檜、樓櫚、藺等にて作り、大小各種あり、加賀苧――、藺――、檜――を廻船の三綱となす。細――、細曳、金曳、碇――、摸合――、

流しがらみの各種あり。

ツナギフ子　繋船。船と船とをつなぎ合せて、飛脚用となし、又行列に遲速なきため船をつなぎ合すもの。

ツナキリ　綱切。幅廣鎌の刄の渡り一尺もあるもの。

ツナクリ　綱繰。飛車の條を見よ。——窓、綱摺同じ。條を見よ。

ツナスリ　綱摺。艫一番の間の枻、碇のやりとりに摺るゝ故、樫の木にてかぶせる蔽ふをいふ。一名綱くり、

ツナタテ　綱楯。繩楯同じ、舟の綱を操り並べて簾の如くす。

ツナデ　綱手。引綱の條を見よ。——引く灘の小舟や入りぬらんなにはのたつのうらわたりする。

ツナバシゴ　綱梯。二條の大綱に子を結びたるものにて、其綱の兩端に鍵あり、船に打ちかけて登る。

ツナヒラキ　綱開き、出船前に行ふ祝ひ事なり、船玉に神酒を供へ、祝の謠など謠ひ、神酒を大將始め船員一同祝ふ、大將敬て海神を拜す。

ツナヨセ　綱寄。小元結同じ、大綱を引寄括る細綱。

ツバノミ　鐔鑿。のみの一種、船匠の船釘孔を穿つ具、兩刄、片刄、片鐔あり、又釘の大小に應じて各種あり、うちぬきの條を見よ。

ツボオロシ　字未詳。帆をおろす繩。打廻しの中の小猿の(長き一本)孔につけ、帆をおろす時此繩にて引く。

ツメヒラキ　詰開き。一杯に開き乘ること。——に走る。

ツユ　梅雨。五月の節初壬の日より六月の節初壬の日までを云。

ツラビキ　てんまこみ綱の條を見よ。

ツリイカリ　釣碇。眞直に碇綱を入るゝこと、延びれば引上るに暇取る故のしかたなり。

ツリカ子　釣鐵。外艦の——なり、銅鐵にて作る、もし木を用ふれば釣木といふ。

ツリセイロウ　釣栖樓。武者一人入るべき箱に狹間を切りたるものにて、刎木にて帆柱に刎ね上げ、遠見又は號令等に便す。

ツレナガシノソナヘ　連流しの備。水戰の船陣の備へ方、其式未詳。

ツリナガシフ子　釣流し舟。薩摩の漁船、小なれども四階作りなり、帆六反引く故、六反とも呼ふ、別名えつとう、えつゝう。

ツリナハ　釣繩。手すまるに同じ。

ツリフ子　釣船。魚釣る船。

ツルノハシ　鶴嘴。ひぢつぼの條を見よ。

ツレシホ　伴潮。戰語、干滿潮に乘して船を行ること。

テ

テイレ　手入。川船の艫棚。

テウノクチ　字未詳。せみの條を見よ。

テウチウセキハン　朝中夕半。一日の中、此四時毎に雲行を見るなり、毎日卯午の時は日輪所在の上下を窺ひ、酉子の時は月輪の所在、或は北斗星のあたりを窺ひ、若し其邊に雲氣あり青黑く潤ひあれば必ず雨、淡薄なれば降らずと知る、又白く彗星の形に似たる雲あれば、多くは風、色青ければ陰晦、雲氣なく晴朗なれば晴、たとへ雲霧ありとも漸く開くは晴と知る。

テウチハクギ　手圍扇釘。繼手釘の條を見よ。

デキシヲスクフ　溺死を救ふ。死体總身に灰をかく。凍りたる死體は藁火にて暖め、暖衣を着せしむ。又雞の冠の血を取り明礬に和して服せしむ。先づ口をこぢ開かせ、物をかませて水を吐かしめ、衣類を解き去り艾を以て臍中に灸し、管を持ち兩人して其死人の兩耳を吹く時は忽ち活くべし。又法、其死人を逆に背負ひ走りて水を吐かしめ活かす。又外に皂角の末を絹につゝみ穀道の中に入るゝに水出て即ち活く、後鴨の血を呑ましむ。以上皆古法なり。

テキフタツアリ　敵二あり。船戰に此諺あり、一は俄に潮風の變にあふこと、一は敵遠しと雖も風潮の利に乘じ、俄に攻來ること。

テグスツナ　天蠶綱。てぐすにて絢ひたる綱。

テクリフ子　手繰船。今非船條を見よ。

テザヲ　手桿。船のさしらふ時兩方よりさし張る棒。又物をよける棒。寸尺定りあり。

テスマル　字未詳。和蘭の作にて形小碇の如く、內外にまくれ、水中に下せば廣がり、物を取るに便なるもの。又熊手爲口の類に細鎖をつけ、夫より細引をつけ敵船へ打ちかくる物を、すまる、又は、てつたもと云ふ。

テタテ　手楯。手にする楯。

テヅクリ　手作り。だしより中に在り、大將の召船にては左右にあり、船頭矢倉のこと、下は物置押入となす。小名、立坐の板、框、敷居、鴨居、刀箱等なり。艙の高樓のこと、高三尺程に圍干を作り、幕楯にて圍ひ、船頭こゝに居て乘前のこと一切を司る。

テツタモ　鐵撈網。網杓子の如く作れる鐵網に長き柄をつけたるもの、火器を拾ひてはね出し、又は火器を投げ出す船戰具。

テツバウノミガマヒ　鐵砲の身構。船中にては腰だめ立放し。或は物にもたせて打ち、膝臺にせぬを法とす。

テツバウタテ　鐵砲楯。厚二寸、長五尺許、幅一尺五六寸、裏に五所許り棧を打ち、手形をつく、手形に繩をつけ、竹把をつくるやう墻立にからみつけ、又は掛金鐶にて打ち留む。

テツベウブダテ　鐵屏風楯。鍛鐵にて幅一尺五六寸、蝶番にてたゝむやうに作り、裏には貫木を打ち、横に樞を通し、之を手掛りとす、大將樓上より巡見の時用ふ。

テナガフ子　手長船。戰語、引船又は鯨船を云。

テナハ　手繩。數多の帆綱の中、最も上部にありて、帆桁の兩端につく二條の繩、船尾に引き、ひらき、とぎるなどの時、この繩にて帆を自由にす。——留、——根緒。

テバタ　手旗。戰語、采幣をいふ。

デハナ　出鼻。岬のこと。

テンキタイガイ　天氣大概。正月より六月までは北風南へ廻れば日和、春の南風は雨、夏の西風は雨、秋の北風は雨、又いつにても東風吹けば雨、冬十一月より春正月までは西あなじ南へ廻れば日和、子辰申時より降出たる雨は長し、丑巳酉より降り出でたるは一日降る、戌午寅より降り出でたるは半日にて晴る、卯未亥より降出たるは暫時降りて後晴る等。

テンチクニワタリシフ子　天竺に渡りし船。制は上廻りは丹土色に塗り、又は白木に油を引きたるもあり、船底の水に入る部は悉く油石灰をぬる故に大に白し、大なるは二百萬斤、小なるは百二三十万斤を積むべし、又舳にやり出しあり、檣に高帆あり。

デンダウフ子　傳道舟。過書舟よりやゝ小なる河用荷舟なり、又海舟に同名のものあり、二三十石より五六十石に過ぎず。

デンバフバリ　傳法張。そとゝもの條を見よ。

デンバフフ子　傳法舟。攝津の名所を呼ぶ小舟、屋形あり、本名佐平太舟、又、傳法茶舟。

テンマコミツナ　傳間込綱。口卷、つら引、尾かけ綱の名あり。本船にて傳間船を上げ下しする綱。

テンマコミ　傳間込。端艇の條を見よ。

テンマフ子　傳間船。端艇同じ。

テヤス　どんすの條、やりての條を見よ。

テヲノハジメ　手斧始。造船に初めて手斧を用ゐること、式さまゞあり。

ト

ト　門。海峽。

トイテ　字未詳。日和の風、近江方言。

ドウ　胴。(一)船体を人体に擬して付けたる名、船の胴にあたる格床の間、——の間、二の——三の——と呼ぶ。(二)車立、挾、指天のこと、卷胴、回轉木同じ。

ドウカベ　胴壁。垣立の外一面に鐵砲楯を掛け並るもの、膝臺にて鐵砲を打つに程よき處にて狹間を切る、此内に隱れて敵を打つを身隱しといふ。左右の舷を圍ひ、矢玉の防ぎをなすこと。楯の如き板に矢間を切り、金物を打ち、扇鉸にして、舟の外一尺五寸はゞ緣出るものなり、其緣の端木を臺と云ふ、其木に高五尺程に木を立て、貫をかため、右の——を作る、木材は松、楠たるべし。——作りは垣もなく一面に板にて包みたる船なり。

ドウカハラ　胴瓦。船の底板のことなり、かはらは一にしきと云、又河船に限りて敷といふ地方もあり、二つ瓦の舟、とゆるは胴瓦艫瓦の二つなるべし。

ドウス　字未詳。どんすの條を見よ。

トウセンボウ　字不詳。八十八夜の風のこと。

ドウツキ　胴突。(一)胴——、金突は古昔敵船の胴を衝き破るに用ひし具なり、後世木筒棒火矢を以て代用す。形は鐘を衝く撞木の如し、(二)みさをのことなり、大竹の根をはりてこれをとぎて用ふ。

ドウノマ　胴の間。中倉。どうの條を見よ。——舟梁、胴の檣床。

トホヒガタ　遠干潟。遠淺の地、水色薄し、干潟となるところは淺きにより、底の砂の色の變りて色白けて見ゆるものあり、湊口などの水色も、とこ海と干潟とは黒白に分れて見ゆ。

ドウフナバリ　胴舟梁。腰當の別名。

トウユトマ　桐油蓬。桐油の蓬。

トウリカク　字義未詳。

トガ　栂。船材によし。

トカイ　渡海。（一）船にて海を渡ること。（二）海船の一種、小早船と呼ぶ、關船の小早とは別にて、早船につく小早なり、五六反帆より、十七八反帆に至る、何れも小早といふ、長州赤馬關と豐前門司が關との邊、この――船を小倉――、又は小倉船といふ。交代の諸士其他旅客をのせ攝州と小倉との間を往復す。下に荷物をつみ、上の艙に衆客を載す、總屋形總矢倉にて左右に蔀あり、艙あり、臺ありて、垣立なし。艫に垣立を用う、これ渡海第一の船にて――作りといふもの一法なり。

トキフ子　解船。老朽船を解くこと、大坂阿波座堀に――町あり、――の材を賣買す。用て家屋の材とす。

トキヲシルハフ　知時法。洋上にて夜中時刻を知る法あり、先つ磁石にて方位を定め、破軍星の劍さきの向ふたる方を考へて、夜時計に代るなり、占ふ時正月にて此劍先辰の方に向ふてあらば、辰卯寅丑子と逆に跡へくり五つ目に當る子の時と知る、二月は跡へ六つ目、三月は七つ目、四月は八つ、五月は九つ、六月は十、七月は十一、八月は十二、九月は一つ、十月は二つ、十一月は三つ、十二月は四つ繰りて、各其繰り當終りたるところの刻と知るべし。

トコ　床。下金。ふなとこ同じ、櫓を架す故櫓床、梶を架す故舵――といふ。肥松の木を用う。小名、羽子板、丸口。

トコウミ　床海。水深き海。水厚きによつて高みより見れば水色紺なり、切立たる樣の山の下、必ず――なり。

トコマキカ子　床卷鐵。梶床の丸口の左右を卷く鐵もの。

トタテ　戸立。眞艫の板なり、上の幅を肩、加敷中枻の付處を根戸立、中枻の留りを切上といふ、俗名あんかう、川舟にては、左右に立つ木を角木、中を――といふ。――作り。――板。

トヂ　字未詳。早船の形の如き舟の、内すきて、ふくらみの無きを云。

ト子キ　戸根木。なげいれの條を見よ。

トビクルマ　飛車。水繩下にあるを脇取の車といひ、其他處々に置く故に――といふ、或は表にあるを綱操とも、やり車とも云。

トビセミ　飛蟬。帆柱の蟬に同じ、小舟にて絞車の代りに用ゐ、檣を立て、水繩を卷き、梶を上ぐる等其用少からず、車の心木を俗におくこ、車をもちと云ふ。ろくろざの條を見よ。

トホアサ　遠淺。海の淺くして干潮には底見ゆるほどの處。

トホシヒカヘ　通扣。扣木の制の一種。

トホミバン　遠見番。四五十里も見ゆる望遠鏡にて斷へず見て居り、敵船を見出せゞ直に注進する役。長崎にて六月紅毛船入津の比は兩番所の内早く見つけたるを手柄とし、面々出精す、目を放たず望見し、一番の注進をなしたる者には米十俵を賜ふ例なりし。

トホミフ子　遠見船。遠見する船、多く早船を用ふ。

トマ　笘。蓬。關舟には澁紙笘、荷舟には萱――、藁――を用う。軍用の物は火付を防ぐため、澁紙へ繩紙捻を十字に入れ、端に丸竹をくるみ、町屋藁をひきて用う。茅萱の葉を重ね、其本を編みて作るものを毛――といひ、御座船、關船は桐油――を用ふ、――もて屋形にするは小船に限る。――手は蓬をふきてくゝる繩。

トマリウヂヤ　字義未詳。

トマニヒヲカケル　蓬に火をかける。舟迷へる時。蓬に火をかくること。燒火權現の條を見よ。

トマヤカタ　蓬屋形。蓬の條、屋形の條を見よ。よせかへり浪うつ舟のとまやかたうきねは夢もえやは見えける。

トマル　泊る。一夜以上舟を宿すること。

トマヲヲツク　笘緒を突く。帆を早く下ぐること。

トモ　艫。艫の後方の總稱、舳艫の字顚倒して用ゐる多し、今邦俗に從ふ、――、へ、共におもてともいふ、表の字にて通用す。

トモイキ　艫引き。舟の癖にて押入のする舟に用うる仕方なり、小舟にて荷の左程無き時は舳の櫓を所々間を置きマビキて艫に立ちつむる程にすれば

——になるなり。又舳櫓の押入を次第に繰り越し櫓口の方へ立るなり。

トモイタ　艫瓦。艫の航。ふたていたの條を見よ。

トモカワラ　伴潮。戦語、つれしほに同じ。

トモシホ　艫棚。艫の枻。

トモダナ　艫付。陸へ舟をつくるに艫を先にすること。

トモヅケ　縞。船の鑪の網、もやひづな。

トモヅナ　舳の次の長。瓦を三折にして、八分がゝりなり。譬へば十反帆なれば柱八寸角なり。

トモノジノナガサ　伴の船。鈴船同じ。かこのおす音にしるしも霧の間にゆらのとわたる——。

トモノススフ子　艫の窄りたる舟。足弱し、艫の方窄りたる舟なり。

トモノスボリタルフ子　川舟などの艫の兩脇に出たるところ。

トモノチリ　艫の繼。艫瓦ともいふ、船後の底板なり。

トモノツギ　艫間。後倉。櫓後。

トモノマ　巴網。義猶考へを待つ。

トモヱツナ

トモヤ子　艫屋根。出し矢倉の條を見よ。

トモフナバリ　艫舟梁。艫の舟梁。

トモフ子　(一)從船。本船に從ふ船。(二)友船。友となる船。——は筑紫も伊勢もこぎわひの同じとまりに浮寐をぞする。

トモロ　艫櫓。舟の脇にあらで艫にある櫓歟。おそろしや——はしりて浪間行あからをふねのあからめなせる。をふねこぐ——にも猶たゝしとや。一説、一ならぬ櫓。

ドンゲリフ子　北國船の條を見よ。

ドンス　手安。加賀の苧の細引綱にて、枕柄にかけて引くもの、風荒き時は幾筋もかけて枕を取る。てやす、九州にて、とうすと云。

ドンブリ　字未詳。攝州にて呼ふところなれども其義を知らず、百三四十石積の小船、中國路に買積をする商人船。

ドヨウアヒ　土用間。土用中に吹く北風。

ドヨウサブラウ　土用三郎。土用の三日め、天氣の見定めにすることあり、特に夏の土用の三日めを云ふ。

トヨハタグモ　豐旗雲。其形大旗の飜るに似たる色赤き夕の雲。あさの原——になる神のおと過ぎやらぬ夕立の空。本は天智天皇の御歌より出でたるにて、しかと雲の名にもあらぬを、後の歌人等雲の名とせるなり。

トラアメ　寅時雨。寅の時に降り出す雨は降り降らず曇。

トラス　取らす。戦語、敵に港など取らるること。

トランカン　かきたつの別名。棚へ木を渡し此立木の上へ一二尺の格子の如きものを組み設くるを云ふ。

トリアメ　酉時雨。酉の時に降り出す雨は都て晴る。

トリカヂ　右枕。取楫。酉舵。おもかぢの條を見よ。舳の左へ船を行ること。かぢつかと舟の水押とあちこちになるなり。

トリキ　取木。枕柄の條を見よ。

トリツナ　取綱。せかいの端通りに鐶を打ち、三尺斗の細引ひこきなどを通し、せかいにて働く者の、いきづあとなすもの。

トリノイハクスブ子ノカミ　鳥石楠船神。

トリ井タツ　鳥居立。おほたつの條を見よ。

ナ

トロキ　寛き。棚の——、舟の形ノラリとしたるを云、遲き船の形と知るべし、其形の舟は、早緒を縮め、ほその通りにすれば、櫓の水入淺くして舟早し。

ナガキフ子　長き舟。形狹く長き舟、足早し。

ナガシシガラミ　流し柵。竹を繩にて柵の如く編み、浮きと釣合をつけ、敵の來るべき水路に置きて障害となすもの。

ナガシトミ　長蔀。しとみ板の條を見よ。

ナカズミ　中墨。舟梁の中墨より中墨迄の事。

ナガセ　長風。夏の土用の頃、數日吹きて暮前より北風と變ずるもの。

ナカタツ　中立。垣立の大立と大立との中立となり二本あるもの。

ナガダナ　中棚。上枻の下、根枻の上にあり。川舟には大概中枻なし、早舟方にては、かしき——とも云ふ、二階作り、三階作り、四階作りあり。

ナガトクミ　長門組。棲樓を組むに松平太繕太夫の家傳の法なり、井籠の横木を結ふに用うる繩のか

らげ方にて、假令ば女の一筋の絲を以て三ッ繰にする如くにて是を用ふるなり。

ナガナダ　長灘。長き灘。

ナカニシ　中西。風の一種、亥の方より吹く風。

ナカヌキフナバリ　中貫舟梁。櫓床と舟梁との間にある舟梁。

ナカノマ　中の間。舟の中部。

ナカノリノツモリ　中乘の積り。一端につき八九人位。

ナガハマ　長濱。豐前――の飛脚舟。飛脚船の條を見よ。

ナギ　和。風。風の衰へ和げること。

ナゲル　投る。戰語、敵の碇を入るゝことをいふ。

ナゲイレ　投入。蹈立架なり。中國にて戸根木。

ナゴリ　餘波。波の一種、日和よき日うね〳〵と音なく來る大浪。伊勢の海の――を高みわぶるあまも物おもふことはえしもなさらじ。

ナコロ　餘波。暴風雨の後など天候よくなりても猶水のうねるもの、なごり、うねり同じ。――にはこぎもどりけりあはれわが別れの道に東風も吹かなむ。

ナダ　灘。洋。海の荒さところ。

ナダメ　灘目。海船の一種、川舟の道灘舟の如し。

ナダイミ　灘忌。一、九、十七、廿五日等を船にて嫌ふなり、七、十七、二十七日は俗說にも此日を兇とす。

ナタネヅユ　菜種梅雨。三四月頃吹く東南の風。

ナダフ子　灘船。攝津國の名所をよふもの、攝津三茶屋の船をさしていふ。

ナツノテンキ　夏の天氣。五月の入梅たりとも、山に雲なく風強ければ雨ふらず、風なく、南風にならば雨なり。雨中にても朝東風兩三日吹き通せば。四五日中に晴、全体東風は雨になるべき筈なれども入梅と、土用とは、降りつゞく雨もあがるものなり、六月は辰己風あれば風る、未申より吹く風は雨、又は風になるべし。

ナナマスボシ　七星。北斗の七星、數七にて斗形をなすが故に呼ぶ。或は云ふ七在星なりと。我戀は――にいのりのみ人のおもひをそらにしるなり。

ナハ　繩。（一）つな。（二）大工用ひて水平を知る具、白繩水繩同じ。

ナハタテ　繩楯。繩を繩暖簾の如く水際までさぐるあり。

ナビク　宇未詳。楯を外へ――、內へ――等、靡けば。勾配をもたすることなり、大船の圍板は內へ――、小船のは外へ――、外へ靡くる方砲丸を避くるに利あれども、大船にては風のしぶく事强きゆゑさらふなり。

ナンバ　南蠻。滑車。南蠻車の下略、綱をくりこす所に用ふる車、筈緒につくるもの三あり、上――、犢鼻――、根――これなり、之を根付ともいふ、又水繩――あり。

ナンバンセン　南蠻船。南蠻の船、寛永十五年入津禁止。

ナミ　波。水の風潮等のため、皺みうねるもの、並水の義とて呼ぶか。鳴水の義といふ方可ならんぬ。

ナミクルマ　波車。舟の異名。古さ物語に見えたり。

ナミセキ　浪關。舳の口の浪をふせぐ所なり、中敷居込板ありて戸を立つ、――廻りとは表の眞向なり。

ナミヤブリフ子　波破り舟。小早の一名。

ナミワリ　波破り。舟の底をいふ。

ナミノナ　波の名。あばき、ねなみ、ねなし、うねり、なごり等あり。

ナミヲオフ　波を逐ふ。大濤に逢ふ時、割竹にて舷端を叩き或ハ大聲を發して――なり、又軍粧とも云ふ。

ナマソリ　曲鋲。造船工の用うる鈎の如く曲りたる小刀。

ナマヅフ子　鯰舟。舟の頭圓くして鯰に似たる小船。

ナママル　鈍丸。臺少し圓みを帶べる鉋。

ナライ　風の一種。（一）丑寅の間の風、（二）戌亥の方より吹く風、江戸方言、あなせにおなじ。

ナル　鳴る。戰語、風、帆桁帆柱を折ること。

ニ

ニウリフ子　煎賣舟。川筋往來の舟、川口入津の廻舟、かかり舟等につき、旅客に酒食を賣る小舟。

ニカタ　荷方。荷物の目方。

ニカイツクリ　二階作。船の作りの一種、船側の櫓板二板重るもの、三階作り、四階作り、準じて知るべし。

ニカイ　二階。海敷の上の兩方をいふ。

ニガシホ　苦潮。汐の色常に變りて滿ることあり、大風吹き來るべき兆にて、風より二時ばかり早きを常とす、舟を磯に寄せて乘る。

ニギル　握る。戰語、味方の幕を――、納るゝこと。

ニクサビ　荷轄。ニクサミ、ミサクビ同し、（一）船に荷をつむ時足入る故、筈筵などにて竹をふちとし蔀するをいふ、船の荷にかくるもの。（二）水草、逢わらこもを編み、竹にはさみ長五六尺づゝに作り左右の蔀とし、又荷をつみ其上に立て、浪をふせぐもの。――ぞかくへかりける難波潟舟うつ浪にこそ寢られね。

ニジウシチヤウタチコハヤ　貳十四挺立小早。瓦長五尋四尺、肩、廣貳尋六寸、にょし長貳尋、底深さ三尺九寸、間積り艫の間五尺、小屋形五尺、筒の間七尺、胴の間七尺、表七尺小間三尺六寸。

ニジ　虹。水氣の日に射られて空に現はるゝ橋の如きもの、一天に立拔くる時は靜なり。

ニシアナゼ　字未詳。戌の方より吹く風。

ニシカゼ　西風。酉の方より吹く風、此風四五月の頃吹き出し、南へ廻れば日和なり。

ニシキ　荷敷。ほての條を見よ。

ニジノテンキウラ　虹の天氣占。朝の虹は三日の中に雨ふる、暮の虹は晴、時として虹眞直なるは大風の兆なり。

ニシノミヤノミカミ　西宮御神。風祭る神。

ニシノミヤトカイ　西宮渡海。兵庫渡海より小にして、屋形矢倉臺もなきもの。

ニジツコクフ子　二十石舟。淀上荷の本名。

ニシマゼ　字不詳。未申の方より吹く風。

ニシリ　荷尻。ほての條を見よ。

ニヂウマク　二重幕。陰陽幕。外幕、內幕を引くこと。常の幕を恒立より壹尺五寸或は二尺或は三尺もはり出して走らかすべし、間に突張をして打つよし。

ニタリ　似關舟。半關とも荷舟にていふ、下廻りは荷舟の如く上廻りは關舟に似たる故名あり、關舟荷舟兩樣の用をなす。波の上も子の日の野邊に似たり舟ひかばやともに小松しめなは。

ニツチイロ　丹土色。船を此色に塗ること古風なり。

ニテウダチ　二挺立。早船の中、至つて小ささもの。

ニテウロノオシカタ　二挺櫓の押方、小舟の――は、一人は押し、一人は引き、左右交代するなり。

ニニンガカリ　二人掛り。櫓床の間の二尺八寸あるをいふ、小櫓の一人がゝりに對してなり、大にして長き櫓。

ニニンコギ　二人漕。四十挺立以上の大船にて、櫓一挺に乘人二人かゝりて推すこと、にゝんがゝりともいふ。――何十挺立とは船の大さをいふ語。又關舟の名。二人こぎの五十挺立は水主の數、百人に及び、舟の制も少しく異れり。

ニフミ　荷蹈。船側櫓床より上を云。

ニフネ　荷船。荷つむ船、商船。大さは米を以て定む、譬ば百石なれば、何丈何尺と定むるなり。崇神帝の十七年、諸國に合して船を造らしめたるは――の始といふ。

ニフチカコノツモリ　荷船水主の積り。三四端帆の船は五六人、五六端帆の船は六七人、夫より帆一端につき一人掛り。

ニフネニヒトヲノスルツモリ　荷船に人を乘する積り。帆一端に三人がゝり、又は四人掛りとす。

ニフネノカザリ　荷船の飾。相印の紋を付け、丸號を染め込みて幟を立つ。

ニホンタツ　二本立。むまのかしらの條を見よ。

ニンズノツモリ　人數の積り。定法艪數一倍一割增とて二十挺立てば士卒二十人乘す。

ニモツフ子　荷物船。行李船。荷方船。大名の米穀を京師に運送する荷船は、皆石數を以て名とす、二十石、三十石、四十石の如し、但其大なるものも八十石を過ぎず、四ッ足作り、表箱造りなり。

ニヨシ　女首。みおし同じ。

ニロクテウ　二六挺。十二挺立の事、古法の呼び名なり、二四挺は八挺立なり、其他之に準ず。

ヌ

ヌキ　貫。（一）兩船側間に渡したる横木。（二）垣立の貫なり、上――、下――、地――、押へ――、又眞向廻りにあり。

ヌキトホシ　貫通し。帆の條を見よ。

ヌク　（一）貫く。櫂を――、櫓床を――、は櫂を立て櫓を立つること。（二）減く。船梁を――。帆を――は、十端にも五端にも細くするを――といふ。

ヌヒクギ　縫釘。すべてはぎめを縫ひ合す釘、落釘ともいふ。

ヌヒクタシ　縫下し。帆の條を見よ。

ヌマノイカリ　沼の碇。常の碇は四爪の碇にて、利き過ぎて取れず、常の碇に爪を二つ間引きたる形なり、子持に付けたる石にて引故、是非爪一本にてかく樣になり、其爪の分も眞直に入る事無く横筋違にかく。

ヌリコハヤ　塗小早。丹青にて彩りたる小舟。

ヌリフネ　塗舟。漆にてぬりたる舟。蠟色、本朱、紅がら、眞塗、花塗、溜塗、かき合せ塗、ちやん塗等あり。

ネ

ネアメ　子時雨。子の時より降出す雨は長し。

ネアゲツナ　根上綱。折込綱の條を見よ。

ネイハ　寧波。鯨の鰭にて編みたる笘なり、船端につけ波浪を防ぐといふ。

ネウシ　子丑。船首の事。

ネカラミツナ　根搦み綱。帆柱の根をからみつくる繩。

ネククリ　根くゝり。笘緒の——なり、水押に打廻して、南蠻にかけ、根をくゝるもの。たまこ、首玉、おなじ。

ネコフキ　猫羅。小間を高く上るを——にするといふ。荷舟にては五尺の間高く上るを山五尺といふ。

ネコボコ　字未詳。海敷と、中棚の合め通りより餘程下に敷くなり。

ネタナ　根枻。かしきの別名。

ネツキ　根付。はやをの條を見よ。

ネツケ　根付。なんばの條を見よ。

ネトタテ　根戸立。戸立の條を見よ。海敷、中棚の付所を云ふ。根棚とも云ふ。

ネナシ　根無し。波の一種、深海の大なる波。

ネナミ　根波。沖中、風無くして高き浪、沖大しけなる故、内海へ徐徐と根ざし來る浪なり、明日大風大浪の兆なり。

ネハンニシ　涅槃西風。二月十五日前後に一周間ほど吹く軟風。

ネマチ　寢待。寢待ちの月の略。（一）十九日の月。よがれそむる——の月のつらさより二十日の景もたやへたてん。（二）二十日の夜の月。ねてまちし二十日の月のはつかにもあひみしことをいつかわすれん。能因顯昭等は十九日の月のこととし、是則の歌は廿日の月の如くよめる故に姑く二義兩存す。

ネリガイ　練櫂。柁を用ひず、艙に立ち、柁に代る大なる櫂、打櫂船に用う。

ネリカヂ　練櫂。船尾のおさへに立てる長大の楫。

ネワタシ　字未詳。湖上の風、近江方言。

ノ

ノケダナ　退け棚。（一）上棚の上にかけて、取はづし出來るもの。（二）廻船渡海船等にあり、荷方のにくさびなり、又荷うけなり。

ノト　能登。癈帝朝天平寶字七年初高麗國に遣はしたる船の名。

ノボリ　幟。諸侯士太夫は各所定の船號あり、商船は船名、又は章紋を染め込み、式日は必ず立つ、これ禮旗なり。

ノボリクギ　上り釘。頭釘の條を見よ。

ノマゴンゲン　野間權現。薩摩國野間御崎にあり、唐土姥媽神の飛來せるにて、舟の守護神なれば、漂流の時に祈誓すれば應驗ありといふ。

ノミ　節。まいはだの一名。

ノミウチタケ　打節竹。節を打つ竹、開基のみうち、隅のみうち各條を見よ。

ノミヅカ　鑿柄。梮。のみ柄木。

ノリアカシ　乘り明かし。戰語、夜中に出船し、夜わけになること。

ノリアケ　乘り明け。出舟して程無く夜明けるを云ふ、乘り戻るにもよし。

ノリアヒブネ　乘合舟。

ノリカヘブネ　乘換舟。大將の乘替舟、小關を足早きやう作り、塗舟にし、遠淺の海上にては端舟に用ゐ、又陣中巡見に用う。

ノリクラシ　乘り暮し。戰語、出船して間無く日暮るゝこと、忌む。

ノリシク　乘敷く。戰語、我が船を他船に乘りかけて掩ふこと。

ノリスヂ　乘筋。航路。

ノリワシ　乘梯。

ノワキ　野分。二百十日前後、八月頃吹くやゝ強き風。

ハ

ハアマシ　字未詳。一名兩帆、帆の兩方へ下りたる繩。

バイセン　賣船。商船。

ハイタ　羽板。柁門。古書にかぢのはとあるもの、柁の小名かぢわきいたなり。少しはぎつける時の板を、若葉といふは、もと葉板によりて得たる名なり。

ハイノザ。這座。拜坐。子持の小名。檣の條を見よ。

ハイマハシ　字未詳。開きに乘る時、帆足をとること。帆の條を見よ。

バウシ　帽子。筒の上に被らしむるもの。又檣をからみつくるところ。

バウシウタテフ子　房州立船。攝紀泉より房州へ干鰯を買ひに行く船にて、表の垣立の取置になる作りなり。

ハカチ　字未詳。西北の風。

ハガヒリ　字未詳。はかせ同じ。

ハカセ　字未詳。越前船なり、俗名はがひてといふは艫の形、鳥の羽がひの如きによるか、又うづらといふも、鶉に似たる故なるべし、凡七八百石積にて、其制常の海舟に異なり、川舟のかわらの如く平底を用ゐ、水押も川舟の如く、臺垣なく、取置の上はき板あり、檣は表の方より立て、柁はろくろ柁を用う。

ハキツケ　刻付。荷舟の上樅の上に刻ぎ付くるもの、早舟小舟にあり。

ハグン　破軍。七星の事。

ハガイタ　羽子板。床の小名。

ハコオキ　箱置。義未詳。

ハコツクリ　箱造り。水押の制の一種。もと伊勢船の——より出でたれば吾妻表ともいふ、小名、箱先——ともいふ。水押の條を見よ。

ハコバシゴ　箱梯子。二階梯子の如し、裏に板あり、往來を隱す。

ハコベリ　箱緣。箱造りの小名、箱の如く左右にあり。

ハサミ　挾。大栓のあるところ。

ハサミブタ　挾蓋。箱造りの小名、戸立の上に打つ板。

ハシケ　端艇。はしふね同じ。

ハシゴ　梯子。舟底へ上下するため船桁の中より底まで板に棧を打つ如く横に木を打ち足かゝりを設け、其棧の如き横木を所々切りすかし、手がゝりとなすものにて、船中一面に設く。又大船の船底に入り、せがいに上る等に用う、梯を二つに作り、中に板を入る、浮沓の代用にもなり、蹈みはづす患も無く、もやひの時は高——となる。

ハシラオトシ　柱落。木石を投じて敵の小舟を打碎く古戰法。

ハシラス　走らす。戰語、味方の幕を打つこと。

ハシテンマ　端傳間。大中小船に添へ置く傳馬船。

ハシフ子　橋舟。端艇。大船に添ひて用を達す小舟、一名使舟、又櫓を多く立てゝ引舟することあり。傳馬、小艇、脚船、三板船、杉板、梯舟同じ。小は五六尺より、大は六尋七尋十餘尋に至る、沖を行く時大船の中へ入れおき、津港にかゝる時大船は入足深く岸につきがたければ——おろし往來を通ずるなり。碇の上げ下げに用ゐるを碇——、水を汲みに行くを水——といふ、大舶の——を入れ置くところを傳馬——込といふ。異名脚繼舟、兵書に傳馬。（二）小船。秋風にまかせてせとをわたるかゝ須磨の浦回のあまの——。

ハシラツツノマスガタ　柱筒の升形。舟底の柱の本を受くるさり形なり、此升形緩ければ波にて搖れ、緊しきに過ぐれば柱落付かざる故、柱を横へふりもぐことあり。

ハシラノセン　柱の栓。梔門。筈緒をかくる處にあり、樫にて作る。又北國船の檣を表より立るものにも用う。

ハシラヒキ　柱引。引手、卷手、先手、皆おなじ、檣を立てこかしする時、船の首尾へ引く綱。

ハシラノワ　柱の輪。せめこみ金物の條を見よ。

ハシラセカイ　字未詳。めくらすへの條を見よ。

ハシリ　走。船戰の器、打根の如く作り、緒を長くつけ置き、投げ突きにす、又鎗にて代用す。

ハシリノマ　走りの間。武者走の條を見よ。

ハズ　筈。蟬挾の上部に出る檣の末。

ハセガハイチベヱ　長谷川市兵衛。元祿のころの船匠。

バセウツナ　芭蕉綱。芭蕉の皮にて作れる大綱、海舶の碇綱とす、檜綱に類す、多く薩州にて用う。

ハタモノ　機物。磔。獄門磔等に用ゐたる不淨の木

材を云ふ、此木の一片を持てば、海上にて悪魔を避くといふ俗説あり、されども舟夫は却て知らざることゝぞ。

ハタラキフ子　働舟。小早用船のこと。

バチ　撥。鐵にて三味線――の如く作り、筋を打つ具。

ハチジフハチヤ　八十八夜。八十八夜の名殘の霜降る頃、日和損じ風吹くことあり。

ハチデ　蜂手。舟戰の具。

ハツテウダテ　八挺立。櫓を八挺立たる小舟、又、八櫓喞船を――の半舟とよます、又、八梶といふは八丁小早のことなりとの説あり、小早の條を見よ。

ハツル　泊る。船を湊にかくること。

ハズヲ　管緒。桅索。檣の管につけて表へ引く綱、本末をくゝりといふ、ちやんを塗り、帆摺管を貫く。

ハナ　鼻。出張りたる部分を云ふ、船用の金具にて櫓床――、地名にての積丹（シヤクタン）の――の如し。

ハナコハヤ　花小早。伊達小早に同じ。

ハヂコミ　字不明。舳を――に作るといへば、舳にて、そりをかくることなり、舳を――にせざれば桶底になるなり。

ハナシノミ　又無鑿。又鈍き鑿の一種にて、解船等に用う。

ハナヤカタ　花屋形。關舟など矢倉上に美麗なる立木にて樓を設くること。

ハニツチブ子　埴土舟。素盞嗚尊の乘りて東に渡りし船、はに土にて作りしものといふ。

ハヘ　嘴。山の足の海中へ入りたるところ。

バヘ　南風。南より吹く風。

ハマグリフ子　蛤舟。蛤などを捕る小漁舟、攝津河口にて蛤を取るには小舟に車知を設け、さし網に重りをつけて海に沈め、車知を卷て之をとれり。

ハマニシ　濱西。九月に續きて吹く西風、冬のあゝじに續く。

ハンカキツクリ　半垣造り。垣立の寸法を半にする造りの一種、小早舟等多くこれなり、屋形、帆、棚、日覆等あり。

ハンセキ　半關。似關（ニタリ）舟の條を見よ。

ハントウフナバリ　字未詳。舟艫の空曲の米を洗ふ所にある舟梁、まるくちの條を見よ。

バンノカゼ　番の風。春東、夏南、秋北、冬西、これ定りの風なり、然れども春は西、冬はあなじ、この二季は定りの風に異りて吹くなり、此風に向つて吹く風は雨の兆とす。

バンノホシ　番の星。北極星をいふ、東國方言。

ハヤテ　急風。はやち同じ、雲に何の模樣もなく俄に吹く風、艦よりも横よりも急に吹き來る風、其風の起る方暗く雲の色赤黄になる、船を其方に向け楫の廻らざるやうにすべし、波しらむ奥の――やつよからし生田がいそによするともよゝね。

ハヤトリフ子　早鳥船。難波高津宮天皇の御宇に、明石の驛の楠木を切りて造るところ、其船足の疾きこと鳥の飛ぶごとく、一楫にして七浪を越す故に名く。

ハヤフ子　早船。舸。一名高尾船。關船。二挺立より八十挺に至る、又戰士又は王者の乘る船をも――といふ。小早のこと、舳を押し立て、船しきを狹め、浮かし櫓を多く立つ、垢間を張らず、上棚開かざらしむる制の船、乘組十挺立を十五人として、三十八挺立まで大積二人增なり。

ハヤワタフ子　早綿船。攝州にて、廻船、綿荷をつみ、出船する時一二を爭ふこと常なり、其船々の傳問にて、住吉、又は問屋の間を往復するをいふ。

ハヤヲ　早緒。緝おなじ。艪につくる緒にて苧にて作り、上下にて繼ぐ、上をかへり繩、下を根付といふ、船げたに鐶を打ち、夫よりわらび繩、籐繩、又は細引の類を蛇口の如く出し置き、之を櫓櫂の横木に引かけ取添へて艪を押す、太くやはらかなるは悪し、跡先は太く和かなるは卷きくゝり自由になる。五月雨に――のつなは朽はてゝ潮にひかるゝ舟ぞ危き。

ハヤヲクワン　早緒鐶。早緒つくる鐶。鐶の條を見よ。

ハユ　延ゆ。繩綱なんどを延ばし出すこと。岸近くよせつなはえてさす船にこゝぞとまりと人むかふなり。

ハラヌ　張らす。梶を――ことなり、頭綱を延ばすを云、頭綱を延ばせば梶自ら斜になる。

ハリスヂ　針路。磁石の針のさす方。又航路の義。

ハリマウハニ　播磨上荷。しかゝ舟同じ。

ハリオク　張置く。舟戰語、味方にて海中に綱を引

き置くこと。

ハルノテンキ　春の天氣。春の南風は雨、辰巳も雨、凡て春雨は強からねども降り續く、併し四方山峰の雲きれゝば晴、此時風は寅卯の間に變るを常とす、三月四方くもり南風吹けば雨、春の土用に入りて風西より北へ廻り曇天なれば其日の中に雨、尤北風にて吹きあぐるならば四五日は晴、もし西風吹き上げ、南風に直れば雨。

ハヱ　（一）蝕。日月の蝕の事。（二）瀨。海中の瀨そあゐの事。

ヒ

ヒアラシ　字未詳。比叡嵐歟。秋冬吹く風、近江方言。

ヒオホヒ　日覆。大船は矢倉の上、小船は垣立の内に付て立つ日除なり、取置に便す、桁の方孔に九立をはめこむ、小名立桁、梁等あり。戰時は木綿の裕衣或は柔皮等にて作り、矢玉を防ぐ。

ヒガキ　檜垣。垣立の筋を――にする荷船の一法、呼びて船の名とす。大坂廻船問屋の仲間船にて、六七百石以上の大船なり、すべて大廻し荷物を積むといへども、多く酒樽油樽等を積む故、樽船とも云ふ。

ヒカタ　日方。（一）未申の風、古き語、今は北國の方言。あなぎらひ――吹くらしみづぐきの岡のみなとに浪立ちわたる。或は云ふ東風の吹きやまぬものと。（二）日中の南風、土佐方言。

ヒカヘ　扣。（一）艫一番の――をからかいと云、（二）小舟にて櫓を――にせよとは取梶にせよといふこと。

ヒカヘタツ　扣立。扣をうくる柱にて、垣立の外にある立。

ヒカヘル　扣る。舟戰語、味方の帆を少し下ること。

ヒキ　字未詳。夜間海中に浮きて光るもの、大なるは火とみゆることあり。能く心をつけて靜に見る時は青色にして誠の火とは異る。

ヒキアゲル　引上る。戰語、敵が檣を立る。

ヒキオク　引置く。戰語、敵が海中に綱を――。

ヒキキリ　挽切。細齒鋸の種類、鴨居切、竹鋸等あり。

ヒキテ　引手。柱引の條を見よ。

ヒキヂカヒオシ　引違押。右の方は櫓を前へ突き、左の方は櫓を後へ引き、右方の櫓を引く時、左方の櫓を突く、此の如く互にするなり。船の幅も狹き至極の小船に帆を卷けば櫓手を減ぜざるべからず、其減じ方は人を喰違ひに間引きて、もろ潮押にするなり。

ヒキシホ　退潮。干潮。潮の滿ちたる後、退く潮。

ヒキツナ　引綱。牽紘同し、加賀苧綱、又は、なひ竹とて、小竹をひしぎて、なひたる綱にて、海上にては大船より小船へ綱を取て引く、之を引船、漕船といふ、川船には引柱あり、それにつけて陸にて引き進ましむ、一名つなで。

ヒキハシラ　引柱。川船の引船に、檣の如く柱を立て、之に綱をつけて引かしむるもの。

ヒキフ子　牽船。引船。引綱の條を見よ。（一）船を引く船、小舟にて大船をひき行こと、（二）大船のひく小舟、（三）人、船なゞに曳かれて行く船。

ヒキヤクブ子　飛脚舟。遞運船。客船。表に小き屋形あり、日和に關らずして行く小船、飛脚小早、飛脚同じ、兵庫の猪牙船、下の關の日切、豐前長濱の長濱等、地名にて呼ぶが多し。

ヒキリ　日切。日を限りて往復する下の關の飛脚船。

ヒク　引く。戰語、敵の幕を打つこと。

ビクサキ　比丘先。さしわなの條を見よ。

ビクニフ子　比丘尼舟。勸進船の條同じ。

ヒケル　退ける。碇のずり去ること。

ヒコホシ　彦星。牽牛星。――はたなばたつめと天地の別れし時ゆ云云。

ヒヂカサノアメ　肘笠雨。俄にふる雨、笠も取りあへず肘を笠にするよりいふとぞ。いもが門ゆきすぎがてに――もふらなん雨がくれせん。或はいふ肘笠雨といふもの本は無し、久方の雨の誤訛なりと。

ヒチツボ　肘坪。肘と坪とを一つにいふなり、戸障子をつり、取置に用ふるをむさう坪、突きわげに用ふるを鴨の嘴、又は鶴の嘴と云ふ。

ヒツジアメ　未時雨。未の時に降り出す雨は降り降らず曇る、未の晴は蓑笠を脱ぐ。

ヒツメ　干詰。干潮の極。

ヒトケイ　日時計。晷にて時を計り知る器。

ヒトコ　火床。ぬりかなにおなじ、木箱の中に土を

ぬりて造りたる竈。

ヒトツミナハ　一ッ水繩。水繩の條を見よ。

ヒトツバ　一葉。舟を云ふ、多くは小舟にいふ。

ヒトヲノスルツモリ　人を乘する積り。人舟に——は、帆一反に八人或は九人十人と積るを常法とす、荷船は二石壹人といひて、千石積に五百人、軍船は艘數半分といひて二百艇立の舟に百人乘る。

ヒトハシリ　一走。幕二反。

ヒトフ子　人舟。從卒等を乘せて渡海する舟、荷舟作りに似、舟底より二三重に屋形を造り、人をのす。又渡海舟。

ヒシ　菱。四斗樽の鏡をぬき、其中に蠟燭立の如きものを作り、それに松明を立て燃すものなり、此樽の底に鐶をもつけ、又は繩をも輪にして出し、碇綱を結びつけて碇を入れ捨て置き通る、跡舟のもの來りて之を見、其筋を疑ひ無く通行す。

ヒシギタケ　碎竹。岩石の海に船をつなぐ時、碇綱を包むもの。

ヒシヤク　柄杓。船中に備へて淦水など汲む具。

ビゼンウハニ　備前上荷。國名を呼ぶもの、攝洲川舟の上荷舟を用ゐしものにて、艫に大立を立て横上をす、今水押ほう一板に通して大和田作りの如く横艫にして用う。

ヒトツアユ　字未詳。北風、北國方言。

ヒナツボシ　火夏星。熒惑星のこと、あまのはら南にめくる——なにのくさともとよさとにとへ。

ヒナハ　火繩。舟戰火繩は木綿糸を——ほどに堅くよりて、煽硝にてよく煮、日に干し上を漆にてぬり用う、水かゝりても火消えずといふ。

ヒノキ　檜。木の名、船材とす。又長一尺五寸より二尺許にて幅は手ごろに作りたるを、平なる石の上にて頻りに擦れば其木自然に熱くなりて火燃ゆ、故に火氣無くなりて難義することあるの預備として航海中貯へ置く。

ヒノキツナ　檜綱。ひのきを裂きたるものにて作る、多く碇綱に用う。廻船三綱の一、すくり同じ。

ヒノデノテンキ　日出の天氣。——占は、日の出るに色赤きは雨、黄なるは大風、日の出に向ひて雲ゆくは好天氣、鷄鳴より横雲の頃を考ふ。

ビハムシ　比巴蟲。琉球船の一種。

ヒフ子　（一）檜船。檜づくりの舟、（二）火舟。火積船、燒船、ともいふ、流しがらみをかけ、二艘の船を大綱にてつなぎ、　乘り廻して敵船の腹をとりまき、火を放つて退くあり。

ヒブクロ　樋袋。板を剝ぐ鉋の一種、左——右——あり、ひぶくら同じ。

ヒモノフ子　檜物船。檜細工物、又は檜材木を積む船。長門の——。

ヒヤクサウ　百艘。（一）百の船。（二）砂船の一名。

ビヤウブダテ　屏風楯。楯に蝶番をして屏風の如くするもの。

ヒヨリ　日和。——の有樣は、毎朝寅刻より辰刻まで天色變らざる日は少し風ありとも船行妨無し、若し東に雲起れば東風吹く、又西より起れば西より吹く、南北之におなじ、雲脚切れざる時は風止まず、若し止むとも再び起るべし、又雲脚殘らざれば風漸々止む、雲脚白く黄なれば後に大風あり、朝中夕半の條を見よ。三月と六月の日和、九月と十二月の日和、朝暮、日出、入日、月、虹、電雷、春夏秋冬の天氣の各條を見よ。

ヒヨリミ　日和見。風雨天變一切を見る役、艦にあり、時々刻々注意怠らず。山立の條を見よ。

ヒラカナモノ　平金物。平面の金物、形には、出八双、入八双等あり、色には煎黑め、素銅、綠青塗等あり、眞鍮、或は滅金、毛彫唐草、又は七子打あり、臺、唐かい、横上、屋形の臺輪作り、帆棚、下主棚等に用う。

ヒラキ　開き。（一）檜の——とは、船足の限りを見て何尺にて何寸の開きといふを立て、夫に合して檜の長短を定むる、（二）船を——に乘るとは、風横吹にて船を走らすこと、磯山——、沖方——の兩樣あり、船傾くを常とす、之を楫と帆手にて正す、（三）——たる船とは、形開きて足遲き船の事なり。

ヒラクギ　平釘。傳道、磯場獵船等に用ゐる頭釘をいふ、大中小の品あり。

ヒラリコ　平底。底の平なること、通常川船のかはらは、——なり、海船にても越前船はかせは、特に——を用う。

ヒラタ　艠。平田。平田船の略。通船の形平たく大なるもの。表舳は高瀬のに似たり。

ヒロガカリ　尋掛り。船の長さ幾尋といふを標準にして、船の種々の造りを定むること。

ヒロツエ　尋杖。船匠の用ゐる間竿、一名五尺杖。

フ

フウラウグウ　風浪宮。筑後國瀬の下にあり、海上風波の難を免れしむる奇瑞あらたなり、櫓、柁、苧綱等の船具を神璽とす、祭神は級長戸邊命、級長津彦命、（以上二神風神）八十柱日神、直日神、大直日神（以上三神海神）。

フカカヂ　深柁。舵を深く入るゝこと、行軍漕船の時――にす、すべて――は船行鈍けれども、漕船の折、淺柁なれば船ゆれて惡し。

フキステ　吹捨。寒氣を吹拂ひ、陽氣に移る風。

フキヌキ　吹貫。幟の如く船に立つるもの。

フシマチ　臥待。臥待の月の略、ねまち同じ、十九日の夜の月、廿日の夜の月と兩說あり、ねまち條を見よ。

フヂミナミ　富士南。江戸方言、未申より吹く風。

フタテ　蹈立。――板といふ、古軍記等に――とあるもの、棚は、なげいれの條を見よ。舳にも艫にも棚をかき、其上にて柁を取り、櫓をおす所、即ちとも板へ板なり、之を棚ととくは誤なり。

フタナリ　二成。（一）何國と限らず東國南海にあり、千石以上の大船。（二）伊勢船は水押の形二つある故――とも云、――作りと云ふ。

フタノ　字未詳。蛇袋の條を見よ。

フチツナ　藤綱。藤かづらにて作れる繩、繫綱、碇綱に用う、正木綱同じ、多く海船にて用う、唐もの多し。

フトンタテ　蒲團楯。海戰にて矢玉を防くためにする蒲團の楯。

フナアシ　船足。喫水。船の水に入る分のこと、六分――七分――等の習あり、公義の用米を積みたる船の――は一尺、賣船は八寸を法とす、軍船には石を積み入る、足入淺ければ危き故なり。

フナアタリ　（一）船衝突。船と船と觸るること。（二）船量。船に醉ふこと。

フナアミ　船網。樓上に張り敵の火器を防ぐ網。

フナイカタ　船筏。修羅板の條を見よ。

フナイクサムシヤコトバ　船戰武者詞。戰時、物の名を潔くし、言葉を壯にし、人心を鼓舞する詞。本ふね、もやふ、掛る、付け場、走らす、引く、握る、絞る、討除き、逃る、操り上る、操り引く、揚る、卷く、おろす、扣る、下す、おこす、引上る、くつろぐる、倒す、垢、鳴る、推す、投る、張置く、引き置、打せる、取らす、えがた、霞の鞭、手はた、いさむ、てらす、手長船、くじらふね、突かす、つれ潮、伴潮、乘明し、乘暮しの類。

フナイタノアツサ　船板の厚。凡そ航板の半分を定規とす。

フナウタ　船歌。棹歌。櫓拍子と合せて歌ふ歌、初て歌ひ出すを、うたゞしといひ、同音に和するものをうた組といふ。古記に「春の野」の――あり。

フナオロシ　船卸。進水式。神酒、鏡餅、五穀等供物各十二を備へて天地を祭る、又此儀式、及び筒立の儀式の時、女の手道具、化粧の具、手早掛、帽掛絹等を用う。

フナカガミ　船鑑。今の船名錄。天保十三年春の改正として、七十五大名と長崎奉行との船印と、帆と、船幕の紋章とを三段に記せり。

フナカザリ　船飾。船を飾るに、彫刻を以てするあり、色料を以てするあり。旌旗を以てするあり、一樣ならず、神功皇后筑紫御幸の時、五百枝の賢木を舳艫に立て、三種の神寶をかけ、素幡を立てたり、舒明帝の時唐使高表仁等を江口に迎ふる船は、鼓吹旗幟にて飾れり、近代、鎗長刀弓鐵砲臺傘立笠吹貫旌旗など飾るは官船の常にて、市舶には相印の紋をつけ、丸を染込で幟を立つ、かもじも――の一なり。

フナカタノツモリ　船方の積。帆一端につき三人掛りなれば、十六端船には四十八人を要す。

フナグ　船具。柁、櫓、桁、碇、綱、橋船等なり。

フナジルシ　船印。吹貫、吹流等、風に當らざる物を用う。

フナシロ　船代。天照皇太神始て天降り給ふ時、御船にめされて御鎭坐ましませし例にならひ、泊瀨淺倉の宮の二十二年九月豐受大神を伊勢國山田原の新宮に遷幸し奉る時も、御――の內に鎭め奉る、――は天の材木屋船の靈をいふ、瑞舍を屋船と名付くる起原なり、今に至つて伊勢兩宮御遷宮の時、御神体をからみ覆ひ奉るを御船といふ。

フナゾコ　船底。船の底部、其形、海船は尖底、河船は平底を常とす。どうがはらの條を見よ。

フナタテ　船楯。船桁又は垣立に仕かけるもの、大將船は椋板に、いため革を付けたるを用う。鎖楯、綱楯、幕楯、槍楯、もち楯、壘楯、底楯等あり、

各條を見よ。

フナタナ　枻。船棚。（一）船の傍の板。（二）横に板をならべ、戸棚の如くする物。

フナタマカミ　船魂神。攝津住吉の攝社にて、祭神は猿田彦太神なり、神語に、船居は我助けん、云云とあり、海上にては先玉神といふ、又――は釋迦如來とも、大日如來とも、正觀音とも深位如來（疑はし）ともいひ。又諸神諸佛、船に御影を移し玉ふともいふ、船の中央に其神を安置す。船子のいふ語に、――進むといふことあり、船神の降臨ましますなり、其時は音琳々として寶玉を打つが如く、船中鳴動し、後必ず喜悅或は患難のことあり、又風雨の難を前知すといへり。――祓「高天の原に神つまりますすめむつ神ろき神ろみの命を以て和魂神をたゞへ奉りてうづのみてくらを捧げてくさ〳〵の色物をよこ山の如く積み足らはして神祓に拂ひ玉へば雨風の禍なく荒大海を靜め守りことよさしてすめ神安らけく平らけくまともの風になし玉へとみはぎ申す由を八百萬の神だち諸共に幸し聞し召せと申す」

フナチツモリ　船路積り。船の進行中、線香、時計、磁石等を以て陸地の山岳等を目あてにして測り、船の走る道程と、居る方位とを知る術。

フナツキ　船着。船をつけ得る地、湊。

フナドウロ　船燈籠。海戰に用うる廻り燈籠にて、鐵行燈に似、火口を開き又塞ぐ樣にし、外は銅の外輪なり、火口を塞ぎ廻せば火光外へ見えず。

フナトケイ　船時計。船用磁石をいふ、二十四方位を逆に刻み、北を船首にむけて据ゑおく故に、其針の指す所は即ち船の進む方位なり。大暴風雨の時は狂ふことある故二つ三つを備へ置く。

フナノヘ　船邊。上枻の條を見よ。

フナバタ　舷。上枻の條を見よ。

フナカハ　船側。根枻、中枻、上枻等、船の側面。

フナハラ　船腹。上枻の條を見よ。

フナバリ　船梁、船内に横さまに渡したる木、上枻にありて見はるるは楢床、下にありて隱るるは――なり、加鋪――、中枻――、皆所名をつけてよぶ、十二――の條を見よ。

フナブギヤウ　船奉行。軍船中の船子の頭役にて、大將に會議して進退を司るもの。

フナヘタ　船端。船ばた同じ。上枻の條を見よ。

フナムシ　船虫。船を蝕する蟲。湊によりては此蟲甚だ多く、大船をも食ひ破ることあり、此害を去るには、青松葉、或は生木の葉、又は煙草にて船底を燒き燻るなり、之をたでるといふ。

フナヤカタ　船屋形。やかたの條を見よ。

フナヤリ　船鎗。月輪、片鎌、十文字の類、敵を引き寄せ、突き、或は船をよするに用う。

フナユ　船湯。あか同じ。

フナリナヒツモリ　船備積。船備の間の積は、船と船との間には船を横に入るべき餘地、備と備との間には一備を入るべき餘地あらしむるを法とす。

フナタケタバ　船竹把。割竹を簾の如く編み、之を厚四寸許、幅は見合せよき程に疊みて、外より内方になびかせ、垣立にからみつけ、矢玉を防ぐもの。

フナナミ　船並。船の腹と腹とを合せ何艘も並ぶること。ほこ立、ならび立の二つあり。

フネノオコリ　船の起り。本邦の船の起りは、遠く神代にあり。其制作は知るべがらざれども諸冊二神の蛭兒命を天の岩楠船にのせ風のまにまに放流したるとの記事證とすべし、崇神帝の十七年に諸國に詔して作らしめしは今の廻船のことなるべし。そを以て本邦舟の原始となすものあるは非なり。

フネノカクハフ　船の格法。大船は二十反帆以上、中船は八十六七反、小船は六七反とす、又櫓數にて云はば、二三挺立より二十五挺までを小船、二十丁立より五六丁立まで中船、五十丁以上七十丁百丁かけて大船とす、又大船八十六反帆、五百石積ほどにて、腹の廣さ三間余、長十三尋餘、碇五十貫目より五貫目下り七挺、檣は蟬（三尺）を除き十二尋、中船は十三反帆、三百石積、廣さ二間半、長さ十一尋碇三十貫目より五貫目下り七挺、檣十尋、小船は十反帆、百五十石、廣二間程、長九尋許、碇十五貫目より五貫目下り五挺、檣七尋。

フネノカミ　船の神。猿田彦大神、舟玉神、敏馬神社、神停山大神、瀬の下大神、燒火權現、鹽竈大神各條を見よ。

フネノカザリツケカタ　船の飾付方。本船の旗、まとひ、船印等は取枩に飾り、鎗弓筒は船尾より面枩の方に折廻して飾る、飾り樣は、欄干に掛金を

打て飾り、又は横に木を渡し之に結ひつく、矢倉上には面梍取梍一面弓鐵砲蔕口等を飾る。

フネノキウシヨ　船の急所。船の死命の制せらるべき處、艙の船梁より先の垣間、胴の間の垣間、ともに急所なり。

フネノリクリヨク　船の速力。安宅船の大なる者に木帆を掛くれば一日に三百里を走る、又軍法上の定法には船の進退一息一間を常とす。

フネノツクリヤウ　船の作り樣。河と海と地方とによりて同じからず、大抵左の種類あり、伊勢造、北國造り、ふたゐり造り、雜賀造り、ぢんぶり造り、修羅天造り、（北國の大船）木付造り、五大器造り、渡海船造り、旗船造り、傳馬造り、枝船造り、橋船造り、平太造り、瀨越造り、高瀨造り、渡船造り、天滿造り、親船造り、辨才造り、さいが造り、やげん造り、漁船造り、丸木造り、傳道造り、調法造り、（利根川の船）くり造り、湖水造り。

フネノドウ　船の胴。垣立より下部を云。

フネノナノオコリ　船の名の起り。其地名、又は其形、又は其用によりていふ、伊勢船、北國船等は地に起り、ぢんぶり船等は其形、小早、鯨等は其用に起る。

フネノハヤシオリシ　舟の速し遲し。舟を造るに、足早にすれば弱くして矢玉を防ぎ難く、堅固に作れば走ること速からず。

フネノハタ　船の旗。相圖の旗、船印の旗等あり、風の吹くに害せられざる樣細く作る。

フネノフルキ　船の古材。家屋及び其飾りに用うべし、然れども家屋の材はたとひ新くとも船には用ひざる法なり。

フネノリアヒハツト　船乘合法度。船舶の法律。

掛り船へ、押行船行かゝりたらば、押船可爲落度事。

大船へ、小船押かゝりたらば、小舟同上

荷船へ、關船押かゝりたらば、關舟同上

荷舟へ、人船かゝりたらば、人船同上

荷積舟へ、荷不積船行掛りたらば、荷不積船同上

押船へ、走船行掛りたらば、走舟同上

向潮の船へ、相潮の船同上、相潮の船同上

向風の船へ、追風の船行かゝりたらば、追風の船同上

先湊入の船へ、後湊入の船押掛りたらば、後湊入の船同上

下錠の船へ、上錠の舟行かゝりたらば、上碇の船同上。

フネノリハジメ　船乘初。例年正月二日に、今年の乘初を祝する式なり。船子は船玉祭りを爲し船匠は釿始の壽をなす。

フネマド　船窓。舲。船にある窓、渡海船等に多し。

フネミチ　水路。船道。船路。船の通行に定まれる道筋。沖中に波の輕重あり。波の輕き方を行けば船行疾し。

フネユルトキ　船搖る時。船覆らんとする時は檣を伐り、十文字に船上に乘せ結ひつくれば搖れ少く輕し。磁石定らざる時は、箱に水を盛り、此中に磁石を据置けば針定る。

フネヲツクルスンバフ　船を造る寸法。櫓百丁立の船は總丈九丈、瓦の厚九寸、幅九尺、櫓八十丁立は丈七丈、瓦七寸、幅七尺とす、又瓦の長さ五尺につき、厚一寸掛り、深さは瓦の長五尺につき、七寸積り、加敷の幅もおなじ。垣立の高は、深におなじ、關船はすべて、幅狹く足入淺く、荷船は幅廣く足入深し。帆柱、帆桁、船板、櫓床、船梁、梍の各條を見よ。

フネヲヤブル　船を破る道具。船戰に敵の船を破らんには地おこし（鍬、鋤、鶴嘴）鉄槌、てこ、船鑿、（長さげんのう）斧、まさかりの類を用ゐ。へさきの垣間に打ちこみて破る。

フミタテ　蹈立。ふたての條を見よ。

フンドシバリ。犢鼻張。そとゝもの條を見よ。

フユノテンキ　冬の天氣。十月の高なぎと雖も、少しにても南風あれば日和續かず、雨ふらざれば風ふく、十月以後の西風、七日十日も吹き續きて、果は大風雨ともなる、冬至すぎの北風南風とも半日か一日にて吹き止むあり、又南風より雨になること多し、冬至の日しげ〳〵降り出せば、晴おほし、雲うすくして少し風を添へれば雨あがるの兆。

フリカカリ　振掛り。沖中にて逆潮に逢ひ、船進まざる時暫く船を掛けて潮合をまつこと、又俄に風雨に逢ひ其直るを待つこと。

フリロ　振櫓。廻船にも用う、表のからかいの際に櫓四五丁を立て置き、船を左右好む方に廻すものなり。

フルアミ　古網。琉球人之を用ゐて節とす。

フルフルハツセン　降る〳〵八專。――降る八專降る照る八專照る八專、俗諺なり。

フレ　振。ふねの古語。

へ

へ　舳。（一）船の前方の總稱、へさき同じ。（二）上枻のへた。

ヘイタ　舳板。蹈立板の條を見よ。

ヘウゴトカイ　兵庫渡海。渡海船の一種、屋形矢倉なく、臺ありて垣立なきもの。

ヘウラウツミヤウ　兵粮積樣。兵粮を俵のまゝ積めば、輾轉して接戰の際に利あらず、よつて大箱に米を入れ船底におくを常とす。

ヘキリブ子　部切船。糞船のこと。幾間にも仕切る故の名、一名間船。

ベザイテンツクリ　辨才天造り。一種の船制。

ベザイ　常の荷船なり。――作りは一種の制。べざいてんつくり同じき歟。

ヘザキ　舳先。への條を見よ。

ヘタテ　隔。軍船の舳より艫まで高五尺許に板を立て、或は細引幕等にて仕切なし、面枻の者と取枻の者との往來を禁じ、足入釣合を取る。

ヘタフ子　字未詳。取合船なり、中船以上を用ふ。

ヘツナ　舳綱。船のおもてに納むるところの綱。

ベツブツクリ　別府作り。播州別府より作り出せしとも、別府某といふ大工の作り出せしともいふ船の制。薬研形にて垢間を張らず、水をきり込む故、帆走には損なれども櫓走には益あり。

ヘナミ　舳波。舳を打つ波。

ヘバリゴチ　字未詳。三月頃吹く風の名。

ヘンダ　偏舵。船の兩側に用ふ、唐船にあり和船に無し。

ホ

ホ　帆。風を受けて船を進むる具、多くは木綿布を用ゐ、風に逢つて破れざるため糸にて厚く刺す、帆木綿といふ布は、帆を作る料とす。小名縫下、貫通、（明津考に帆筋）耳索、大廻索、（一名大渡し）、はい廻し（開きに乘る時桅にやる）等あり、帆は何端、幾幅と數ふ、大船に及びては、三十端餘に至る、船法の卷に、十端より二十端までを安宅といふなり、又くわいてうせんと名づけていふこと口傳多し、知らざるものは、太きも細きも皆々船といふことひがことなり、九端帆より五端――までは船といふこと尤もなり、其餘は何船か彼船と異名あるべしと。帆柱の條を見よ。帆一端は定法莚一枚の幅三尺なり、帆の長さは荷船の敢の惣長と、帆柱の長と同寸なり、――一端は木綿を二枚合せて刺しつけ、之を三幅剡ぎたるをいふ、之を十六端合せ、總幅四丈八尺なり、――の定めは船制により異れども、鈴錄に山鹿流は千石の船、帆二十六反、莚數三百十二枚とあり。

ホアシ　帆足。（一）檣の上より舳艫へ引はりたる綱。（二）帆の小名。

ボウチヤウ　字未詳、遠州濱松にて網を引時に用ふる船、四百間より外は沖に出さず、船の作り方、杉の大木を二つ割にしたるを二つ合せ、高三尺計り、長五間半ばかり、船底のつもり、大抵中底二尺五六寸、外まわり六尺餘、船の高さ計り幅七尺、船ばり四本ろ、まくら二本、是は船ばり、繩にて結ひつけて、櫓をしかく、此船決して沖に出る事ならず、大船の側によれば其下へすゐこまるゝと云へり。

ホガカリ　帆掛。船の大小に應じて、帆にも大小ある定法、帆何反といふを標準にして、船体の寸尺を定むるを云ふ、尋掛り、櫓がかりの如し。

ホカタヒキマタ　帆肩引俣。兩方の脇取繩の帆につく所を二筋にするの名。帆引の叉なり、叉かへり叉ともいふを、誤つてかへるまたと云ふ、かへりかへるは船の忌み言葉なれば、蛙の股の如きを墓のまたといふ歟。

ホクシン　北辰、一年の季節一夜の淺深に拘はらず、常に一定所にある北方の一星、船夫見て方向を知る。

ホゲタ　帆桁。帆竿。帆をかくる檣上の横なる圓柱、用材は檜槙を上とし、布をきせ、多くは杉を用ふ。軍用のものは檜を上品とし、布をきせ、漆をぬり、折れざる樣にす、長は帆幅より兩方に一尺つゝあます、大きさは帆一反につき、四分半掛り、中部の五尺は同じ大さにて、それより左右五尺につき、三分半づゝ落す。

ホズレ　帆摺。蛇袋の條を見よ。

ホゾ　臍。櫓の條を見よ。

ホシフチ　星船。助船、使小早等の船に、火技に巧なる者をのせ、大筒石火矢を仕掛け、口々に打たする船。

ホシノイリゴチ　星の入り東風。十月頃吹く風の名、昴星の入る頃吹く故名づく。

ホシノデイリ　星の出入り。星の入り東風同じ。

ホシノテンキウラ　星の天氣占。北斗を見るに星の光さえず落窪みたる樣見ゆれば遠からず雨か風あり。其光冴え渡り浮上りたるやう見ゆれば天氣つゞく。星の目引とは星の光芒の閃爍動搖することにて、風の兆なり。

ホスリクダ　帆摺管。小枕同じ。桐にて作り、筈緒にて通す管にて、珠數の如くして筈緒と帆との磨擦損傷を防ぐもの。荷船用。

ホリマイクモ　細雞雲。布を引たる樣にも、刷毛にて引たる樣にも、見ゆる雲にて、日和の雲なり。

ホダナ　帆棚。檣を立て、帆を卷きおろしする所、艙舳屋形なり、又表――もあり、小名、縱横の框、中挾、立、耳板、高欄、中敷居。

ホヅツ　帆筒。筒の條を見よ。

ホツコクフチ　北國船。加、越、能、津輕、南部等の船の總稱にて、北前船ともいひ。又其形の似たれば、どんぐり船ともいふ。凡千石以上の大舶なり。

ホヅナ　帆綱。船。桅檣。机の綱、種々あり。

ホテ　字未詳。一名荷敷、竹簀の下にしく物、木にて作り、川船に用うるを荷尻といひ、竹を把て海船廻船の左右の船側にしくを――と云。

ホテアミタレ　字未詳。常のあみたれより細きあみたれ。

ボドボド　字未詳、晴れしの日の冴えたるに反せる水陸の鳥の羽音、重くして雨の兆となす。

ホナハ　帆繩。帆につける繩。ひくてまて――つくらん風はやみ三保の浦回にすくる船人。

ホバシラ　帆柱。檣。桅。槍、草槇、杉を用ゐて作り、帆を持たする柱なり、大船と雖も二桅に過ぎず、唯攝州尼が崎の獵船に三桅を用ゐる物あるのみなり、故に桅の數をよびがたく、帆の布數を以て船の大小の名とす、唐船は多くの帆をかくる故、本邦の物ほど大木を用ゐず、又本邦の――は角にて朝鮮制は圓し、其積りは、十端帆の物は八寸角にて、それより帆一反に付、八分掛り、長さは船の總長に同じ、本より一尋置て、それより三分半落し、荷船のは手掛より落す。長さは蹈立より蟬の穴の下反までなり、艙の方より立るを法とす、小名、剡形、（筒のゑりかたに合ふ處）雨掛、（ゑりかたの上雨からみする處）拜坐（子持這坐に合ふ處）折込鎹。

ホホ　頰。骸。俗に――ぺら、荷船によぶ所にて、一本水押の小名。

ボンゴチ　盂蘭盆東風。盂蘭盆の頃吹く東風。

ホンセキ　本關。中關より大なる船。

ホンフチ　本船。御座船、將几船ともいふ。

ホンボ　本帆。彌帆に對して云ふ。

ホラツケ　字未詳。ほらしん板の付合ひ。

ホリモノ　彫物。船に――して飾るは、關板等の表の龍頭鷁首の數、艙の袖垣、四間板の孔雀、鳳凰の類なり。

マ

マ　間。室。舟の中の區畫せられたる一處。あか――。胴の――。

マアユ　字未詳。丑の方より吹く風、北國の方言。

マイハダ　槇肌。衣笠。まきはだ、舟ののみ、のみ同じ。槇皮の繩にて船の淦入り又は舟板の玉きずをふさぐ物、琉球人は古綱を用う。

マオヒカゼ　眞追風。舟の眞の後面より吹く風。――は少しく舟を傾けて乘るを常とす、まともにて強く走る時は舳にて潮をすくひ馳せ沈むことあり、故に順風なりとも帆を十分に揚げず、少しく扣ゆるを常とす。

マキ　槇。河舟の用材第一の木。

マキコミツナ　卷込綱。くり込綱同じ、絞車座に用ゐる綱。

マキコミロクロ　卷込轆轤。ろくろを云ふ、各方の綱を絞車座へとるに之を各所におき、これより綱を卷込むなり、折込同じ。

マキタ　眞北。子の方より吹く風の名、日和の兆。

マキテ　卷手。柱引の條を見よ。

マキドウ　卷胴。胴の條を見よ。

マキハタ　節。まいはだの條を見よ。

マギリノリ。　間切乘。逆風の時、風を斜に受け、千鳥掛に進むこと、小舟なれば蹈張弱く、風に吹き戾さるゝ故に、――は大船に利あり。逆風に開き

て進み行くこと。

マギレフ子　紛船。方位を失ひたる漂船。

マク　幕。常の幕に同じ、河海樓船御坐船に用う。關船小早には垣立にうつ、屋形矢倉には幔――を用う。

マク　卷。戰語、敵の帆を去ること。

マクタテ　幕栢。幕の栢。常の幕を幾重にも折返して張る。

マクチロ　眞口櫓。竿櫓の事。

マクラバコ　枕箱。あだて舟の俗稱。

マゴチ　眞東風。卯の方より吹く風、雨風の兆。――吹く花のあたりの風下は時ぞともなき雪ぞつみける。

マゴヒサシ　孫庇。やぐらの條を見よ。

マサカイ　正かい。正目の木にて作りたる遣越櫓床、遣越舟梁の轄。

マサキナハ　正木繩。藤葛の繩にて薩摩物なり。

マジ　風。時の風。まぜ同じき歟。

マジカゼ　まじ風。風の名、裏白のこと。まぜ同一語歟。

マスガタ　升形。俗言之をもりと云ふ。筒の四方に木を打て、櫓を立堅むるもの。

マゼ　（一）風の一種、午の方より吹く風。（二）酉亥の方より吹く風。（三）加越但丹地方にて用ゐる舟の一種、腰より艫に臺垣立あり、帆柱を表の方より立つ。

マチゴザフ子　町御座舟。本名町屋形。賃を取て貸す故貸し御座舟ともいふ、總矢倉にて日覆屋根あり、風ある時は用ゐがたし、酒を携へ妓女をのせ遊山船とす、席の大小にて言はず、水主の多少にて一人乘二人乘といふ。海舟作りにて大なるもあり。因州にて中障子半障子といひて、大小を分つの類、所々にて名目同じからず。

マチヤカタ　町屋形。町御座船の本名。

マツハダ　松皮。河舟の材木中下品の者。

マトモバシリ　眞艫走。帆を揚げ追風にて走る。

マナシカタマ　無目堅間。――の小舟の略。神代に鹽土老翁の作りて火々出見尊をのせ海中に放流したる小舟の名、今の竹かごに似たるものといふ。まなしかご同じ。

マノカシラ　間の頭。うまのかしらの條を見よ。

マハシゴメ　廻米。廻米すること。――の借舟をするに船道具つきといふもの有り、何千何百俵積、何國の誰船、居船頭誰、沖船頭誰、水主何十人乘、柁、檣、桁、碇幾頭、綱幾條、橋船一艘、用具の品何々と大船小船によりて異る定めなり。

マハス　廻す。舟戰語、味方が船をのり戻すこと。

マヒヨリ　眞日和。四月は南風吹て日和よし、朝はあらしにて、晝より南風になる、之を――といふ。

マヘカケツナ　前掛綱。舵首綱。柁の前に打廻して車立へ留る綱、別名柁打廻し、大廻し。

マフカゼ　舞ふ風。前後左右より吹く風。

マフ子　間船。部切舟に同じ。

マヘクチ　前口。一本水押の小名。

マホ　眞帆。主となる帆。

マムキ　眞向。眞艫の總稱なり。床の上を――廻りといふ、笠木の上、小名、――立、雨覆、筋貫、指板。

マンリキ　萬力。かぎの緒同じ、一端に鐵鈎ある綱にて、荷物上げ下しに用う。

マユ　眉。日の出の時、日の上にぼう〳〵として見ゆる雲。

マル　丸。船名に用うる語にて、漢土の號の義なり。もと屋號より出でしもの、昔は今の問屋を問丸と云ひし如く、船をも何丸といひしならんと云。又、船を何丸といふことは豐公の日本丸安宅丸より前には聞かざるやうなり。

マルキゴギ　丸木漕。丸木船の條を見よ。

マルキフ子　丸木船。丸太船。獨木船。（一）一つの木を刳り造れる船。（二）琵琶湖の上を往來する旅客と荷物を運ぶ船。其形北國のはかせ作りに類し、丸木を刻りたる如く、形体細長く、深く、底より兩側板丸くはぎあげにて、枇なし、上のはぎをおもきと云、水押も立板に丸くはぎ、艫は横艫にて大立横上あり、右柁の方にそへ立あり、ろぐひ高く、鐵にて作り、棹櫓を用ゐ、帆櫓双用す、大なるは五百石に至る、九州にもあり、肥前のは長三間半餘にて、底平たく、兩側丸木の如く、ろぐひ高くして片手に早緒を握り、片手漕にす、之を丸木こぎといふ。薩州にもあり。古き書に「赤間の――」と見えたるは長州赤間關の――にて丸木をえり船としたるもの歟。

マルクチ　丸口。床の小名、柁の耳木を入るゝところ。或はわんとう。俗にはんとうといふ、又鷲口

といふは仕様の異る同用の處なり。

ミ

ミアメ　巳時雨。巳の時に降り出す雨は頓て晴る。

ミオクリ　見送り。やかたの條。――立は矢切立の條を見よ。

ミオシ　水押。古名によし。子丑。女首の字を用う。俗みよし。一名龍頭、へさきに同じ。一本箱作りの制あり、一本には、小名前口、繼手、附出、付留、もき先かき入れ、潮切、又浪切、頰骸、俗にほゝべらあり、これ荷舟の制なり。吾妻表と稱する箱造りには、置板、即ちへさきの置板、戸立、即ち箱先立戸とも、扇板即ち、左右にありて形扇の如きもの、夾蓋即ち戸立の上に打つ板、箱縁即ち箱の如く左右にある板等の小名あり。

ミキ　身木。一名耳木。柁の小名。

ミキリトコロ　見切處。敵船を見付くれば證據旗をふりて、通知する物見の所。

ミクサビ　にくさびの條を見よ。

ミカクシ　身隱し。胴壁の條を見よ。

ミカゲフ子　御影舟。攝州御影の石を運ぶ船、其制傳道に似たり。

ミガハリ　身代り。（一）人に代りて難船の時自ら死すること。日本武尊難船の時弟橘姫自ら海に投じて難を救へる類。（二）難船にあひたる船夫、護身刀小刀の類を海に投ずるをもいふ、亦身代りの意なり。

ミサヲ　水棹。篷竿。水馴竿。海船の湊を出入する時は、棹に用ゐ、常は篷をかくるに用う。小――、長――あり。船の大小によりて長短一ならず。善き杉か、性よき竹を用う。

ミチツメ　滿詰。滿潮の極。

ミチナタフ子　道灘舟。海舟のなだ船に同じ、淀川筋、神崎川筋の所々の問屋ある所に用うる舟にて、多く間三を用う。海にして云へば灘目なり。

ミヅ　水。飲水。桶底に赤土を敷きて、天水を貯ふれば何時迄も水の損することなし。四斗樽に至極の熱湯を八分目入れ、其上二分目に冷水を湛へつめ蓋を堅くして持ち、下よりだぼそろにて取る時は、此湯三四日を經るもさめず、これ阿州椿泊にて鯨をとる舟の用意なり。

ミヅイリ　水入。吃水。（一）船足の條（二）舟端を鐵砲にて打たれたる時。――を防ぐには、鉛をのべて薄板となし、釘付にし、松脂を流す。又皮を小さく切り、くすねを付おきて防ぐ。

ミヅヲケ　水桶。水の條を見よ。

ミヅオシ　水押。みおしの條を見よ。

ミヅカキノミフ子　瑞籬御船。ふなしろの條を見よ。

ミヅコシツナ　水越綱。一名ゆりこしつな。柁の水越孔に通し、柁を自由にする綱。別に小――あり。

ミヅコシノアナ　水越孔。一名ゆりこし。柁の身木にあり。

ミヅサキ　水先。船の進むべき海路、――案内。

ミヅスカシ　水透し。水中を透し見る法。鮑のわた、鰯又は海かの油を水面に散らせば、水底までよく見ゆ。

ミヅダウグ　三道具。檣、桁、舵の三を渡海船の――と稱す。

ミヅタテ　水楯。安宅、關船等に、垣臺の木に鐵を打ち、之に――を垂れ、船の胴、矢倉、艦をも圍ひ、矢玉を防ぎ、櫓數を隱す。

ミヅテンマ　水傳馬。はしふねの條を見よ。端傳馬を用うるが常なり。

ミヅヒナハ　水火繩。荒苧を火繩に絢ひて、婦人用の鐵漿にて煮て用う、火のたちも遲し、一說に、下地に灰を煮付け鐵漿をかけ、乾して用う。

ミヅフトン　水蒲團。丈夫の切れにて、中には切くず、ふる繩、乾草等を入れて蒲團を作り、千鳥に孔を穿ち、細引を通し、水に浸して船の矢玉を防ぐ具。

ミヅフ子　水船。水取船。水傳馬同じ。海水は飲むこと能はず、故に此船の中に水櫃をすゑおき、水を貯へ積む、所々にて水を汲みに行くもの、表を箱作りにして異形に作れるもあり。（二）水槽。水桶の別名。水槽は船の艙の間に置く。

ミヅム子ヅクリ　三棟作り。やかたの條を見よ。

ミヅマク　水幕。木綿の袷、或は綿入を十文字にさし、用う、其袷は潮に浸るほどにす、又水押は武者の母衣掛けたる如く艦より引き廻して圍ふ。軍船にて矢玉を防ぐ具、水楯より内に引く。

ミヅマサグモ　字未詳。水增雲歟。雨雲の一種、はなれ〳〵に魚鱗のならぶに似たる雲。古くいふ――も今のに同じ。なだはれぬ――にもる月をむ

なしく雨の夜半やおもはん。

ミナオリ　水繩下。水繩の下る處。

ミナトヲトリシケ　湊を取敷く。ある湊内を殘る隈なく視察探偵し、全く味方の湊となすこと。

ミナハ　水繩。綵繩。綵索。帆桁の中央につけて船尾へ引き、帆を揚ぐる繩、船の大小によりて一つ——、二つ——、三つ——、四つ——の定めあり。古歌にほつゝしめなはとあるはこれなるべし、——留は——の端をつぼにして留める栓。

ミヌメノジンシヤ　敏馬神社。　猿田彦大神の條を見よ。

ミヒラキ　見開き。船の形を舳より艫へ見透しふくらみありて内有るを云ふ、さる船は荷を多く積み得べし。

ミフ子　御船。皇船。天子の召船みは尊稱、みつかきの——、大——。

ミフ子ノカミ　美船の神。纒向珠城宮の御宇廿六年、倭姫命の五十鈴河天照太神を鎮坐し奉る時、朝熊水神等と皇太神をみふねにのせ奉り五十鈴河上に遷幸し奉りし神。

ミミキ　耳木。柁の小名。

ミミナハ　耳繩。帆の條を見よ。

ミユキノフナカザリ　御幸の船飾り。景行天皇の筑紫に御幸遊ばされし時、五百枚の賢木を舳艫に立て三種の神寶をかけ、素幡を立つ。

ミヨシ　水押。みおしの條を見よ。

ミラザサ　水尾笹。水路案内のために立て置く小笹。たゞ水尾印といへば何に限らず水路標に立てたるもの、水尾木同じ。

ミラツクシ　澪標。みをしるし同じ。

ム

ムカヒタテオモテシトミ　向楯面蔀。からかいの處を蔀むこと。

ムカヒシホ　向汐。逆潮。汐に逆ふて進むこと。

ムシリウジ　蟲掃除。垢水に虫生じ遂に孔を穿つ恐れある故船虫を除く掃除を爲すこと。

ムシヤバシリ　武者走り。胴壁の縁より少し下りて船張の横木より其木にねだを渡し、廣三尺程に板縁を張る。大船には、——の内にも胴壁をつけ、矢間をとり〳〵に切る。總矢倉の大船には別に之を作らず、艦より艫まで墻立の中へ往來自由なる様に道をあけおくこと、城の屏裏に同じ、矢倉無き小船の歩板の上に作るを走りの間ともいふ、歩みより弓射る時つかへざるため取り外しなるやうにす。寸法は巾三尺乃至四尺許にし、前には高一尺程に足留めの欄干を作り、力戰の時蹈折ること無きため手澁く作る。其柱の建様根太の渡し様等さま〳〵習あり。

ムシロホ　莚帆。わら莚を用ふ。

ムツラボシ　六連星。昴宿、すまる同じ。

ムヤフ　纜ふ。船をつなぐこと二艘三艘結合すること。

メ

メウチ　目打。船釘を尾の方より拔く具。鐵にて長五六寸厚三四分に作る、鐵板の中に孔あり、釘の根を此孔に入れ此鐵板を打つて鐵釘をぬく、これ釘を損せざるためなり。明和近くより行はる

メヲトクギ　女夫釘。舳をかたむる釘、大船小船によらず、水押繼手に打つこと、陰陽二本に限る。

メガミ　女神。俗傳船神を——とするは、船は巽木坎水に成る故なり、說卦傳に巽を木とし風とし長女となすといへるによるといふ。疑ふべし。

メクラスヘ　盲居。梳猪。めくらつえ同じ。子持のせり木にて、強きを以て名とす、川船には引柱を立つる切張にあり、又筒によせて打つ木を柱せかいと云、せりかけ木なり。

メクラバリ　盲張り。船を釘の頭の見えざるやう張り造ること。

メクラブ子　盲船。(一)總矢倉の如く船上を全く板張にし、しのぎを立て龜の甲の如く作りたる船、所々掛金にてしめおき、内よりつき明けて外を覗ひ發砲し、又矢玉を恐れず無二無三に敵陣に乘り入りて亂す。櫓を用ゐず車仕掛にて水を搔くもあり、當の船を俄に——とするには小船の上に檣を渡し、左右より櫓を立て掛け圍ふ。(二)矢玉劍戟を恐るゝ故、舳より艫まで水蒲團船楯にて一面に圍みたる船。(三)竹圍ひせる船、仕寄船、見參船等に用ふ。

メツケフ子　目付船。邏船。

メナミ　女浪。浪の一種。雄波より柔わかなる浪にて、——二つ打つて浪雄ぞつと一つ打つこと常なり。

モ

モアヒカカリ　纜ひ繋り。船一艘に碇を入れ。他をば右の碇を入れたる船にもあひ、互にもあひ合せ、幾艘も此の如くして碇泊すること。

モアヒヅナ　摸合綱。纜。船を繋ぐ綱。

モウケ　藻受。もかき兩用一ッなり。

モウドウ　艨艟。艨は楯にて掩ひ蔽める舟の義。艟は女首先を尖らせ鐵にて包み敵船を撞くやうにせる舟の義。二字熟語とありては戰艦の義。

モカキ　藻迦。船戰の具、熊手の爪の二ッある如くにして窓口の先へ出たる金の鐵火箸の如くに三寸斗出て、柄は八九尺ばかりのものなり。

モギ　剗。一名――サキ。一本水押の小名。――あをりは外どものあをり。

モキリ　藻切。長柄の鎌、掛り舟の時塵芥などの綱にかゝる物を拂ふ具。もはづし同じ。――鎌は船戰の時敵より我が船を懸け取らんと水に張る繩綱を截る鎌。

モチ　鋲。（一）横柄ありて丁字の如く柄にてもぢこむべき具。船匠大釘の孔を穿つに、先づ鋲鑿を用ゐ後に――を用ふ。（二）飛蟬の車。

モチアミフ子　持網船。坐嚬船。江湖川河の中、横さまに舟をつなぎ、漁人箕居して持網を引上ぐる舟。

モチオクリ　持送。出し屋根にあり、小なるを小猿といふ、猫などゝいふは木に取りつくの意。

モトフ子　本船。舟戰語にて大將の乘る船。又枝船に對していふ。

モノミ　物見。挾歩の間なり、こゝに取置きにふさぐ板あり、がう板といふ。――船は小早を最も足早に作り、艦を盲船にし、其張板の窓より敵を窺ふ。戰に臨みて物見する船なり。或は表は龜甲の如く日覆板圍ひして、水主の敵に驚かざるやうにし、杉作りにして往來の迅速を期し、水付以上を黑漆塗にし水以下を墨塗りする上、チャンを引き朽ぬためにす、漆はすべて焦げる故に朽つ、能島流にてはたゞ六八挺立の小早に楯を用ゐるなり。

モハツシ　藻外し。鐵又は木の枝にて雁股を作り、長き柄つけ、我船の櫓梶に敵の引綱等の掛りたるを外す。もぎりに同じ。

モモサカフ子　百積船。百石つみの船、百尺の船といふ説もあり。

モメンタテ　木綿楯。木綿を垂れて楯とす。

モメンホ　木綿帆。布三幅を一幅として仕立て、三尺六寸幅なり、二重合せに刺す、――五反の幅と筵帆六反の幅と相對して、各一丈八尺なり、――は格別風受よろし。

モヤ　靄。水氣の朝夕などに立つもの。

モヤ　字未詳。播州明石の海にある潮の瀨。

モヤヒクヒ　牂牁。木の長きを川中にゆりこみ、船を繋ぐをいふ。かせ、同し、又短き木にて岸に椓するを地かせといふ。

モヤヒツメ　纜ひ塡め。多くの船のひしと一体團になり居ること。

モヤヒフ子　模相船。（一）多くの小船を鎖綱等にてつなぎ合せ一大船となすこと。（二）合戰にさしかゝり敵味方とももやふこと。（三）碇泊せる船。

モヤヒツナ　模相綱。繋綱。纜。船つなぐ綱、舟と舟とを組み合する時に限らず、たゞ一艘を岸につなぐ綱をもいふ。

モリ　鏢。もと鯨をつく具あれども、荷舟にも一本を備へ置くを常とす、これ――をもてば惡龍毒魚怖れて害を與へずと船夫の信ずるによる、ほこ同じ。（二）ますがたのこと。

モリハイノザ　守拜之坐。柱筒の升形のこと、舟玉の舟の板より上に勸請す、因て其下の板を――といふ由、一説に、もりは、めくらつゑを仕合はすところなり、はいのざは、もりの小名なりと。

モロタフ子　双手船。諸手船。數多の水主左右に立並び、兩手に櫓を押す船。熊野の――、

モロシホオシ　諸潮押し。引くにも突くにも、潮のかゝり樣同樣に押すことなり、潮につれて押す、引くにも突くにも自由に櫓さき、押手は上手を要す。

ヤ

ヤイレ　矢入。軍の出船前に大將たるもの鏑を射て海に落す古儀、後世は大筒を放つて之に代ふ。

ヤウセン　陽船。戰語、輕快なる小舸、陰船と乘合す時は――は下になり、陰船の舟端を上にす。

ヤウジ　字未詳。やうず同じ、春吹く南風、雨を催すもの。

ヤカタ　屋形。廬。艙。舟上の屋、三重のものは下屋形、（廬）上屋形。（飛廬）日覆――、（雀室）といふ。

古き物語に三ッ棟作りの舟とあるは、川舟の將几、上段、次の間の三棟なるべし。

小名、土臺、柱臺、輪桁、梁、矢倉根太、同板、耳板、高欄、敷居、鴨居、中敷居、寄敷居、方立、長押、組天井、床、違棚、刀箱、蹴込、襖、障子、數子戸、遣戸等。

ヤカタブ子　屋形舟。町御座舟に同じ。

ヤカチ　八梶。八挺立の條を見よ

ヤキリタツ　矢切立。一名見送り立、艫の端出しやね立。

ヤクリクノナハ　約束の繩。大將と梶取とは、とも、へさきにあり、其間隔たる故に梶取の左右の腰に繩をつけ、大將の前なる船頭其端を扣へ、左繩を引けば表梶、右繩を引けば裏梶といふ如く、約束を定め置く繩なり。

ヤグラノモノ　矢倉の者。舟の矢倉に居る者は、帆手を執り、帆の上下幕楯の掛外し等を達者に働く。

ヤグラ　矢倉。船樓。尾樓。(ともやぐら)拜棚。(同)梍樓。同大船は總――なり。表――、べ――わり。荷舟大船には孫庇あり、小船はへ――のみなり。武者走、走――といふは、――船にあり。小名――根太――板。

ヤグラノヒカヘ　矢倉扣。扣木の條を見よ。

ヤグラフ子　矢倉船。樓船。矢倉船の付ける船。

ヤグラクギ　矢倉釘。包釘と同じけれども、矢倉を打つ釘にて、皆寸を以て呼ぶ、家屋に用うる釘を上廻りに用う、次一連、大一連、二連、三連、五連、六連と呼ぶは、皆家釘にて寸を以ていふ。凡そ連とは大一連一把の釘數十五本にて、其餘は釘の名に二をかけ、一把の釘數を得。

ヤグラタツ　矢倉立。扣に立つ柱なれども垣立の間にあるを云ふ、皆間の名をつけてよぶ。

ヤリカヂ　八十梶。多くの梶櫓といふこと。

ヤチウノハレ　夜中の晴。久しからずして雨ふるの兆。

ヤツコミオシ　奴水押。かもじの條を見よ。

ヤドコ　字未詳。舟の漏水をふさぐ具、鐵製雨及にして鋼を用ゐず、切及なし、筋を打つに先つ板の合めを打つなり、のみ打の條を見よ。

ヤフ子　屋船。みづのみあらかをいふ。船代の條を見よ。

ヤホ　彌帆。彌は重ねなり、本帆に重ねてかくる帆。

ヤホバシラ　彌帆柱。頭棹。表小間に立つる第二の檣、小名、檣に同じ。

ヤマゴシヤク　山五尺。ねこふきの條を見よ。

ヤマジ　南風。又やまぜ。午未の方より吹く風。

ヤマオロシカゼ　山下風。高山より吹き下す風。

ヤマタチ　山立。舟戰の際の役の名の一、艪に居て、海の深き淺き、漁旅船の出入、嶋山、沖合、潮筋を見、深路方角を梶取に告ぐる職。小舟にては日和見と――を一人にて兼ぬ。

ヤマタロウ　山太郎。薩州の方言、石をくゝりつけたる木碇。

ヤマドリノヲ　山鳥の尾。俗傳――を持てば難船に逢はずと云傳ふ。

ヤリクルマ　遣車。飛車の條を見よ。

ヤリコシ　遣越。――櫓床。――舟梁。

ヤリダシ　遣出。へより斜に前方に短く出る檣。外國船に多し、今のジブ歟。

ヤリテ　遣手。手安同じ。舟と舟のもあひ綱、此船より彼船になげやる故の名。苧綱の細きを用う。

ヤヱ　滿潮。　潮の滿ち詰めたるを云ふ。

ユ

ユ　塗。淦。あかの事なり。

ユイリ　淦入り。あか入りの義。

ユウジヅクリ　字不詳。播州高砂の船匠河上和泉逸克が隱居名を以て呼ぶ舟、かゑさと二階目上棚と三階となれど、此作りは二階目を二枚にして都合四枚なる故、四階作りともいふ、によしの先を垂れ下らせ、中棚をも別府制よりは平らませ、海しきを立てたる故、荷受もよく足もつよし、平在よりはあかま張らざる故、水上より見れば別府の如し、帆立、櫓走、得失相半の制なり。

ユサンブ子　遊山船。町御座船に同じ。

ユタイタ　滿潮。潮の滿ち詰めたること、古き語のゆたのたゆたといくるに關係ある歟の疑ひあり。

ユトリ　淦取り。すつぽんに同じ。

ユヌキ　淦拔き。(一)滲水を除くこと。(二)舟梁の條りうこふなばりの條を見よ。

ユフ子　湯船。江戸にて舟中に浴室を居へ、湯錢を取りて入浴せしめし風呂船。

ユフダチ　白雨。夏夕の驟雨。――は南に來らず。

ユフツツ　夕星。宵の明星。金星の夕に見ゆるをいふ。長庚と支那にていふもの、――のかゆきかくゆき云々。

ユフヤケ　夕燒。夕霞。日沒時に天の紅なること、晴の兆、但し五月の――は雨と知れ、秋の――は鏃をとげ。

ユミタテ　弓楯。厚六七分位にて、其他一切は鐵炮楯に同じ。

ユミノカマヘ　弓の搆へ。船中の――は割膝を利とす。

ユリコシ　搖越し。水越繩の條を見よ。

ユリタツ　搖立。別名、小立。短木小立。

ユリロ　搖櫓。ろのおしかたの一種

ヨ

ヨウセン　用船。（一）御座船につく厠船。

ヨウズ　字未詳。風の一種。未申の方の風、中國方言、一說巳午の風。

ヨウズマゼ　字未詳。午の方より吹く風、風雨の兆。

ヨウボク　用木。造船の材はすべて東國北國によきが多し、海船には杉、楠、槻、栂、樅、河舟には檜、槙、栢、草槙、五葉松、松皮等を用うるを常とす。

ヨケ　除。別名かき入れ、一本水押の小名。

ヨコアメ　横雨。横に降る雨、夕たちの軒端過ぎ行く――にこすの間見れば露ぞかゝれる。

ヨコカミ　横上。笠木の別名。艫に大立を立て、――をする。

ヨコギ　横木。浮舟を組み合せる時、上下二本づゝ四本を用ふ。

ヨコグモ　横雲。未明に地平線に傍ひて棚びく雲。山のはの――はしりわたりつゝみぎりに見ゆる明ぼのゝ空

ヨコトモ　横艫。劍さき舟、大和田作りの制これなり。

ヨコヒトヘ　横一重。横一重カラワの備。

ヨコロ　横櫓。義未詳。

ヨタレカケ　涎掛。蛇袋の條を見よ

ヨツアシブネ　四足舟。小なる通船、四本柱あり、日覆屋形を設く。

ヨツクギ　四釘。（一）艫を堅むる釘。（二）船の大小によらず戸立に打つ釘、四本に限ればかくいふ。

ヨツノブネ　四船。遣唐使の舟。遣唐使は大使副使判官主典の四使あり、四艘の舟にて遣はせし故の名。

ヨツノリ　四ッ乘。勢州桑名の小船、三四人乘り得べし、攝州の通舟平田に似て少し異る。

ヨドウハニ　淀上荷。攝津淀の上荷舟、其制柏原舟に類し、二十石積なり、二十石舟といふが本名なり。

ヨドケイ　夜時計。時を知る條を見よ。

ヨバヒボシ　流星。空飛ぶ星、うらやましたれをみそらの――くるれば出てひかり知るらん。夏の末より冬かけて多く見ゆ。

ヨリカカリ　倚掛り。古名ゑりかゝり。上枻の艫の方高く上り倚子の如き部分。

ヨリケ　字未詳。西北の風。

ラ

ライデンノテンキ　雷電の天氣。夜雷は長雨、雨無くて鳴るは大風、沖の方へ鳴り入れば雨、その餘の雷は晴を司る、東に電すれば大風、西は晴、南は大雨、北は南風、西北も雨、又亂れ閃くは風なり。

ラマセン　羅摩船。大貴已命出雲國みおのやの崎に在す時浪穗（ナフ）より天の――（カミ）に乘つて一人の小男あり白歛の皮を以て船とし、鷦鷯の羽を以て衣とす云々。

ランカン　闌干。小名、地覆、立、平、梓、貫。

ランカンツクリ　欄干作り。垣立を欄干に造る船の制。

リ

リウキウボ　琉球産の帆。戰に走舟を敵へ進る時特に之を用うることあり、火矢に燃え難ければなり。

リウゴフナバリ　輪跋舟梁。輪子。けあげ舟梁の下にある中貫、荷舟には居斗あり、この内に樋を仕掛け、又は樋を上に置き斗扉をかけ、垢を船側の外にぬく。

リンセイ　輪精。一名汐ふき。柁の小名にて羽板にある穴。

リヨウトウ　龍頭。皇舟、鈴舟、御召舟、御坐舟は海舟河舟共に樓船にして、船の首を――に作り、飾りとす、之を――作りといふ。鷁首の條を見よ

リヤウノタカハサミ　雨の高はさみ。義未詳。

リヤウハウツナ　兩方綱。（一）帆の兩方の手繩の下部につく帆綱、帆を自由にする具。船夫之を兩方といふ（二）はあをしのこと。

レ

レン　連。釘を數ふる語、何――、矢倉釘の條を見よ。

ロ

ロ　櫓。艣。艪。通例舟のともにありて船を進むる具なり、小名、――あし、（櫓脚、ろの葉ともいふ）入子、（――杭に合ふ部、――跳）腕、柄（ツカ）、たがひ繩。（上下ありて先たがひしりたがひといふ）わさろ、わいかちをも――といふ。――床ありて縦に推すもの。千石積に表のふり――共十六乃至十八挺。――何挺といふを標準にして船の定寸を定むるを――がゝりといふ。帆がゝり尋がゝりの如し、關舟にていふ。縦に用うるを櫓といひ横に用うるを楽といふといへるは古き説なれど、今行はれず。

ロヲオス　櫓を推す。人の呼吸と波の調子に合せて、――時は、拍子揃ひ舟行早し、之を波に順ふといふ。又強く推せば輕く引き、輕く推せば強く引く、之を――陰陽といふ。河舟の櫓は強く推し輕く引き、海舟は之に反するを常とす。

ロウセン　樓船。やぐら船に同じ。

ロアシ　艪脚。櫓の小名。

ロカイ　櫓櫂。船の兩脇の櫓櫂を扱ふところの總稱、北國西國にのみ古名殘りてせがいと呼ぶところあり。

ロカイバリ　櫓櫂張。船の左右の臺間の櫓の立たざる處の板張なり、又大船にては櫓を推す程の孔をあけて板を張れり、荷舟にて膳棚と呼ぶもの。

ロクロ　轆轤。（一）どうに同じ、くるまき。（二）攝津にては――屋仲間ありて他の者勝手に之を用うるを禁せり、船のともの間の左右、即ち――坐にあり、縦に胴あり、棒三本を通し、横に推す時は綱は其胴に卷かる、中船以上に用ゐ、檣を立て、帆を卷き、碇を上下する、游艇及び荷物の上下、皆これにより大に人の力を省くの効をなす。薩摩方言、神樂山、船夫言葉からくり廻り。

ロクロザ　絞車坐。船の舳艫の絞車のあるところ、中船以下は艫の方のみ絞車を用ゐ、表は車知を用ゐ、小船は飛蟬計りなれば相違あり。

ロクロブチ　絞車船。船を上げ下しする絞車、及び筋綱等を積み行く船。ろくろの條を見よ。

ロクロカヂ　鹿慮柁。柁の一種にて北國船はかせ、又は唐船に在り。

ログヒ　櫓杭。樫の木にて作り、櫓床にさし立て、櫓の入子に合せて櫓を受くるもの。船の桁に一二尺計りの横木を出し、之に――を打ちて櫓を立つ。貢船荷船の類は唯へさきにのみ設け、胴の間は除けども軍船には舳より艫まで一面に設く。

ロクテウダテ　六挺立。小舟の名。

ロクブフナアシ　六分船足。吃水を六分にすること、小舟に用ふ。

ロクワン　櫓環。早緒鐶の別名。

ロツボンタツ　六本立。袖垣の條を見よ。

ロトコ　櫓床。楽床。五十挺の舟には二十五――あり。楽床舟梁中最上部にあるものにて、櫓を架する故の名、皆間の名をつけて呼ぶ、――の間は胴の條を見よ。――舟梁の太さは舟板の厚の一倍。

ロノハ　櫓葉。ろの小名。

ロビヤウシ　櫓拍子。――の長さは櫓の推し方にゆとり有つて、舟遲き故好まず、然れども二人掛りの舟なれば、短くしてつゞき押すことならざる故、二人掛りは格別其外は短くす。

ロベリ　櫓膾。櫓の小名。

ロマクラ　櫓枕。ろぐひ――とあり、急に――を制せんには草履を二つに折り孔をあけて結びつくべし。

ロミサラ　櫓篙。櫓を水竿に代用する時の名。淺瀬湊の出入の時など用ふ。

ロンギ　論義。風の定まらぬこと。

ワ

ワイカヂ　脇柁。（一）船の兩方の腹につきたる板あり、艫にて上下するやうにしたる物。（二）櫓のこと柁にあらず。

ワカツキノイリソコヲ　若月の入損ね。三日より十三日までの月の入損ねは必ず日和替る、故に若月は入るを見、老月は出るを見るなり、此時節天象變らず、雲立よければ、明日は日和と知るべし。

ワキアラシ　脇風。東へ行くに北か南より吹く風を受けて行く類を云ふ。

ワキタナイタ　脇棚板。

ワキシホ　脇潮。泊門などの如く汐の早くして岸にあたる處にては、汐は西に下るとも兩岸へ當る潮跡へ戻るものなり、之を――といふ。

ワキトリ　脇取。帆の――。――綱は帆の最下部兩方につく帆綱。――の車は飛蟬の條を見よ。

ワキノマ　脇の間。帆棚の左右にて、帆の脇取の下る處。此處矢倉無し。――の舟梁。

ワキロ　脇櫓。櫓のこと。

ワシグチ　鷲口。（一）床の小名、丸口の條を見よ。桂折れたる時大綱を引き、艫に櫓二丁立てゝ桂を取るべし。

ワタシ　渡。他船に乘り移り。又は船より上り下りする板、長一二間より三四間までありり、取廻しをよくするため三四ヶ所に車をつく。

ワタスノカミ　和多須神。隱岐國の一ノ宮にて、知夫郡由良媛大明神の舊名なり、舟の守護神とす、又佐渡國に渡海神社あり、祭神は五十猛命なり、又備後沼隈郡鞆に渡社あり、祭神は舟玉神にて實は猿田彦神なり、又薩州穎娃郡渡海（わたす）明神は牧聞（ひらきゝ）神社と號す、祭神は前に同じ。

ワタツミ　滄海。海神。海童。海若。海の神の名、又、海。

ワラツナ　藁綱。藁にて打ちたる綱、海河船共に用ふ。

ワラビツナ　蕨綱。蕨の根を干して打たる繩、舟の繋綱、碇綱、又はかもじ等に多く用ふ。一名しつら。

ワラビテ　蕨手。高欄々干の留りにあり、形早蕨の如し。

ワルヱノクモ　字未詳。冬より春迄のは此雲早風降物の兆、夏秋は夕立の兆、東西南北によらず、すゝば色の雲湧き出で雲先づ裂くるをいふ。

井

井トキノアメ　亥時雨。亥時にふり出す雨は降りふらず曇る。

井センドウ　居船頭。沖船頭に對していふ。

井チカハブ子　井路河船。河内國の在々にあり、荷物運送の小劒先船なり。

井ド　井戸。唐舟は天水を大なる桶の上に簀をひろげ砂をまきて受くるなり、又濁水洗水をたれて清水を取るなり。

井ヌキ　居貫。ゆぬきの轉訛、總瓦の緣の釘をもつ所、又――の幅置て釘をぬく所をくぼかにするを隈どるといふ。

井ノコグモ　猪兒雲。夏の夜など空行く離れ雲歟。空はらふ月の光におひにけりはしりちりぬるゐのこ雲かな、此歌疑はし。

井ブキ　居吹。三五七日吹續くこと。

井マス　居屋。屋をかけて船より垢を外にとる樋。

井マチ　居待。居待月の略、十八日の夜の月。しらなみをいよにめぐらし――わかしのとには云々。

ヱ

ヱリカタ　剡形。檣の條を見よ。

ヱガク　畫く。船の表に龍頭鷁首を畫きて飾とす。

ヱツトウ　字未詳。釣流し船の方言、えつゝう同じ。

ヲ

ヲウセビヨリ　四月中の日和の名。一名しろびより。

ヲカケ　尾掛。尻掛綱の條を見よ。

ヲケジリ　一名をけぞこ。艫航の端にて戸立のつく所。

ヲケフ子　桶舟。攝河の在郷にて、下糞をとるに桶をすゑて之に入れおく舟。

ヲシヤナ　字未詳。東南の風、西國の方言。

ヲシヤバヘ　字未詳。ヲシヤナに同じ、西國の方言東南の風。

ヲナミ　雄波。めなみに對する浪の名。雌波二ッ打て此波一ッ打つなり。

ヲナゴタツ　女子立。によし、みよしに同じ。

ヲフサ　虹。にじ同じ。さらにまたそりはしわたす心地して――かゝれるかつらきの山。

ヲモユ　水。古き方言にて水をいふ。小船を男二人のりて漕わたるを何するぞと問へば冷なる――を汲みに云々。――も喉に通らぬ。案ずるに舟子の通語にてゆは水の義なれば――は飲むべき料の水――の義歟或はみもひの轉訛歟。猶可考。

ヲリコミツナ　折込綱。まき込ろくろの條を見よ。

ヲリコミクワン　折込鐶。檣の條を見よ。

ヲリコミツナ　折込綱。一名根上綱。檣を立る時は折込鐶につけておろす故と云。檣をこかす時は引

上る故、根上綱なり。

ヲリコミテコ　折込手子。牆の立てこかし、又は碇をおろす具。

水上語彙終

337391

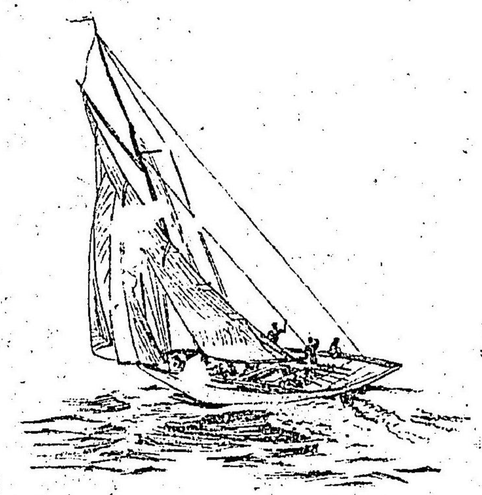
本號表紙畫は下村爲山君の意匠に成り、其標題の文字は帝國實物取調委員東京美術學校講師小杉楓邨翁の揮毫に成れり、

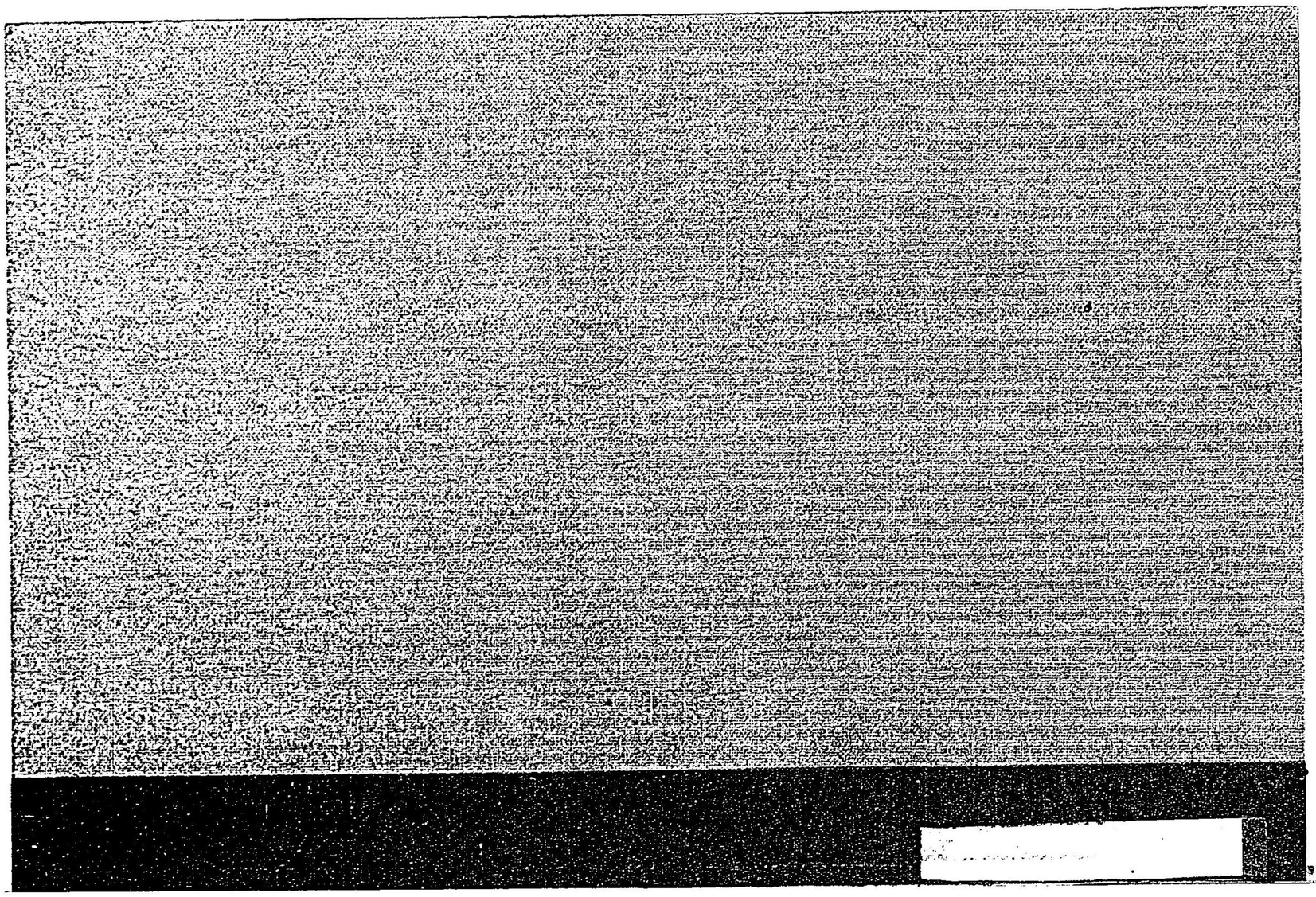
明治廿七年一月九日內務省許可
明治三十年七月二十五日印刷發行

編輯兼發行人　東京赤坂區田町七丁目四番地寄留　泉谷氏一
印刷人　東京々橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎
印刷所　東京々橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所
發行所　東京赤坂區田町七丁目四番地光村方　智德會

30

3229





814.
Ko476s
v.

077856-000-3

814-Ko476s

水上語彙

幸田　露伴／著

M30. 7

DAC-1256